2022 年度

第９回

# アクサ ユネスコ協会
# 減災教育プログラム

2023 年3月

# 活動報告書

# ～ 目 次 ～

**【小学校・小中一貫校】**
1. 函館市立えさん小学校（北海道）【P. 4】
2. 釜石市立双葉小学校（宮城）【P. 10】
3. 北区立なでしこ小学校（東京）【P. 12】
4. 浜松市立砂丘小学校（静岡）【P. 19】
5. 竹富町立西表小中学校（沖縄）【P. 24】

**【中学校】**
6. 石巻市立桃生中学校（宮城）【P. 27】
7. 気仙沼市立条南中学校（宮城）【P. 31】
8. 只見町立只見中学校（福島）【P. 34】
9. 猪苗代町立猪苗代中学校（福島）【P. 36】
10. 取手市立戸頭中学校（茨城）【P. 38】
11. 魚沼市立広神中学校（新潟）【P. 42】
12. 新潟市立内野中学校（新潟）【P. 44】
13. 静岡市立清水飯田中学校（静岡）【P. 48】
14. 奈良教育大学附属中学校（奈良）【P. 52】
15. 岡山市立操南中学校（岡山）【P. 54】
16. 福岡市立春吉中学校（福岡）【P. 56】
17. 大牟田市立宮原中学校（福岡）【P. 58】

**【高等学校】**
18. 北海道静内高等学校（北海道）【P. 62】
19. 宮城県気仙沼向洋高等学校（宮城）【P. 68】
20. 宮城県多賀城高等学校（宮城）【P. 70】
21. 酒田南高等学校（山形）【P. 72】
22. 福島県立白河高等学校（福島）【P. 76】
23. 長野県松本深志高等学校（長野）【P. 79】
24. 関西学院千里国際高等部（大阪）【P. 82】
25. 建国高等学校（大阪）【P. 85】
26. 愛媛県立松山工業高等学校（愛媛）【P. 86】

| | |
|---|---|
| 学校名 | 函館市立えさん小学校 |
| 担当教員名 | 校長　長浦　紀華 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域と学校が一体となって取り組む防災・減災教育 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（○）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（○）地域発信　（○）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （１～６学年　４６人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １０　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １００　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦２０２２年　９月　５日　～　西暦２０２３年　２月　２８日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（　）地震　（　）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（火山） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

本校は、令和４年度えさん小グランドデザインにおいて、自分の命と健康を守ることのできる安全教育として、地域と連携した防災教育の推進を重点取組事項として掲げており、下記の資質・能力の育成をねらいとしている。

○津波や火山などの様々な自然災害等の危険性、安全で安心な地域づくりの意義を理解し、安全な生活を実現するために必要な知識や技能（知識・技能）

○自らの安全の状況を適切に評価するとともに、必要な情報を収集し、安全な生活を実現するために何が必要かを考え、適切に意思決定し、行動するために必要な力（思考力・判断力・表現力等）

○防災・減災に関する様々な課題に関心を持ち、主体的に自他の安全な生活を実現しようとしたり、安全で安心な社会づくりに貢献しようとしたりする態度（学びに向かう力・人間性等）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

○令和４年度の重点的な取組

・防災マップづくり（５・６年　総合的な学習の時間）
・専門家による活火山「恵山」の出前授業（３～６年　総合的な学習の時間）
・防災ノートの活用（全学年　各教科等）
・中浜町会との合同避難訓練（全学年　特別活動）

| | |
|---|---|
| ８月 | ○関係部局との打ち合わせ<br>・恵山教育事務所　・函館地方気象台　・恵山支所地域振興課<br>○事前アンケートの実施<br>・児童を対象とした火山や防災に関するアンケート |
| ９月 | ○火山について　出前授業<br>・函館地方気象台　長谷川貴彦　火山防災官 |
| １０月 | ○恵山　フィールドワーク<br>・恵山支所地域振興課　佐々木優　主事 |
| １１月 | ○防災マップづくり<br>・警戒レベルに応じたマップづくり<br>○地域合同避難訓練（津波）<br>・感染症の関係で、学校単独での実施<br>・消防、市役所防災部局の専門家から助言 |
| １２月 | ○学習参観日<br>・防災マップ保護者へ発表<br>○避難所運営体験<br>・恵山支所地域振興課　佐々木優　主事 |

| | |
|---|---|
| １月 | ○防災マップの手直し<br>・専門家の助言を受け、修正 |
| ２月 | ○恵山地区防災フォーラム<br>・地域住民への発表 |

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

○研修会を受けての自校の活動の変更・改善点
- 専門家や関係部局との積極的な連携（出前授業・フィールドワーク・避難所体験）
- 防災教育の充実に向け、担当教諭の国の研修受講（独立行政法人教職員支援機構「令和４年度学校安全指導者養成研修」）
- 地域住民への還流（防災フォーラムの開催）

○昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。
- 大規模な災害時に起こりうることを想定した避難訓練の実施
- 防災・減災教育の指導計画の改善

○助成金の活用で可能になったこと。
- トランシーバーの購入により、大規模な災害を想定した避難訓練が行うことができるようになった。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

○児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、安全な生活を実現するために何が必要かを考え、適切に意思決定し、行動するなどの資質・能力を、教科横断的な視点で育成することができるよう、防災・減災教育の指導計画を作成した。

函館市立えさん小学校　防災教育指導計画

○防災ノート（北海道教育委員会）を活用し、各教科等で防災・減災に関する内容を学習した際に、防災ノートを活用し、「学習したこと」と「自分たちにできること」を記入させた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。
〇日本には活火山が多いこと、火山が噴火する原因や起こりうる被害、被災時に求められる行動などについて等の防災・減災への理解が深まった。
〇避難訓練等を通じ、状況を判断し、安全な行動ができることや周りの人への安全への配慮ができるなどの思考・判断ができるようになった。
〇火山の噴火や地震や津波などの自然災害への関心が高まった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
〇保護者アンケートから次のような意見が寄せられた。
・子どもの取組を通じ、活火山「恵山」の噴火に対する防災意識が高まった。
・子どもたちに噴火すると起こる危険を、平時のうちに教育することは大切である。
・実際に噴火が起きた際に、どのような行動をとればよいのか指導することがすばらしい。
・子どもの学習を通じて、火山噴火のメカニズムについて理解が深まった。
・噴火に伴う災害の危険について、知っているようで知らないこともあった。
・災害時に、的確な判断に基づき安全を確保するための行動がとれるか自信がない。　①

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
〇恵山地区の防災・減災教育を総合的な学習の時間を要とした教育課程に位置付け，地域（町内会等）や関係機関と連携した教育活動を実施したこと。
〇恵山地区防災フォーラムや町会との合同避難訓練の実施など、地域と学校が一体となった取組を行ったこと。
〇活火山をテーマにした防災・減災教育を行ったこと。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
〇今年度は「火山」をテーマに防災・減災教育を行ってきたが、本校は「津波」や「水害」のリスクも高い地域であることから、令和５年度は「津波」、令和６年度は「水害」をテーマに防災・減災教育を進めていきたい。

7）その他（※特にあれば記述）
〇本助成に係る防災・減災教育の取組を報道でも取り上げていただいたことで、道内の他校からも照会があるなど、自校の取組だけではなく広く防災・減災教育の必要性等を周知することができた。

**えさん小５、６年、活火山恵山学び防災マップづくり**

2022年10月16日 3時00分　函館市

地域のための防災マップづくりのため火山噴火に関する知識を学ぶ児童たち

G 拡散写真を購入

函館えさん小学校（長浦紀章校長）の５、６年生が７日、恵山火口原駐車場周辺やかつら公園などをバスで回り、活火山である恵山の噴火に備えた防災・減災について学んだ。児童は学んだ知識を基に、函館市のハザードマップをベースとした地域の防災マップづくりに取り組む。

総合的な学習の一環。市が公表しているハザードマップを基本に、児童が現地で学んだことを文字や写真で補足することで、小さい子どもや高齢者などにより優しいやすい、地域の防災マップを作ることを目的としている。

今年は恵山地域における火山災害に関連した、避難場所などの情報を収集。フィールドワークには市恵山支所地域振興課の佐々木健主事が同行し、恵山の説明や、噴火警戒レベルなどを解説。「噴火警戒レベル２になると火口周辺へと続くゲートを封鎖し、交通規制をかける」ことや、「レベル５になると噴石範囲が３キロにも及ぶ」ことなどを学んだ。

児童は熱心にメモを取りながら、気になったことを質問したり、タブレット端末で写真を撮ったり必要な情報を集めた。５年の岩佐琉生さん（１２）は「火山としての恵山について知らないことも多く、とても勉強になった。学んだことを生かし、防災マップづくりに役立てたい」と話していた。

同校は火山災害のほか、津波や土砂災害と地域で起こりうるテーマを決めて来年度以降も取り組みを継続する。長浦校長は「子どもたちが実際に自分の目で見て学んだ、災害に対する知識は決して無駄にはならない」とし、防災マップの内容を充実させていきたいとしている。（野口雅彦）

函館新聞　2022.10.16

令和 4 年10月19日 【水曜日】 北 海

函館えさん小 地域性踏まえ防災教育

# 地域の意識向上目指し

## マップ作成・配布へ活動

【函館発】函館市立えさん小学校（長浦紀華校長）は本年度、民間企業による減災教育プログラムの助成を受け、地域の特性を踏まえた防災学習に力を入れている。高学年を対象に9月上旬には、函館地方気象台職員による講話を実施。今月7日には、地域の災害危険個所を巡るフィールドワークを行った。今後は防災マップの作成に取り組むとともに、マップの配布や学習成果発表会を通して、地域住民の防災意識向上を図る活動を計画している。

同校が所在する恵山地区は、活火山「恵山」の噴火をはじめ、津波や土砂災害の危険性がある。

こうした実態をもとに、児童生徒が自然災害に備えるための危機意識を主体的に考えさせる教育活動に力を入れており、本年度は教職員による講話を実施。今月7日には、地域の災害危険個所を巡るフィールドワークを行った。今後は防災マップの作成に取り組むとともに、マップの配布や学習成果発表会を通して、地域住民の防災意識向上を図る活動を計画している。

同校が所在する恵山地区は、活火山「恵山」の噴火をはじめ、津波や土砂災害の危険性がある。

こうした実態をもとに、児童生徒が自然災害に備えるための危機意識を主体的に考えさせる教育活動に力を入れており、本年度は教職員による講話を実施。今月7日には、地域の災害危険個所を巡るフィールドワークを行った。今後は防災マップの作成に取り組むとともに、マップの配布や学習成果発表会を通して、地域住民の防災意識向上を図る活動を計画している。

9月上旬には、函館地方気象台の長谷川豊火山防災官ら2人を講師に招き、恵山地区で発生の恐れのある自然災害について学ぶ授業を実施。

児童は、長谷川火山防災官による恵山の火山活動の状況や警戒・注意すべき事項について耳を傾け、身近な地域の災害発生危機について熱心に記録を取った。

今月7日には、児童の「甚大な被害が予想される場所を自分の目で確認したい」という意見を踏まえ、市のハザードマップに基づいて地域の危険個所を巡るフィールドワークを実施。

6年生の二本柳拍海さんは「火口や自宅付近でどのような火山現象が起こるのかが分かった。今後、取り組む防災マップ作りで学習内容を生かしたい」と話した。

同行した恵山支所地域振興課の佐々木優主事は「児童が災害時に想定される危険を学ぶことで、適切な行動ができるようになるとともに、保護者や地域にも防災意識の向上が広がっていけば」と期待を寄せた。

今後同校では、フィールドワークで取材した内容を調べ学習での成果をまとめ、地域住民が理解しやすい防災マップ（火山編）の作成に取り組む。完成後は地域に配布するとともに、町会と連携し、火山が噴火した際の防災、減災に関する発表会を行う予定。

ハザードマップに示された地域の危険個所を確認

アクサ生命保険㈱と日本ユネスコ協会連盟による減災教育プログラムの助成校に選ばれた同校は、同事業の計画に基づき、高学年の総合的な学習の時間に児童が防災や減災について学習した内容を地域に働きかける学習を企画している。

北海道通信　2022.10.19

フィールドワーク

避難所体験学習

ＣＳえさん小　恵山地区防災フォーラム

16日（月曜日）　函館新

## 恵山噴火災害に備える

### えさん小で防災フォーラム

自分たちで調べまとめた火山防災マップを紹介する児童ら

函館えさん小学校（長浦紀華校長）主催の「恵山地区防災フォーラム」が2月28日、同校で開かれた。同小5・6年生や地域住民など約50人が参加し、恵山が噴火した際の避難行動などを共有した。

5・6年生は今年度、総合的な学習の時間に、恵山噴火を想定した火山防災マップの作成に取り組んできた。学習成果を地域住民に披露するのが目的。

噴火警戒レベル2が発表された際の火山現象をまとめたグループの発表では、大きいものでバスのタイヤほどの噴石が飛んでくる可能性があることなどを説明。「規制区域に立ち入り死傷する事故が多いので、自己判断は避けて」などと呼びかけた。

参加者は「防災かるた」にも挑戦。かるたには「あせらず避難は駆け足で」「家族で話し合おう避難場所」などと書かれ、子どもから大人までが一緒に楽しみながら、防災への知識を身に付けた。

6年の手代森楓愛さん（12）は「噴火の危険を改めて知ることができた。今回の防災マップで紹介した避難経路などを、地域の人に役立ててもらえたら、うれしい」と話していた。

同小が今年度、日本ユネスコ協会連盟とアクサ生命による「減災教育プログラム」の助成校に選ばれたため、阿部辰峰教頭が昨年9月、教員研修会として宮城県気仙沼市を訪ね、東日本大震災被災地を視察した教訓などを報告した。

長浦校長は「災害が発生した場合に備え、地域の被害を最小限に食い止めることができる体制づくりに役立てていきたい」と話していた。（野口喜清）

函館新聞

20230308 道南　(函館)

北海道新聞　第3種郵便物認可

# 地域防災活動 将来の担い手に

## 函館・えさん小児童

## 噴火時の避難学び、マップ作成

東日本大震災12年

函館市恵山地区のえさん小（長浦紀華校長、46人）が、噴火や津波の危険が高い同地区の特性を踏まえた防災学習に力を入れている。本年度は、5、6年生の児童が活火山の恵山（618㍍）が噴火した際の注意点や避難方法を専門家から学び、「防災マップ」を作成して地域住民に説明した。高齢化が進む同地区で、将来の地域防災の担い手づくりにつなげる試みだ。（梶運太郎）

手作りした恵山噴火に備えた防災マップとえさん小の児童たち

海岸付近や斜面の近くにも住宅がある同地区では、火山噴火以外にも津波や土砂崩れの危険も大きい。防災学習は5、6年生を対象とし、2023年度は津波、24年度は土砂災害をテーマに防災学習に取り組む。

火山噴火の学習で、児童16人は昨年9月、函館地方気象台の職員から恵山の噴火の仕組みについて説明を受け、10月には火口周辺や校区内の危険箇所をバスで巡るフィールドワークを実施。市恵山支所の職員も同行し「バスのタイヤくらい大きい噴石が飛んでくるかもしれない」など噴火時の危険も教わった。

児童たちはその後、噴火の規模に応じた避難方法、注意事項などをまとめたマップを作成。市のハザードマップを中央に貼り付け、自分たちで撮影した同地区内の避難場所の写真も載せた。

小規模な噴火についてまとめたマップでは「規制区域には立ち入らない」などの注意点を、大規模噴火時のマップでは噴火直後に避難する「一時集合場所」、その後の避難場所を地域ごとにまとめた。6年の二本柳拓海君(12)は「分かりやすいように読み仮名を付けたり、言葉の意味の説明を増やした」と話す。

2月末には、父母や町会役員ら地域住民を集めた防災マップの発表会を行い、児童たちは噴火の危険性や避難場所を説明した。作成したマップは校内に掲示しており、新年度以降も新入生や地域住民に見てもらう。長浦校長は「防災学習を通して、子どもたちに地域づくりの担い手としての自覚を持ってもらいたい」と話している。

©北海道新聞社

（3）　（第三種郵便物認可）

函館えさん小 地区防災フォーラム

## 安全な行動取れるよう

### 減災プログラムの成果地域に

【函館発】函館市立えさん小学校（長浦紀華校長）は2月28日、コミュニティ・スクール（CS）の一環で、えさん地区防災フォーラムを開いた＝写真＝。5・6年生の児童16人と同部長峰教頭がクサユネスコ協会の減災教育プログラム活動を通じて学んだ防災知識を地域住民に広く周知、地域の防災力強化につなげるきっかけとした。

同校は今年度、文部科学省後援事業「クサユネスコ協会減災教育プログラム」の協力校に選定、全国で26校が協力校の指定を受け、1年間を通して、SDGsやESDを踏まえた新しい視点での防災・減災教育や、被災地の教訓を生かした教育実践などについて学びを深めている。

今回、同校が実施した防災フォーラムは、発表や参加型プログラムを通じて小学生と地域住民が共に防災について学ぶ機会を設定。学校と地域が災害発生時にスムーズな連携のもと活動できる防災体制の作り方について共通理解を図ることで、今後の防災教育の推進や地域防災体制の充実・強化に資することをねらいとした。

同校の所在地は活火山・恵山があり、太平洋に面している地域。これまで高学年の児童を中心に、函館地方気象台職員から、噴火の仕組みを学んだり、フィールドワークで噴火のレベルに応じた対応を学習したりしてきた。昨年1月までに防災マップの作成や地域住民との合同避難訓練、段ボールベッド作りなどの避難所体験も行った。

フォーラムの開会に当たり、長浦校長は児童が総合的な学習の時間に取り組んだ防災学習など自校の取組を説明。「恵山地区の環境は、噴火や津波、土砂災害の可能性が考えられる。児童が幼から安全な行動ができる力を育てていきたい」と話した。

同部教頭は事業の一環として、昨年9月に気仙沼市で行われた教員研修会について報告。東日本大震災による気仙沼市の被災状況や市の沿岸地区にある「杉の下高台」の事例を紹介。高台は海抜13㍍に位置し、市の指定避難所になっていたものの、実際は18㍍の津波に襲われ、地域住民の約3割に当たる93人が犠牲になったことなどを説明した。

児童は、総合的な学習の時間に作成した防災マップをもとに、実際に地域を歩いて撮影した写真や火山現象、交通規制、規制区域、避難方法を分かりやすくまとめたものを示した。

また、3つの噴火警戒レベルに応じたグループで防災マップを紹介。噴火警戒レベル5―1では、小規模な噴火や大きな噴石が火口から1㌔程度まで飛散する。児童は注意事項として、テレビやラジオ、防災無線などの情報を聞いて、落ち着いて避難するよう喚起し、地区ごとの避難所を写真で紹介した。

最後に地域住民と共にかるた遊びを通じて、防災のポイントを確めた。

児童の一人、手代森穂愛さん（6年）は「フィールドワークで、避難場所の位置や距離を理解することができた。恵山地区には、噴火や津波があることをあらためて知ったので、今後も学習を深めたい」と意欲を見せた。

北海道通信

| | |
|---|---|
| 学校名 | 岩手県釜石市立双葉小学校 |
| 担当教員名 | 黒渕　貴典 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域の災害を理解し、自らの命は自分で守る子どもの育成 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間、特別活動、特別な教科道徳、各教科） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（○）体験学習<br>（○）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（　）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （１～６学年　１３５人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １８　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | およそ３００　人　【保護者・地域住民・その他（　市役所職員　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　９月　１日　～　西暦　２０２３年　３月　２５日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（○）津波　（　）台風　（　）洪水　（○）河川氾濫　（○）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①人としての在り方や自らの生き方を考え、自他の生命を尊重し、思いやりや助け合いの心を養う。

②郷土を愛し、誇りに思う心を育てるとともに、復興を目指す郷土の中で自らの役割と責任を果たそうとする態度を養う。

③自然災害発生の原因をつかみ、災害を防ぐための努力や工夫について考え、防災意識を培う。

④災害から命を守るために必要な能力や生き抜くための衣食住に関する基本的な技能を身につけさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

| | |
|---|---|
| 低学年 | ①自然災害の特徴<br>②救護活動で働く人々の様子や思い<br>③校内の避難経路や避難方法の確認と地震から身を守る方法 |
| 中学年 | ①過去の郷土の災害の様子、災害を防ぐための工夫や努力<br>②ライフラインの大切さ、下水やごみ処理の仕組み<br>③地域の避難場所や危険個所の確認、地域の防災活動 |
| 高学年 | ①大地震・大津波発生の原理やその被害<br>②被害を受けた交通網や産業・住宅や街の復旧・復興の様子<br>③家庭でできる防災対策 |
| 全　校 | ①地域総合防災訓練（日本海溝・千島海溝、津波）<br>②地域の危険個所調べと安全マップの進化（付加・活用）<br>③日本海溝・千島海溝、津波について全校が学ぶ会の開催 |

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・専門家を招聘し、自然災害のメカニズム等の講話をしていただくことで、自他の生命を守る対処行動を理解することができた。

・実践集を作成したことで、児童や保護者、地域の方々の減災・防災に対する意識啓発を図ることができた

・昨年度まで活用していた安全マップを土台として、今年度は避難場所や避難経路等をより一層見やすく、理解しやすい進化版の安全マップを作成することができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・防災・減災教育のカリキュラムマネジメントを行い、各教科や特別の教科道徳、特別活動、学校行事等の関連を見直し、体系的・系統的に指導することができた。

・ゲストティーチャー（警察、消防、自衛隊、市役所等）や自然災害の専門家から直接話を聞くことで、より一層自然災害を自分事として捉え、減災・防災に対する意識を高めることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・各教科や特別の教科道徳等の学習を通して、地域のよさや釜石のよさを多面的に学び、今まで以上にふるさとに対する誇りや郷土愛を育み、命の大切さや心の健康を真剣に考えることができた。

・安全な避難の対処行動について、従来通りではなく、様々なケース（登下校中、学習中、休み時間、休日等）を検討して避難訓練を実施することで、児童は複数の避難場所や避難経路等を把握し、災害や減災・防災への理解や意識を高めることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・避難訓練について、学校や地域、行政が協働して取り組むことで、災害時における被害の軽減と防災意識の向上、児童を含む地域住民の繋がり等をより一層高め、連携強化を図ることができた。

・児童が郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、教師は各教育活動を通して３つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を指導し、減災・防災教育の充実を図ることができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・ふるさとのよさを児童に再認識させ、家庭や地域、関係機関と連携・協働しながら減災・防災に関する学習を深めることができたこと。

・児童一人一人に災害に対する危機意識を高め自分事として捉えさせるために、様々な分野の職業の方をお招きして話を聞くことで、命の尊さや人の絆の大切さ等を考えさせることができたこと。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①低学年…地震や津波等の自然災害の事に関することを、防災かるたに表し遊びながら災害について学んだり、対処行動を知ったりしながら覚える。

②中学年…先人の教えや釜石の津波石碑等を実際に見たり聞いたりして、より一層防災意識を高める。

③高学年…地域の避難場所や危険個所を示した安全マップを作成し、地域の方にも紹介して情報を共有する。

※全学年、学んだ内容を保護者や地域の方にアウトプットする機会を設ける。

7）その他（※特にあれば記述）

・本校では、「アクサ ユネスコ 減災教育プログラム」の助成金により、「防災・減災教育実践集」を作成したので参照していただきたい。

| | |
|---|---|
| 学校名 | 東京都北区立なでしこ小学校 |
| 担当教員名 | 福盛田　嘉子 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 志茂防災メッセンジャーになろう！！ |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な活動の時間・社会科　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（〇）教科連携　（〇）地域発信　（〇カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　3.4.5.6　）学年　（　320　）人 |
| 活動に携わった教員数 | 10　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 50　人　【保護者・地域住民・その他（国土交通省・災害ボランティア）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦 2022 年 9 月～　　西暦 2023 年 3 月 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（　）津波　（　）台風　（〇）　洪水　（〇）　河川氾濫　（　）　土砂　（　） |

活動報告

**1）活動の目的・ねらい**

災害が起きた場合の地震危険度が非常に高く、外水氾濫の危険と隣り合わせの地域に住む児童が、自分たちの町に愛着をもつとともに、防災・減災意識を高めることを目的とする。

日常生活の様々な場面で発生する災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる児童の育成自立・共生・支え合い

①地域防災への関心・追究
　地域防災に関心をもち、進んで体験・追究する。

②コミュニケーション能力
　相手に応じて話したり、聞いたり思いを伝えたり、受け取ったりする。

③自己の生き方の気付き
　人のかかわりの中で、自分のよさに気付き、これからの自分の生き方を考える。

**2）実践内容・実践の流れ・スケジュール**

**①総合的な学習の時間を柱としたカリキュラム開発を行う**

| 学年 | 単元名<br>⇒発信先 | 活動内容 | 学年別プログラム |
|---|---|---|---|
| 3年 | 「安全について考えよう」<br>⇒保護者 | 〇避難訓練の意味を考える。<br>〇防災について情報を収集する。<br>・煙体験・消火器体験・防災倉庫見学（北区防災センター）<br>〇体験したことをもとにまとめる。<br>〇まとめたことを保護者に伝える。 | 防災指導・消火器訓練<br>※北区防災センター |
| 4年 | 「志茂防災メッセンジャーになろう」<br>⇒地域・保護者 | 〇志茂の町における災害の危険度について考える。<br>〇地震の観点から住んでいる町会周辺の防災設備や危険個所について調べる。<br>・地域めぐり（地震）<br>〇調べた事をもとに防災マップにまとめる。<br>〇まとめたことを地域の人・保護者に発表する。 | 起震車体験<br>※北区防災課 |
| 5年 | 「安全な生活を求めて」<br>～志茂の取り組み～<br>⇒他学年 | 〇志茂の町と洪水について考える。<br>〇洪水について調べる。<br>・災害発生のメカニズム、被害、避難方法<br>〇災害発生時の避難所運営について調べる。<br>〇調べたことを発表する。 | アルファ米体験<br>※青少年地区委員 |
| 6年 | 「志茂の未来をえがく」<br>～幸福な町作り～<br>⇒地域振興室 | 〇志茂の町の課題について考える。（福祉、防災、多文化共生など）<br>〇未来像のイメージをもち、町づくりの方法などの情報を基に解決に向けた取り組みを考える。<br>〇志茂の町の課題について、課題解決のための提案を資料にまとめる。<br>〇自分の考えをプレゼンテーションする。 | ＡＥＤ体験<br>※消防署・消防団 |

**②社会科の学習における教材開発**

第４学年「水害からくらしを守る」における荒川を主教材とした教材開発（※詳細は別紙参照）

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①行動力を育む学び

気仙沼市教育委員会教育長小山氏の「行動につながらない学びは学びとは言えない」との言葉を受け、参画や行動・意思決定といった行動力を育むことを意識した学びに学習内容を改善した。行動力を育む上では情報収集が必要となる。今回の助成を受け、本校では学区域の地図データの購入に充てた。そのため、自分たちの地域を巡る際に活用することができた。また、その他にも多様な体験学習を組み込むこととした。

②メッセンジャーとしての伝災

災害について伝えることの必要性を学び、本校における伝災として発信することを意識した活動を組み込んだ。

③防災ネットワークの再構築

地域は教材・地域は教室・地域は先生のもと、コロナ禍で実施が困難であったネットワークを再構築し連携を図る事とした。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

○総合的な学習の時間を柱としたカリキュラムの再構築

本校においては、兼ねてより培った地域防災・減災教育があった。しかし、コロナの影響を受け実施が困難となりこれまで育んだ防災・減災教育が一時中断された状態となっていた。今回の助成を受け、活動内容を見直し今後も本校において防災・減災教育が根付くよう基本的なカリキュラムを構築することができた。

○身近な地域に視点を当てた教材開発

カリキュラムマネジメントとして、今ある教科の中でどのように防災・減災教育を組み込むか考え特に社会科における学習内容と関連させたカリキュラム開発を工夫した。身近な地域を視点に充てた教材を開発することで、より切実感をもった学びへとつながった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

○地域防災への関心・追究

自分たちの住む地域における災害について関心を持ち、当事者意識をもって追究することができた。

○コミュニケーション能力

自分たちが学んだことを基に、伝えることの必要性に気付き、発信することができた。

○自己の生き方の気付き

自分たちも地域社会の一員であるという自覚をもつことができ、自分たちができることを考えることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

○地域の人材ネットワークの再構築

コロナ禍で一度分断されていた、地域の方々とのつながりを再度学習過程の中に組み込むことができた。また、地域教材のさらなる活用として、国土交通省の荒川下流河川事務所の方や地域防災お助け隊（災害ボランティア）の方にも協力を得ることができた。

○保護者、地域への発信

活動に一緒に参加してもらったり、授業公開日に学習の成果を発表したりするなどしてより多くの人に児童の学びを発信することができた。それにより、地域の防災力も上がる事へとつながった。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

○総合的な学習の時間を柱とした「防災メッセンジャー」の育成
○東京防災隣組認定校における人材ネットワークの再構築

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①発達段階を踏まえた系統的な学びの充実

自然災害について学ぶ中で、災害を正しく恐れるということの大切さを痛感した。防災・減災教育においては児童の発達段階を踏まえ、得るべき知識・技能を精査する必要がある。また、学びが継続・発展するよう学年間の学びの内容を調整していく。

②誰でもできる防災教育

防災ネットワークの拡大は担当教員の負担が増し、継続が困難となることがこれまでの経験からも見えている。その為、本年度の活動をベースとして情報を整理・次年度へとつなぐことを大切とする。

７）その他（※特にあれば記述）

資料①活動の様子（写真）
資料②社会科における教材開発（単元計画等）

資料①活動の様子

○国土交通省　荒川下流河川事務所　照明車・ポンプ車等の見学

○起震車体験

○地域巡り（スタンドパイプの設置）

○地域めぐり（消防署見学）

○荒川下流河川事務所の方による講話

○社会科見学（調整池　彩湖）

○AED 体験

# 持続可能な社会の実現に向けた社会科授業づくり

（１）単元名「水害からくらしを守る」

キーワード： 公助の有限性　災害発生後の対処から学ぶ共助　地域社会の一員としての自覚

実践者：東京都北区立なでしこ小学校

（２）学習指導要領と「持続可能な社会づくり」との関連

第４学年の内容（３）、内容の取扱い（２）ウに関連した単元である。気候変動シナリオでは、今後気温が２℃上昇すると洪水発生頻度は約２倍となり、頻繁化・激甚化が予測されている。その様な中で、自身が住むまちにおける水害に備えた対策・対処について学び自分たちができることを考えることは、持続可能な社会づくりを担う一員として確かな実践力を身に付けると共に、地域社会の成長につながると捉える。

（３）研究主題に迫るための手だて

①　切実感や自己有用感につながる教材開発

ⅰ　身近な河川における取組の教材化

本校児童が住む北区志茂においては、荒川・隅田川など多くの河川が密集し、荒川の外水氾濫の危険箇所と言われている荒川陸橋が身近にあることからも水害への防災・減災意識が求められている。児童が小学１年生の際に発生した令和元年東日本台風時では、岩淵水門が閉鎖しなければ、隅田川の堤防を越え氾濫する恐れがあった。しかし、このような危険下においても避難行動として区が指定した避難場所へと避難した家庭はほぼ無かった。児童が自然災害を他人事ではなく自分事として学習できるようにするには、何よりも自分が住む地域の河川の危険性を正しく知り、取組を理解する必要があると感じ教材化した。

ⅱ　公助の有限性に気付かせる取組の教材化

自然災害に備えた社会の強度や災害が起きても素早く復旧できるしなやかさ（レジリエント）の視点から、ハード面・ソフト面双方の公助の取組を丁寧に学ぶことが重要と考えた。その上で、地域住民の主体的なかかわりが見える取組として『大規模水害から命を守る！北区防災ワークショップ』や『防災スタンプラリー』を扱うことで、どんなに公助として取組が行われていても限界があるという有限性に気付き、共助・自助の必要性について、より深く考えられると考えた。

ⅲ　地域社会の一員としての自覚を促すための災害発生後の対処の教材化

自己有用感の構成要素としては、貢献や承認、存在感が挙げられる。災害発生前や発生時の対策においても自身が貢献出来ることや地域の一員として価値ある存在であることに気付くことはできるが、災害発生後の対処までの取組を教材として扱うことで共助の場面が必然的に増し貢献のあり方を学ぶことができると捉え単元構成を工夫した。

②　持続可能な社会との関わりを意識した問いの設定

〇持続可能な社会づくりにおける追究の視点を活用した問いの設定

公助を学んだ上で「なぜ、北区ではワークショップやスタンプラリーのようなイベントを行っているのか」と問うことで、自助・共助の役割と公助への限界（有限性）に気付かせる。また、東京都と北区の水防訓練の様子から、「洪水が発生したとき、被害を最小限におさえるために大切な事はなんだろう。」と問うことで、関係諸機関の連携（連携性）の大切さを理解させる。対策や対処を追究した後、二度に渡り「わたしたちにできることは」と問うことで、自身の行動の重要性（責任性）の自覚へとつなげる。

③　将来につながる現代的な諸課題を踏まえて選択・判断する学習の充実

〇対策・対処の二場面からの選択・判断の実施

東日本台風時の警戒レベルとそれに相反する避難行動からその問題点に気付かせ、自助・共助において＜今からできること＞＜災害が起きそうな時にできること＞の観点から自分たちができる水害への対策を考えさせた。さらに、災害が起きた後の自身の行動を考える時間を意図的に設けた。モデリングとして、地域災害お助け隊の事例を学ぶことで、社会への関わり方の視点を広げる。さらに、「多くの人の命を守り、住み続けられるまち」という未来像からバックキャスティングすることで、今からでも私たちにできることがあるということに気付かせ持続可能な社会づくりの担い手として実践できる児童を育む。

④　本実践の授業づくりのポイント（①から③に加えた本実践ならではのポイント）

〇学びを通してタイムライン（行動計画）を作成し、確かな実践力へと結びつける。

〇社会科だからこそできる防災・減災教育として人の営みを通して学ばせる。国土交通省・北区防

災課・青少年地区委員・地域災害お助け隊と様々な人の営みを通して社会参画のモデルとして示していく。

（４）指導計画

| 学習過程 | 主な学習活動・内容<br>ＳＤＧｓとの関連 | 本時の問い | 【持続可能な社会づくりの概念】<br>追究の視点 |
|---|---|---|---|
| 課題把握 | ①地域で発生した自然災害の種類と災害の様子を理解し、災害に関心をもつ。<br>②東日本台風の様子に着目し、防災や減災の視点から学習問題を設定する。 | ①東京都では、どのような自然災害が起きていたのだろう。<br>②東日本台風では、なぜわたしたちの暮らしが守られたのだろう。 | 手だて①－ｉ |
| | **学習問題①：荒川では、水害に備えてだれがどのようなことをしているのだろう。（対策）** | | |
| 課題追究 | ③国が行っている治水対策について調べる。<br>④東京都や北区が行っている治水対策について調べる<br>。<br>⑤地域が行っている治水対策について調べる。 | ③国土交通省では、水害に備えてどのような事をしているのだろう。<br>④東京都や北区では、水害に備えてどのような事をしているのだろう。<br>⑤なぜ地域の人が参加できるような取組を行っているのだろう。 | 手立て①－ii<br>手立て②【Ⅲ　有限性】 |
| 課題解決 | ⑥洪水発生時の関係機関の働きについてまとめる。 | ⑥洪水が発生した時、被害を小さくするためには何が大切だろう。 | 手だて②【Ⅴ　連携性】 |
| 選択・判断 | ⑦水害への対策について、学習したことを基に自分ができることを考えたり選択・判断したりする。 | ⑦水害に備えて私たちができることはなんだろう。 | 手立て②【Ⅵ　責任性】<br>手立て③ |
| 課題追究 | ⑧気候変動における洪水の増加とＳＤＧｓ目標 11 の趣旨を理解し、発災後の国土交通省の取組について調べる。<br>SDGｓ目標１１<br>住み続けられるまちづくりを | ⑧国土交通省では、水害発生後にどのような事をしているのだろう。 | 手立て①－iii |
| | **学習問題②：荒川で水害が起きた後、今のまちで住み続けるためにはどうすればよいのだろう。** | | |
| | ⑨発災後の地方公共団体の取組について調べる。<br>⑩地域災害お助け隊の取組から発災後の共助について調べる。 | ⑨東京都や北区では、水害発生後にどのような事をしているのだろう。<br>⑩地域災害お助け隊の人たちはどのようなことをするのだろう。 | |
| 選択・判断 | ⑪学んできたことを活用して、水害発生後に自分たちができることを考える。 | ⑪水害発生後に私たちができることはなんだろう。 | 手立て②【Ⅵ　責任性】<br>手立て③ |

（５）本実践の分析

①主教材として荒川を教材化し、公助を丁寧に扱ったことによる児童の変容

【第７時　令和元年の東日本台風での避難行動を振り返り当時の警戒レベルを知った際の児童の様子】

T　全部で９１人いる４年生の中で避難場所に行った家は・・・４家族でした。
T　東日本台風の時の警戒レベルはどうだったのか。実は、警戒レベル４だったんです。
S　４だったの？？避難しないといけなかったんじゃん。
S　ダメじゃん。
S　なんでおれら自宅で待機していたんだろう。

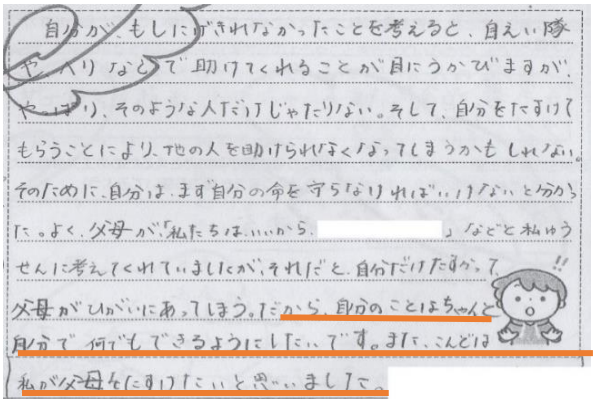
第２時において東日本台風時の避難行動を確認すると、児童３１人に対し避難所へ行った児童は１名であった。当時の事を全く覚えていなかったり、買いだめしたから安心といった声が上がったりと危機意識の希薄さが伺えた。しかし、公助における治水対策を丁寧に学習した後にはその危険性に気付き自分たちの避難行動が間違っていたことをはっきりと認識する姿が見られた。自分たちの行動の責務が子供の中に生まれていた。

②災害発生後の対処を教材化し、選択・判断する学習を行ったことによる児童の変容

＜A 児のふり返り＞

| | |
|---|---|
| 第７時 | 今日、私が授業で学んだこと、発表したことを、実際に実行していきたいです。そして、助けられるだけじゃなく、助ける側にもなりたいです。そして、H さんのように、みんなを助けていき、最後には街だけでなく、世界も救いたいです。これからも防災メッセンジャーとして、今できることをやっていきます。メッセンジャー、がんばります！これからもたくさん勉強していきたいと思います！！！！みんなの命は私が守る！<br>**⇒地域社会の一員としてできることを行いたいという意識は芽生えているが行動の具体化までは至っていない。** |
| 第１０時 | これまで自分にもなにかできることはないかなってずっと考えていたんです。イラストを書いたり、バレエをしたりすることでもなにか役に立つと知りました。私も、もっと大きくなったら積極的にボランティアに参加して、募金や食料提供をしていきたいです。そして、もし今実際に起きたとしたら、イラストなどをかいてわかりやすく説明したり、バレエなどを踊ってみんなを元気づけたりしたいと思います。そして、自分の命も守りつつ、自分のものも守りつつ、家族友達、近所の方、区の方など沢山の人を救いたいです。みんなのヒーローになりたいです！<br>**⇒災害お助け隊の取組を調べることを通して、地域社会の一員として自分の長所を生かしながらできることを具体化できるようになってい** |
| 第１１時 | 水害が起きたあとにやることと水害が起きる前にやることでは全く正反対のことだと思ってました。ですが、起きたあとにやることと、起きる前にやることは、英語をしゃべる、覚えるなどとつながっているんだなと思いました。私も今からできることをいますぐ実行していきたいです。英語も勉強して、そして水害が起きたときに、英語をしゃべられるようになりたいです。そして、イラストの勉強もして小さい子を励ましたりしていきたいです。（M ちゃんみたいな）そして沢山の人を救いたいです。いまからできることをさがしてたくさんがんばります。<br>**⇒水害が起きた後にできることの選択・判断を通して、未来像からバックキャスティングをし現在からもできることがあることに気付いている。** |

【平成３０年実践における児童のまとめ】


自分が、もしにげきれなかったことを考えると、自えい隊や、入りなどで助けてくれることが目にうかびますが、やはり、そのような人だけじゃたりない。そして、自分をたすけてもらうことにより、他の人を助けられなくなってしまうかもしれない。そのために、自分は、まず自分の命を守らなければいけないと分かった。よく、父母が、「私たちはいいから、　　」などと私ゆうせんに考えてくれていましたが、それだと、自分だけたすかって、父母がひがいにあってしまう。だから、自分のことはちゃんと自分で何でもできるようにしたいです。また、こんどは私が父母をたすけたいと思いました。

【本実践における A 児のまとめ】

「水害から暮らしを守るために」

私は水害に備えて英語を覚えることが大切だと思いました。

なぜなら、水害が起きたときに外国の方を助けることができると思ったからです。

具体的に言うと、日本には外国の方もたくさんいます。水害が起きたときに避難所に外国の方がいて、何をすればいいかわからなかったときは大変だと思います。そういうとき、外国の方を助けるのに英語は便利だから、英語を学ぼうと思いました。

また、私は水害が起きたときには地域の人や避難所にいる人と協力していきたいと思います。

なぜなら、協力はとても大事だと思ったからです。

具体的に言うと、協力は共助につながります。実際にその例があります。平成９年にあった阪神淡路大震災です。なんとか助かった人もいました。そのうち、公助が２２．９％だったのに対し、共助は７７．１％でした。そして、まわりにに人がいなかったら、出来ないことはたくさんあります。

このように、水害はいつ起こるかわからないので、いつ起きても色んな人を守れるように、英語などを覚えておくのは大切です。そして起きたあとには協力の心を忘れないようにする、というのも水害時においてとても大切なことだと考えました。

**⇒平成30年実施時よりも地域社会の一員としての責任や義務といった態度が養われている。**

実践を振り返って（実践の成果と課題）

○自然災害の日常化の中で、自分たちが住む地域に流れる荒川を教材として扱うことで、常に自分事として追究することができた。国土交通省など公助を丁寧に取り上げたことで、自分たちの暮らしが守られてきたことに気付くことができた。その上で、自分たちの行動への責任の自覚が芽生えた。

○被災からの復旧の段階における対処の取組を教材として取り上げ、自身の行動を選択・判断する学習を通して、諸課題の解決には地域住民の協力や連携が必要であり自分たちも地域社会の一員であるという自覚をもつことができた。災害お助け隊といった人の営みを学習することは、児童の行動選択の多様化へとつながり児童の有用感が高まった。

●本実践は、平成３０年度の実践を踏まえた上で実施した。比較すると、災害後の対処は対策以上に児童にとって見えにくいものであり困難さが見られた。また、災害後の対処においては、安易にできることではないということにも触れより適切な教材開発や単元の展開を検討していく必要がある。

●４年生という発達段階を踏まえた上で正しく災害を知るためには切実感と共に未来への展望がみられる学びにする必要がある。５年生・６年生における防災・減災教育に関する学習とのつながりを考えより意図的・計画的に内容を作成していく。

| | |
|---|---|
| 学校名 | 静岡県浜松市立砂丘小学校 |
| 担当教員名 | 大石　みや |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 子供の主体性を育てる「新しい避難訓練」をめざして～地域とともに～ |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　社会科・学校運営協議会　） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（　）体験学習<br>（○）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（○）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　全学年　６４人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １４　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ３０　人　【保護者・地域住民・その他（　学校協議会委員　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦２０２２年　４　月　８　日　～　西暦２０２３年　３月　３日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（○）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

従来の型にはまった避難訓練を繰り返すのではなく、「命を守る」ための避難訓練についてまずは教師の危機管理への意識を高め、より有効であろう「新しい避難訓練」の方法を考えていく。「新しい避難訓練」では、地震はどこでも起こりうることをふまえ、子どもが「主体的に行動する」様々な場面を設定していく。登下校中、休み時間、自宅等、様々な場所で起こりうる災害を想定し、自分たちにできることを選択・判断する力を育てる。そして、自然災害発生時には、自分で意思決定をし、自分の命を守る行動につなげる態度の育成を目指したい。防災について様々な視点から情報を得て、子供たちに災害について主体的に学び考えさせ、地域も巻き込んで、防災に対する意識を高めていきたい。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

４月　防災班会…命のパスポートをつくろう
　　避難訓練、引き渡し訓練
５月　避難訓練（津波）
　　＊有識者会議…本校が取るべき避難方法について
６月　学校運営協議会…砂丘地区の防災について
７月　校内研修
　　＊有識者…砂丘小で予想される被害とその防止策について
８月　避難訓練（シェイクアウト訓練の実施）
９月　防災出前講座
　　砂丘自治会、自主防災隊との合同訓練…バケツリレー、消火器の操作等、炊き出し訓練（中止）
10 月　学校運営協議会…地域と取り組む防災について
11 月　防災マップを作ろう（地域住民で学区の下見）
12 月　防災マップを作ろう（地域住民と４年生で学区の調査）
　　防災マップを作ろう（４年生で作成）
１月　避難訓練（無告知）
　　＊有識者会議…今年度の振り返りと来年度の課題
２月　学校運営協議会…地域と取り組む防災について
３月　防災班会…防災マップをもとに、通学路の避難経路を見直そう（地域・保護者ボランティアとともに行う）

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
　昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・海岸沿いの本校に赴任し、「災害からどう子供達や職員を守るか。」そんな思いで参加した本研修だったが、子供は災害から守られるだけのものではない、「自分と他の人の命を救うためにできること」を子供たちと考えていくことが本当の防災、減災教育であるということを学んだ。研修を受けて、従来の避難訓練を見直すとともに、防災マップ作り、学校からの防災情報の発信など、減災教育を多面的な視野で捉えた活動を取り入れることができた。

・私自身が、研修で学んだことを発信し、学校・地域で減災教育の推進役になろうと使命を感じ、動くようになった。
・本校では、登下校中にかぶっているヘルメットを廊下に常備していたが、有識者に、机の周り等の身近な場所に頭を守る物が必要であると指摘を受けた。助成金で一人一つずつ防災頭巾を購入し、椅子に常備することができた。防災頭巾を常備することは、緊急時の安全対策になるだけではなく、児童自身の安全対策への意識を高めることにもつながった。カメラは防災マップ作りに使用した。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・本研修で学んだ東日本大震災の教訓、市教委から派遣された有識者の専門的見地から見た、本校に起こりうる被害の程度等、「もしも起きたら」ということを、職員や地域の方に伝えたことにより、減災教育の重要性を共通理解することができた。
・「減災（防災）教育」を学校運営協議会の熟議のテーマとして提案し、熟議したことにより、自治会と連携して、児童だけでなく、本校学区の住民の減災について考えることができた。
・地域住民と４年生の児童が協力して行った防災マップの作成のための通学路調査、マップ作成、全校児童や、家庭への発信等、避難訓練主体の活動から、児童が主体的に考える減災教育へと発展させることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・避難訓練においては、受け身ではなく、自分の身を守るために考えて取り組むことを意識するようになった。また、参加する態度がより真剣になった。
・地域には様々な防災施設があることに気付いた。また、それを全校に広げる活動により、自分たちが他の人の命を守ることができることにも気付き、自分だけでなく、他の人々の安全に気を配ろうという意識が芽生えた。
・４年生が防災マップ用に撮った写真から発表したいものを選び、国語科の単元「もしものときにそなえよう」で発表原稿を考えた。自分から発信する力がついた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・今年度は、浜松市教育委員会の「有識者派遣事業」も利用した。５月には実際の避難訓練を見ていただき指導を受けた。また、７月には教職員を対象に「砂丘小で予想される被害とその防止策について」講話をいただいた。有識者からご指導いただいたこと、本研修で私が学んできたことを全職員、そして学校運営協議会で共有、検討することにより、砂丘小学校の「新しい避難訓練」について考えることができた。共有、検討の繰り返しにより、職員や地域が当事者として主体的に減災について考えることができた。
・学校運営協議会には、本校の学区である２つの町の自治会長も参加している。防災マップ作成の際には、自治会長から各自治会に発信し、児童と活動する前に、町内の危険箇所や避難場所の下調べを行ったり、各自治会の避難マニュアルを照らし合わせて確認したりするなど、地域が防災について見直すきっかけにもなった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・今年度は、本校（立地条件や規模等）の実態に合わせた避難訓練について考えたいと思い、浜松市教育委員会の「災害有識者派遣事業」を要請した。３回の大学教授の訪問による専門的見地からの助言、そして本研修「減災プログラム」で学んだことを職員や学校運営協議会で共有し、本校にどう取り入れていくか地域を巻き込んで考え、全職員で検討していく体制をとった。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

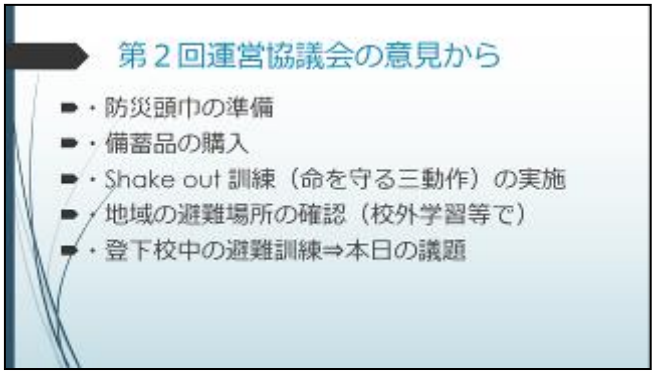
・この活動は、毎年繰り返してこそ、いざというときに実際に行動に移すことができるものだと考えている。今年度取り組んだ訓練を、継続して行っていきたい。
・地域との連携により、登下校中の児童の安全確保、避難行動への対応については触れることができた。来年度以降、児童が在校時に災害が起きた際に避難してくる地域住民への対応などを検討するためにも、地域との合同避難訓練に向けて準備をしていきたい。

補足資料

学校運営協議会での提案・熟議

運営協議会での提案資料（６月）

運営協議会での提案資料（６月）




運営協議会での提案資料（９月）

運営協議会での提案資料（９月）

運営協議会での熟議の様子

運営協議会での熟議内容

４年生防災マップをつくろう

地域のボランティアの方

避難場所を確認しているグループ

津波タワーの上の備蓄用品を確認するグループ

自治会が事前調査のために下調べしてくださった内容

児童がつくった防災マップカード

児童がつくった防災マップカード

防災班会当日事前打ち合わせ

防災班会で発表する４年生

防災班会：確認しながらの下校

防災教育背面に掲示された
４年生が作成した防災マップ

| | |
|---|---|
| 学校名 | 竹富町立西表小中学校 |
| 担当教員名 | 野田山　明宏 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域と共に歩む防災教育 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　各教科 および 総合的な学習の時間（ふるさと学習（海洋教育学習）との連携）　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（〇）教科連携　（〇）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （小２～中３学年　３５人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ２１　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 約２０　人　【保護者・地域住民・その他（公民館，消防団，保育所など）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　４　月　７　日　～　西暦　２０２３年　３　月　２３　日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（〇）津波　（〇）台風　（〇）洪水　（〇）河川氾濫　（　）土砂　その他（　） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

世界自然遺産登録された雄大な自然環境を有し，地域の伝統文化継承に関心の高い地域性に所在する学校として，

・人的資源の不足が問題として上がる中，各発達段階に応じて，地域や災害について知り，考え，自分たちができることを模索する機会とする。

・離島（へき地）という特殊な環境で，有事の際の対応に遅れがでることが想定される。防災及び減災教育をきっかけに，子どもたちが取り組むことで，学校関係者はもとより保護者や地域への減災についての関心・意識を高める機会とする。

また，地域を明るく活発にすることのできる教育活動，人材育成を目標とする。

＜めざす学校像＞
〇花と緑と安らぎに満ちた学校
〇夢を広げ、生き生きと「個」が輝く学校
〇子どもと教師・家庭が信頼しあう学校
〇地域とともに歩む開かれた学校
＜めざす児童・生徒像＞
〇自ら学び、考えて実践できる子
〇自他を思いやり、認め合い、協働する子
〇明るく健康で粘り強い子

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール

・職員研修等を利用し職員の意識づけ，目的の共有⇒こどもたちへ

・ふるさと学習などで地域・自然・伝統行事について学ぶことで，自分たちの生活と自然や災害との関わり方を学び，生活の仕方を見直す。

・避難訓練で消防団や地域，出前講座などで JEMS（日本救急システム株式会社）野生動物保護センター，林野庁など専門機関を随時活用して学習していく。

・各行事（学習）に保護者の協力をいただき，共に活動する中で学ぶ。

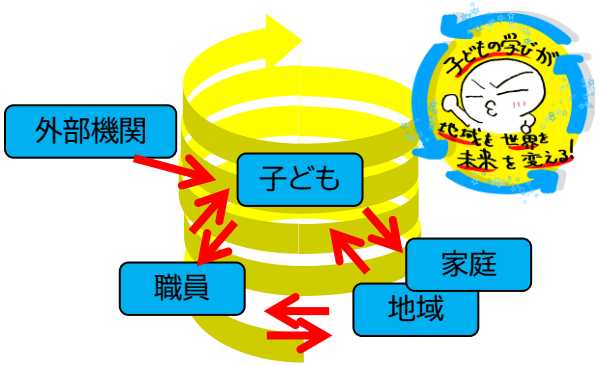
・各啓発作文やポスターコンクールなどに参加する中で，関係する内容について学びを深める。

・学習発表会での演目，展示などを通じ，保護者・地域への発信・啓発の機会としていく。

（今後）

・学習内容を公民館等に張り出したり，パンフレットにし，地域住民に公開していく。

・アナログだけでなくデジタルでの公開も検討していく。




3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・「つながり」を意識した学習を意識するようになった。（教科横断，地域からの講師招聘など）

・小規模校でという事情もあり，教材や備品などの準備の予算に不安があったが，助成金の活用で幅広い活動が可能となった。

・各種活動を行う上で，予算の問題は避けて通れないので，地域や外部団体などとうまく連携して整備していきたい。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・減災教育を新たな取り組みとして行うのではなく，本年度の教育課程で減災教育と関連するものを見直すことで，大きな抵抗感なく取り組みができた。
・減災教育を行うにあたり，元来行われていた学校周辺の地理や風習の特性を知ることに加え，自分たちの生活の仕方や学習が減災（教育）とどのような関わりがあるのかを意識できるようになった。
・地域（学校外）の人材をいかに活用していくかを意識するようになった。
・家庭の中でも，減災（防災）に関する話題やふるさと学習で学習した内容に関連する話題が出始めている。（ふりかえりシートから）

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・教師の側が減災の観点に目を向けて指導していくことにより，教材や展開の中でより身近な例などを持ち出す場面が増えてきた。自分事として考える意識が希薄であった子どもたちも，災害は，より身近なこととして捉えることができるように変容した。
・身近なこととして捉えることにより，防災・減災にとどまらず，自分の立場でできることを考えたり，意識をする姿勢が見えている。
・学習した内容から，「この場合は……」と類推する。「〇〇と△△のつながり」を意識する様子が見えてきている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・子どもが真剣に取り組む姿から，家庭や地域の中でも減災に関する話題が増え意識を高める効果は見え始めている。
・中学生の避難行動について，（地域防災会議にて）消防団や保育所と確認し，役割を明確にすることができた。
・教師の意識として，学校外の講師を招くなど，他と繋がる（繋げる）姿が見え始めている。
・既存の学習の中でも，減災との関わりを意識するようになった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・地域の学校に対する協力，関心は高く，元来の教育課程のなかで環境教育，地域学習が多く実施されている。町の取り組みとしての海洋教育学習もあるので，既存のもので減災教育を意識した取り組みを実施することとした。
※新たな取り組みとして実施するには，過剰に負担がかかり継続も難しいこと，学校の特性として，転勤などの職員入れ替えも頻繁にあるため，既存のふるさと学習・海洋教育学習に位置づけた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・学習内容を発信する方法に課題が見えてきた。気軽に学校での学習内容が見れるように新聞やポスターにして公民館等に掲示する案やデジタル化して学校 HP に紹介するなどを検討している。

7）その他　活動の様子（スナップ写真）

職員研修にて地域・史跡めぐり

３大体験学習（アンブシ漁体験）

魚をさばく

稲作学習（稲刈り）

紙すき体験学習

校外学習

橋梁工事説明会

学習発表会

ビーチクリーン作戦

防火槽探し（社会）

避難訓練（消火体験）

救急救命講習

| | |
|---|---|
| 学校名 | 宮城県石巻市立桃生中学校 |
| 担当教員名 | 志賀　優香 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 一人一人の命の尊さを知り・考え・尊重し・自らよりよい社会づくりに参画する |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な学習・学級活動・道徳・外国語科　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（〇）学校間・地域間交流　（〇）教科連携　（〇）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　１・２・３学年　１７８人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １６　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ８　人　【保護者・地域住民・その他（　小学校職員　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　2022 年 10 月 21 日　～　西暦 2022 年 11 月 11 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（　）地震　（　）津波　（　）台風　（〇）洪水　（〇）河川氾濫　（〇）土砂　（〇）その他（　） |

活動報告

**１）活動の目的・ねらい**

(1) 防災の基礎的・基本的な知識・技能を養う。　(2) 防災,減災のために,自ら判断し行動する力を伸ばす。
(3) 自他の生命を尊重するとともに,社会の一員として主体的に行動しようとする態度を養う。

**２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）**

| | 日時 | 実施内容 |
|---|---|---|
| 事前学習・教科連携 | 10/21(月)<br><br><br><br><br>10/28(金)<br>11/2（水）<br><br>10 月中 | 【防災・減災学習に向けてのオリエンテーション】<br>(1)全体指導による今回の学習のねらいの理解およびハザードマップの使い方の説明。市総合防災訓練との関連についての説明。<br>(2)各地区生徒会の開催(自分の地区の確認，各地区人数の把握,顔合わせ，班編成)<br>(1)学活　:「地域の防災に貢献しよう」<br>(2)道徳科:「避難する？避難しない？（１年）ガソリンを求めて（２年）高台に引っ越す？引っ越さない？（３年）＜防災道徳　東京書籍＞<br>(3)外国語科「Be Prepared and Work Together（３年）〈NEW　HORIZON3 東京書籍〉 |
| 防災減災学習 | 11/4（金）<br>5.6 校時 | **【地区別防災学習】**<br>(1)各地区自治会長さんと共に，地区避難場所の実地踏査，確認を行う。<br>(2)ハザードマップ（タブレット）を活用して各地区の災害リスクを把握する。<br>**【学年別防災学習】**<br>(1)１年:防災グッズの製作 (2)２年:負傷者の応急処置及び運搬法　(3)３年:避難所設営 |
| 事後学習 | 宿題<br><br>11/8（火）<br>５校時<br>11/11(金)<br>５校時 | (1)地区別防災学習（避難所や危険箇所の確認など）で分かったこと，考えたことを１スライドでまとめる。<br>(2)学年別防災学習で学んだことを後輩や先輩に伝えたり，体験させたりするための振り返り・発表の準備を行う。➡毎日朝の会で練習<br>(3)防災学習発表会<br>１・２・３学年合同グループ（各学年２～３人）で，学年別学習で学んだことを発表し合う。１，２年生は防災グッズの作成，応急処置の体験講座，３年生は避難所設営で学習した内容をプレゼンテーションする。 |

**３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。**

**【研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度の実践と変わった点】**

これまで単発で終わっていた体験的な防災学習を見直した。学習を深めるために，(1)他教科と連携 (2)学習した内容を発表，発信する場を持った。学びのまとめとして行った「防災学習発表会」に向けて，１つ１つの活動がつながりを持てるような防災学習のカリキュラムを考え実施した。

【助成金の活用で可能になったこと】
・東日本大震災関連の施設での体験学習　・学びのまとめをパンフレットとして発行

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・今までの防災学習を見直し，学習を深めるための他教科と連携，学習した内容の発表の機会を持つことで，子どもたちの学びが深まる防災学習へ進化した。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・「発表会に向けて先輩や後輩に学習した内容を自分が伝えなければいけない」外国科の授業で「自分の書いた防災パンフレットが日本に住む外国人の生活に役に立つ」という使命感・責任感が多くの生徒から感じられた。生徒は自身の役割を果たす必要性と重要性を理解し，緊張感を持って主体的に学習していた。
・先輩や後輩に自分の学びを発表する，外国人に向けて記事を書くといった相手意識があることで，分かりやすく伝えればどうすればいいのか，既習内容を整理し，ポイントを押さえながら自分の言葉で伝える力が育った。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・防災学習での取組＝避難訓練が主と考える教職員が多かったが，今回の取組で防災学習の活動の視野を広げることができたと感じる。また，体験学習ありきではなく，学習した知識や技能を一度自分で整理・分析し，相手・目的意識を持って表現する，発信する時間の重要性に気付く機会となった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

【防災学習発表会】
・１，２年生については，防災グッズ・応急処置法のやり方を教えるだけでなく，どのようなメリットがあるのか，注意点は何かなど，プラスアルファの情報を自分たちで調べ，体験教室の発表原稿を考えた。３年生については，一方的に学習内容を発表するのではなく，聞き手を巻き込みながら話すことを念頭に入れてプレゼンテーションを作成した。
・「自分が学習した内容を発表しなければならない」という自覚と一人一人が必ず役目を果たせるように，各学年２人～３人の少人数グループ内（全２４グループ）での発表会とした。
・生徒たちが主となって発表会を進めていけるように，発表会の司会・進行，タイムキーパーなどは全て３年生が行った。

【教科連携】
①学活では，題材名「地域の防災に貢献しよう」とし，(1)石巻市総合防災訓練が１１月に行われることを知る。(2)東日本大震災の災害があったときの避難所での中学生の活躍について知る　(3)地域で災害が起こった場合，中学生として何ができるか考えるかを学習活動として取り組んだ。内容は（２）エ　心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成
②外国語科(NEW HORIZON3 東京書籍)の Unit4 では，防災・安全への感心を高め，地域の一員として防災に取り組む意識を高めることができる題材となっている。教科書の内容に沿って(1)自分は災害が起きたときの準備ができているのか自身を振り返る　(2)災害が起きたときのために，どのような準備をするべきか考える　(3)震災時の外国人の体験を知る　(4)災害被害を少なくするために行われている外国人支援の取組を知る学習をした後，学んだ内容を振り返り整理，まとめる時間をとった。単元のまとめとして，「私たちの住む石巻市で勤務していたＡＬＴが東日本大震災で命を落としてしまった事例を伝え，(1)なぜこのＡＬＴは命を落とすことになってしまったのか (2)“このような悲しい出来事が再び起きないように，私たち桃生中生にもできる外国人への支援はないか”考えさせ，英語で防災パンフレットを作成する活動を行った。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

【実践から得られた教訓や課題】
・単発的な体験学習の実施，体験ありきで終わってしまう防災学習は，子どもたちの記憶に残りにくく，“体験”として終わってしまう。これまでの学びを整理・分析し，まとめ・表現する活動が重要である。
・教職員の防災意識を高めていく必要がある。そのためには，防災学習を進めていくにあたって，“自分ごととして捉える”ことが第一歩である。現在の減災・防災学習の内容は，一部の教職員の考えと意見を基に作られたものである。企画委員会や職員会議で承認が得られたとしても，実際に生徒を動かす立場の教職員からすれば，「実施計画どおりにやらなければならない，決まったことならやらなければいけない」といった “やらされている感”は大きい。その負担が大きけば不満につながり，教育の質は間違いなく落ちる。防災学習を企画するにあたって，全教職員を考え・意見を聞くことは，学校全体で防災学習を進めていく上で必要不可欠である。

【次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望】

(1)防災学習に通じる教科の単元＜例：国語科（いつものように新聞が届いた―メディアと東日本大震災）理科（動き続ける大地）保健体育科（自然災害による危険）技術・家庭の家庭分野科（災害に備えた住まい）社会（地域調査の手法）は何かを明らかにし，体験学習と連携しながら，繰り返し防災学習に取り組める系統的なカリキュラムの作成・実施する。

(2)学習のまとめとして，子どもたちが今までの学びをアウトプットする場を必ず持つ。また，防災学習の１時間目では，(1)の各教科や体験学習での学びを経て，最終的に「～ができるようになる」「～なまとめ活動を行う」という目標を子どもたちに伝えることで，授業中の各活動に取り組む必然性を高めていく。

(3)学習のまとめ活動の際、各教科や体験学習での学びを全て振り返ることができるように，生徒がポートフォリオとして学習の記録を蓄積する。

(4) 子どもたちが多面的な視野で物事を考え，学習をより深めていくために地域・専門機関との連携を強化する。

(5)「どんな力を子どもたちに身に付けたいか」「どんな防災学習を行ってみたいか」「現状でどんな防災学習ができそうか」など，アンケートや学年会などを通して，全教職員の声を聞いた後に，防災学習を進めていく。

７）<u>その他</u>（※特にあれば記述）

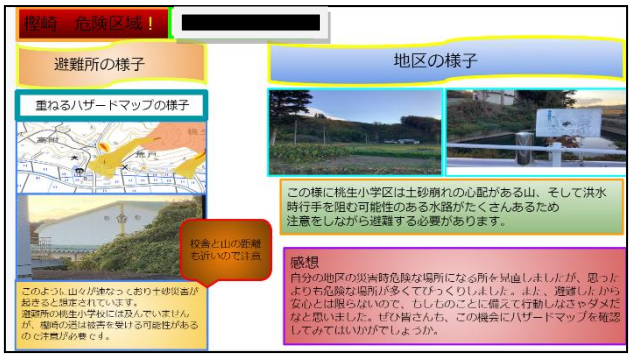
１月には，本校の１学年生徒が石巻市震災遺構門脇小学校の見学，被災者から当時の被害状況の話を聞く機会を持った。学習した内容は，体験学習で終わることがないように，スライドでのまとめ活動をした後，阪神・淡路大震災を経験した兵庫県の竜山中学校の生徒へオンラインで，今回の学びを発表した。

＜防災学習発表会（学年別防災学習まとめ）＞ ※３年生による“避難所設営体験”についての発表と防災クイズタイム

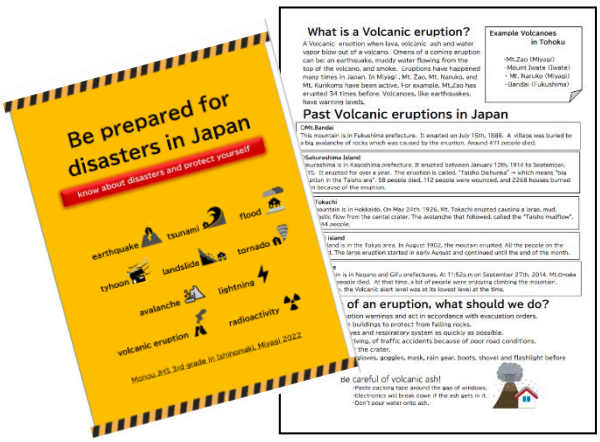
※１年生による防災グッズ制作体験講座

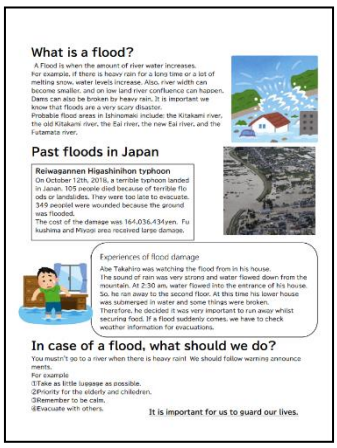
※２年生による負傷者の応急処置及び運搬法体験講座

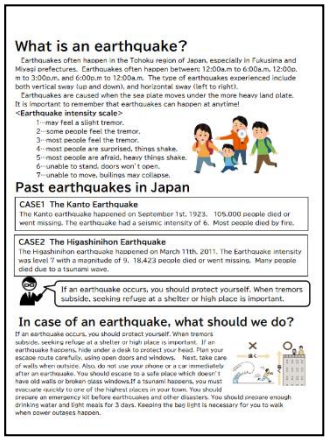
＜地区避難所・災害リスクについてのスライド（地区別防災学習まとめ）＞



＜外国語科で作成した防災・減災パンフレット（１０種類の災害の情報・過去の被害事例・避難方法等）＞




＜震災遺構での学びを伝える！兵庫県竜山中学校とのオンライン交流授業＞

| | |
|---|---|
| 学校名 | 気仙沼市立条南中学校 |
| 担当教員名 | 髙平　智子 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 新しい津波浸水想定に対処した，避難行動・避難計画の再構築 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（☑学校行事，☑総合的な学習の時間） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（　）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（　）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（　）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （１～３学年　１５２人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １８　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ＿＿＿＿＿＿人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２　年　５　月　１　日　～　西暦　２０２３　年　２　月　２８　日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（〇）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

**１）活動の目的・ねらい**

令和４年５月に宮城県より，新しい「津波浸水想定」が公表された。これは，「津波防災地域づくりに関する法律」の理念である「なんとしても人命を守る」という考えのもと，最大クラスの津波が悪条件下で発生した場合に想定される浸水区域及び水深を示したものである。

気仙沼市への津波第一波の到達予想は県内の自治体の中で最も速い２１分後，東日本大震災の３０分よりも１０分ほど早くなる。また，沿岸最大の２２．２メートルの津波が来ると予測されているため，より迅速な避難が求められている。

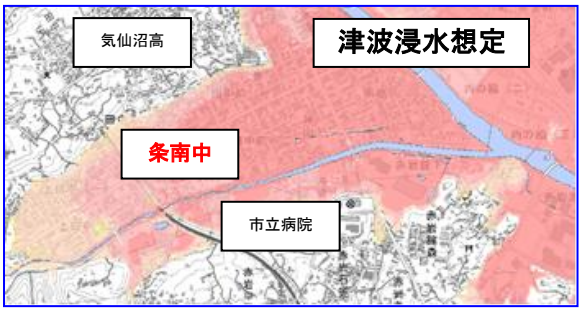
本校は海から２．５キロメートル離れているものの，海抜３メートルで，目の前には神山川が流れている。東日本大震災の時は校庭まで浸水している。新しい津波浸水想定では３～５メートル，つまり，校舎２階まで浸水すると予測されており，これまでの避難計画に盛り込んでいた３階，４階への垂直避難では孤立する恐れがある。また，昨年度実施した高台にある気仙沼高校までの避難に要した時間は３０分であることから，本校では新たな避難行動や避難経路の模索が課題となっている。

東日本大震災：校庭まで浸水

**２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）**

(1) 避難経路及び避難場所の検討

気仙沼市立病院の新築移転によって，昨年，神山川に架かる歩道橋が学校の目の前にできたことから，避難場所を気仙沼市立病院付近に変更する避難訓練を新たに計画した。気仙沼市立病院付近までは学校から約１キロメートル，海抜３０メートル。主幹教諭（防災主任）及び校長自らが徒歩で避難経路及び避難場所の安全確認を数回行い，検討を重ねた。




(2) 事前指導【写真 A】

新しい津波浸水区域が公表されたことに伴い，新たな避難経路や避難場所について検討していることを生徒及び保護者に伝え，災害時の注意点や校舎内及び避難場所までの避難経路について各学級で確認した。

写真 A

(3) 避難行動【写真Ｂ・Ｃ・Ｄ】

① 避難場所までの避難時間の短縮

・教室から直接，避難場所へ向かい，避難場所で点呼をした。

・３列を基本とした移動をした。

② 学校から避難場所までの移動

・当日の天候は雨。悪天候を想定した訓練となった。路面状況が悪かったので，歩行に支障が出たり，隣や前後の人と傘が接触したりする場面があった。

・生徒の安全を確保する上で，避難中の教員の声掛け，生徒同士の声掛けが有効であった。また，神山川に架かる歩道橋付近や交差点に教員を配置した。

・生徒の歩行のペースの違いが大きすぎたため，高台への移動では前後の間隔が空いてしまい，走る生徒もいた。

写真Ｂ

写真Ｃ

写真Ｄ

(4) 避難場所（気仙沼市立病院付近）【写真Ｅ】

① 整列及び点呼の場所

・気仙沼市立病院付近の公道を避難場所としたことから，十分なスペースがとれず，整列が縦長になった。

② 点呼・報告

・担任による点呼の後，報告の手順を担任から直接，教頭へ伝える形にした。

写真Ｅ

**３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。**

総合的な学習の時間において，１学年生徒が，旧気仙沼向洋高等学校の被災校舎にある「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」を訪問し，見学や館長さんからの講話を通して東日本大震災について学び，防災に関する学びを深めた。来年度も実施する計画である。

また，助成金により購入した「円形ホワイトボード」は，地域防災での話し合いを想定して助成金で購入したが，市の防災訓練地域想定が他地域になったため，生徒及び教員のグループ討議で活用した。情報の可視化により，グループ討議がより深まった。今後も様々な場面で活用できると思われる。

**４）実践の成果**

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・新たな「津波浸水想定」をもとにした避難訓練は，教員そして生徒にとって「減災・防災」をより身近に感じる活動であった。「なんとしても人命を守る」という考えを共有し，訓練に取り組んだことが，減災や防災を自分事として考えるきっかけとなった。

② 児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・中学生の目線で課題を発見する力…危険箇所，より良い避難の在り方

・他の避難訓練（火災想定など）においてもよりよい避難の在り方について提案する生徒がられるようになった。

＜生徒の意見より＞

・実際に災害が起きたら，５分ぐらい遅くなることが考えられる。そのような時，冷静に判断できるよう，訓練を重ねる必要がある。

・普段は車の往来が少ない道路でも，地震が起きたら交通量が多くなることが考えられる。

・歩道橋を降りて歩いているときに，津波が神山川を逆流して来た場合，避難中に津波にのみ込まれる可能性がある。別の避難ルートを考える必要がある。

・災害はいつやってくるか分からない。抜き打ちの訓練をやってはどうだろう？

・「今，自分が何をすべきなのか」とすばやく考える力が大切。その考えは命だけに限らず，他の命も救えるかもしれない。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・一般の避難者も橋を利用することを想定し，臨機応変に対応できるよう避難ルートの変更も視野に入れておく。

・学校からの避難や，校舎内でできる減災をについて改めて考える機会となった。

・校舎の４階は激しく揺れることが予想される。パニックにならずに落ち着いて避難させる必要がある。
・小中高及び自治体との防災連絡委員会を立ち上げ，地域としての防災の在り方について共有した。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

新しい「津波浸水想定」が公表されたことを機に，時間を空けずに防災主任として数回，避難経路や避難場所の実地踏査を重ね，教員や生徒にとってどのような避難行動が適切なのかを検証した。その検証をもとにした避難訓練では，具体的な避難行動や教員の役割がスムーズに行われた。また，避難開始から１４分以内に避難場所での点呼を終えることができたことも大きな成果として挙げられる。また，生徒や教職員の意見を反映させた「防災マニュアル」の完成を目指している。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今後の課題として，常に最大級の災害を想定して準備・計画にあたるとともに，教員そして生徒自らが主体的な判断力のもと，命を守る行動ができるような訓練の工夫の必要性があると考える。「津波防災地域づくりに関する法律」の理念である「なんとしても人命を守る。」ということを学校防災における最大の課題とし，生徒と教職員の命を守るためにできることを積み重ねていくことが重要である。また，生涯にわたって防災に関わっていく観点から，令和５年度，生徒会に防災委員会を新設することが決定した。中学生なりの主体的なかかわりと活動の広がりを期待している。

加えて，学校防災だけに留まらず，異校種間連携及び地域連携も推し進めていくことが必要である。現在，条南中学校区には，小中高の３校種があり，これらの校種間そして地域の防災組織との地域防災委員会が立ち上がり，今後の地域防災の在り方について話し合いが進められている。減災・防災の中核となる地域としての体制が整い，地域住民による減災・防災意識の高揚が期待される。

７）その他（※特にあれば記述）

特になし

| | |
|---|---|
| 学校名 | 只見中学校 |
| 担当教員名 | 目黒英樹 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域とともに学校発信で行う防災減災 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（技術家庭科、社会科、総合的な学習の時間　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（〇）専門家の活用　（　）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（〇）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　３学年　２８人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ３人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ７人　【保護者・地域住民・その他（　ICT 専門のエンジニア　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　７月　１５日　～　西暦　２０２３年　２月　２１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（　）地震　（　）津波　（　）台風（〇）　洪水　（〇）　河川氾濫　（　）　土砂　（　）　その他（雪害） |

1）活動の目的・ねらい

学校主体で新たに HP を立ち上げ、平成 23 年の新潟福島豪雨災害及び例年問題になる豪雪災害について地域と協力し、減災に努めるための工夫や啓蒙活動を行う。生徒の意識向上もさることながら地域との連携強化と、専門家の協力を仰ぐことで、よりよい発信ができるようにする。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

2022 年 5 月　中学生による防砂減災プロジェクト立ち上げ並びにスタッフとの打ち合わせ
7 月 15 日　第 1 回　ICT プラットフォーム　学習会開催（主にＰＣが動く仕組みについて）
9 月 29 日　第 2 回　ICT プラットフォーム　学習会開催（主にＨＰのデザインについて）
11 月 29 日　第 3 回　ICT プラットフォーム　学習会開催（主に掲載内容の検討について）
2023 年
1 月 17 日　第４回　ICT プラットフォーム　学習会開催（主に掲載内容の検討について）
2 月　2 日　第５回　ICT プラットフォーム　学習会開催（主にＨＰの内容完成確認）
2 月 20 日　第６回　ICT プラットフォーム　学習会開催（主にＨＰの内容完成確認）

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

当初地域合同避難訓練を予定していたが、コロナの影響により実施できなかった。9 月の研修会で地域とのかかわりが非常に大事だと感じ、何らかの形で協力していくことが必要だと強く感じた。コロナ禍でインターネットの活用がより重要度を増したため、ここに注目した。日頃から情報を発信するなどして、地域との協力体制をオンラインでもできるようにした。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

コロナ禍になり各学校でも ICT の環境が整えられてきた。本校も例外ではない。今までは利用する側だったが、一人一端末を持つことにより、発信が容易になった。昨年度までは校区内の小学生や地域の老人に集まってもらいそこで直接水害のことを伝えていた（語り部活動）。SNS ではなく、自分たちで HP の作成から行うことで、情報モラルについての理解が深まり、行動を自戒し責任ある行動を大切にしようとする気持ちが高まった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

家庭でも SNS やゲームの利用は行っているものの、そのシステムを学ぶことはまずなかった。そして、公式なものを発表していくことは、社会に対しての責任が生じるため、HP に掲載していくことの社会的影響について考えることができるようになった。また、通常の座学に比べ積極的に自分の意見を出したり、チームワークの大切さを感じるようになった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

今回の講師は東京から引っ越してきたICTのスペシャリストであり、ヘルプで入っているエンジニアについても最先端のプログラマーである。若い時期から本物に触れる機会があるというのはどんな分野でも大切な経験である。地域人材の活用という面では、非常に有意義だった。子どもたちの進路を考えても、視野を広げる良い機会となった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

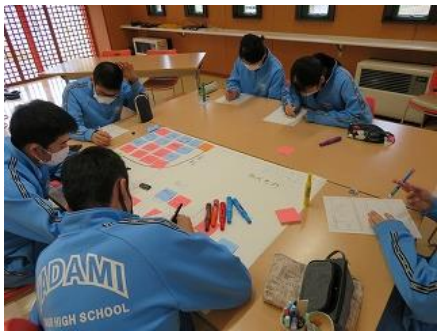
同じような経験としては、既存のSNSで発信ということもできるが、子どもたちの成長や視野を広げるという観点から考えると、今回のような回り道をしながら本質に触れさせる方が断然よかったと思う。手間はかかるが、生徒が積極的に議論できる場を与えてもらったおかげで、事象を自分事としてとらえられるようになった。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今のところ地域の方を通じてICTを学び、町の防災について発信し情報を共有するようにした。認知度ではまだまだであるため、その広報活動やその他のコンテンツを増やしていくことでステークホルダーの獲得に力を入れたい。今年度は完成まで至らず来年度への持ち越しとなったが、プロジェクトは動き続けている。来年度についてはあらためて予算化し、事業を継続していくことが決定した。また、高校（只見高校）とも連携し、協働でホームページ作成を行っていく予定である。

7）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



| | |
|---|---|
| 学校名 | 福島県耶麻郡猪苗代町立猪苗代中学校 |
| 担当教員名 | 長嶺　義雄 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 猪苗代中学校新校舎施設と地域防災の関わりについて（自助、共助、公助を学ぶ） |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　理科　社会科　家庭科　保健体育科　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（〇）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（　）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　全学年３０４人　）　（　２学年１０１人　）　（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ３４　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ２３　人【保護者・地域住民・その他（赤十字奉仕団員６人、民生児童委員 13 人）ボランティア連絡協議会４人】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦２０２２年　８月　５日　～　西暦２０２３年１月３１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震（　）津波（　）台風　（　）洪水（〇）河川氾濫　（〇）　土砂　（　）　その他（火山災害） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

今年、町内３中学校が統合して新校舎での中学校生活がスタートした。避難所としての機能を備えた新校舎の機能を有効的に活用していくために、統合中学校初年度を防災・減災教育の初年度として位置づけた。教員及び生徒へ、その重要性の意識付けを行うとともに、地域関係団体との連携を図るなかで防災・減災教育をより具体的に進めていくことを目的とした。

新校舎と磐梯山

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール

校長が先導し防災担当が中心となり教職員及び生徒に減災教育の視点を意識付けして関連行事を進めた。

| | | | |
|---|---|---|---|
| ７月 | １年 | 磐梯山周辺フィールドワーク（ジオパーク学習） | 磐梯山ジオパーク |
| ８月 | 希望者 | ステップアップボランティア（ＤＩＧ災害図上訓練） | 社会福祉協議会　日赤福島県支部 |
| ８月 | 希望者 | ステップアップボランティア（炊き出し訓練） | 社会福祉協議会　日赤福島県支部 |
| ９月 | 全校 | 第２回避難訓練（心臓マッサージ・ＡＥＤ講習） | 消防署 |
| １０月 | 全校 | 放射線教育講演会（放射線の知識、福島の現状） | 環境再生プラザ |
| １１月 | 全校 | 知事部局出前講座（総合計画出前講座：復興に向けて） | 県企画調整部　復興・総合計画課 |
| １月 | ２年 | 考えよう避難所での対応・作ってみよう避難グッズ | 県立博物館　社会福祉協議会<br>磐梯山ジオパーク |

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと

〇　防災・減災学習の重要性を意識させて学習を進めた。

・第２回避難訓練（心臓マッサージ ＡＥＤ講習）　・放射線教育講演会（放射線の知識、福島の現状）

・知事部局出前講座（総合計画出前講座）

〇　講義形式の学習スタイル中心から、実際に体験型の学習を取り入れるように計画した。

②研修会を受けての自校の活動の変更・改善点

〇　地域関係団体との連携を進めた。２学年で共同授業を開催した。「博物館の資料（震災遺産）を通じて避難所でできることを考える」（福島県立博物館災害分野担当者、磐梯山ジオパーク事務局、町社会福祉協議会）

③昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

〇　『クロスロード』（災害ボランティアゲーム）の活用で避難所のボランティア活動への関心を高めた。

〇　避難バッグの活用（展示・中身の確認）で防災意識の高揚を図った。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

○　全体計画の中の題目「自助・共助・公助」の内容をより具体的に盛り込むことができた。知識を得る部分、体験から学ぶ部分、関係団体との連携により地域の一員としての役割の確認と今後の活動の継続。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

○　体験させる場面、考えさせる（感想を書かせる、発表させる）場面を通して、漠然としていたものを具体的、現実的に捉えられるようになってきた。

○　災害発生時への知識と行動力と心の「そなえ」の重要性を認識させることができた。

○　関係団体及び地域の方々との活動を通して、地域の一員であり、役割を持っていることの自覚を持てた。

○　ボランティア活動が必要とされていることを認識し、ボランティア活動へのやりがいの気持ちが高まった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

○　教師：災害時に行動できる知識や体験の重要性を改めて感じた。防災ボランティアへ参加した生徒の感想から防災への関心が高い生徒が多くいること、活動内容に関心を持つ生徒が多くいることを知ることができた。

○　地域：防災ボランティア活動に参加した地域住民の方からは、普段は交流がない中学生と交流できたことを喜びと感じていた。

○　関係機関：中学校と関係団体が交流を持つことで防災教育活動を活性化できる。交流の中から、新たな切り口や視点を見いだし、それぞれの得意分野を活かすことができる。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

①　地域関係団体（磐梯山ジオパーク事務局、県立博物館、社会福祉協議会、日赤県支部 等）が防災教育を含めて学校現場との連携・協力の必要性を求めていたことがわかった。地域と学校の課題やニーズの共通項を確認して地域連携の手立てとなっていける。そして、学校が地域防災推進の場として機能することが地域のつながりを強くできると感じた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①　今後は、夏休み期間に希望参加者で行った災害ボランティアの内容を教育課程のなかに位置づけていきたい。

②　地域と共に活動する必要性から地域合同避難訓練への参加を検討していきたい。

③　日常の給食当番、清掃、後片付け、あいさつ、声かけ等の活動が、避難の際のボランティア活動で協力する際に大きく活かされること知ることができた。

○ 磐梯山周辺フィールドワーク
（ジオパーク学習）

○ ステップアップボランティア
（ＤＩＧ災害図上訓練）　　（炊き出し訓練）

○ 考えよう避難所での対応・作ってみよう避難グッズ
（クロスロードゲーム）　　（自分で作ってみる、使ってみる）
話し合い　　意見発表　　新聞紙スリッパ　　ポリ袋レインコート

| | |
|---|---|
| 学校名 | 茨城県取手市立戸頭中学校 |
| 担当教員名 | 土屋啓一 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 様々な変化に対応し、課題を解決しようとする態度の育成<br>～福祉教育・防災教育・平和教育の視点から生命を大切にする意義を考える～ |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間　社会科　保健体育科など） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（○）体験学習<br>（○）学校間・地域間交流　（○）教科連携　（○）地域発信　（○）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （１～３学年　２２３人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 約２５人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ２５０　人　【○保護者・○地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年４月１日　～　西暦２０２３年３月３１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（　）津波　（○）台風　（○）洪水　（○）河川氾濫　（　）土砂　その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・東日本大震災を主な事例として、自然災害の危険性や安全な地域社会をつくる意義を理解し、必要な知識や技能を身に付ける。（知識及び技能）

・自分たちの住んでいる地域の現状を理解し、必要な情報を収集したり、様々な人から話を聞いたりすることで、自分たちができることを考え、行動するために必要な力を身に付ける。（思考力、判断力、表現力等）

・地域社会の安全や防災について関心をもち、学んだこと発信しようとする態度を身に付ける。

（学びに向かう力、人間性の涵養）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

様々な変化に対応し、課題を解決しようとする態度の育成
～福祉教育・防災教育・平和教育の視点から生命を大切にする意義を考える～
【1 年生】福祉教育＋防災教育　【2 年生】キャリア教育＋防災教育　【3 年生】平和教育＋防災教育

＜研究テーマの実現に向けた３つの取り組み＞
1　教科等横断的な視点でのカリキュラムを構成する。
2　外部人材の積極的な活用と地域との連携を図る。
3　対話的・協働的な学び合いの実現に向けた授業を行う。

| 日にち | 対象 | 主な活動 |
|---|---|---|
| 6 月 10 日<br>2 月 16 日 | ２年生<br>３年生 | ○　釜石市いのちを守る未来館の職員によるオンライン授業<br>・「釜石の奇跡」とよばれた当時の中学生はどのようにして津波から避難をしたのかを知る。【資料１】 |
| 9 月 7 日 | ２・３年生 | ○　戸頭地区自主防災組織連絡協会、戸頭消防署との連携による防災教室<br>・AED や三角巾を使用した応急手当、毛布を使った救急搬送などの訓練を実施して、中学生ができることを理解する。【資料２】 |
| 9 月 9 日 | 全学年<br>小学生 | ○　小中合同引き渡し訓練<br>・大地震が発生し、保護者の送迎が必要になった場合、緊急時の行動について小学校や保護者と連携した実践訓練を行う。【資料３】 |
| 11 月 11 日 | 全学年 | ○　地球のステージ<br>・東日本大震災で被災した医師が、当時どのような医療活動を行ったかを知る。【資料４】 |
| 11 月 14 日<br>～25 日 | 全学年 | ○　東日本大震災パネル展<br>・東日本大震災当時の街や人々の様子に関するパネル展の開催【資料４】 |
| 12 月 7 日 | １・３年生 | ○　エコプロ２０２２<br>・震災復興や SDG s に関わる企業や大学による総合展示会 |

3）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・階上中学校の生徒が、震災に関連したテーマで探究的な学びを進めている話を伝え、本校の３年生も各自でテーマを設定させて、地域課題を解決するための問題解決学習を進めることができた。
・地域人材（消防署・消防団・自主防災組織・市役所職員）を活用した地域に根差した防災教育や地域学習を進めることができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・地域人材を活用した防災教育を進めることができた。これをきっかけにコロナ禍によって途絶えていた地域とのつながりが広がってきた。
・授業参観では、保健体育科や道徳で生命を尊重する授業を実施した。防災教育をきっかけに教科等横断的な視点でカリキュラムを構成する重要性を認識することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・総合的な学習の時間をはじめとする探究的な学びに対して、意欲的に取り組むようになった。階上中学校や被災地における「中・高校生の語り部」活動などの事例をあげることで意識が高まった。また様々な人材と関わることで、防災は「自助」だけでなく「公助」や「共助」が大切であることを認識することができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・今回の実践は、茨城新聞社をはじめとするマスコミや地域の広報誌にも掲載された。生徒達や教職員は、実際に学校の教育活動が、地域に発信されることで、さらに意欲を高めることができた。
・小学校と引き渡し訓練を実施することで、小学校の教員や保護者も地震発生時の対応について、危機管理意識が高まった

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・地域人材や専門家を活用することで、地域とのつながりを構築できた。また被災地の方と実際に対話をすることで、復興に向けての課題や被災地の方の気持ちに寄り添うことができた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・今年度の実践を来年度も継続できるかが課題である。教職員の異動などもあり、確実な引継ぎが大切になる。

7）その他（※特にあれば記述）

・全国各地の先生方と意見交換ができたことや現地を見て学ぶことができたのは、非常に有意義であった。

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

【資料１】　釜石いのちをつなぐ未来館　川崎さんによるオンライン授業

戸頭中学校では、様々な授業において外部の人材を活用した授業を推進しています。本日は、３年生の社会科の特設授業でいのちをつなぐ未来館の職員である川崎さんから東日本大震災当日のようすを聞き、いのちを守ることの大切さを学びました。生徒たちは実際に経験した人の話を聞くことで、「自分にできることにはどのようなことがあるのか」など、聞いたことを自分事としてとらえ、深めることができました。

【資料２】戸頭地区自主防災組織連絡協会、戸頭消防署、女性消防団との連携による防災教室

本日の防災教室で生徒たちは、グループに分かれ、ＡＥＤの使い方、三角巾を使った応急手当、毛布を使った救急搬送等について学びました。

1. 防災教室（段ボールベッドの作成・毛布を使った救急搬送・AEDの使い方・三角巾の使い方）に参加して、どのように感じましたか。

詳細

| | |
|---|---|
| よい内容であった | 55 |
| まずまずの内容であった | 5 |
| あまりよい内容ではなかった | 1 |
| よい内容でなかった | 0 |

AEDの使い方を知れて本当に良かった。災害時に自分の身は守ることを最低限やるとして人も救えそうだったら頑張ってみようと思った。

防災教室を体験して自分たちにもできることややれることがあり、災害などが起こったときは、地域の人たちと協力することが大切だと思った。

【資料３】小中合同引き渡し訓練

今回の訓練では、校庭に避難した後、保護者への引き渡しまで行いました。保護者の方々のご協力もあり、とてもスムーズに引き渡しまで行うことができました。

【資料４】地球のステージ　東日本大震災パネル展

4. 地球のステージを見て、国際社会や地域社会に貢献する大切さがわかりましたか (0 点数)

詳細

| | |
|---|---|
| よくわかった | 41 |
| だいたいわかった | 20 |
| あまりわからなかった | 2 |
| 全然わからなかった | 0 |

7. 東日本大震災について、関心が高まりましたか (0 点数)

詳細

| | |
|---|---|
| 非常に関心が高まった | 35 |
| 少し関心が高まった | 26 |
| あまり関心が高まらなかった | 2 |
| まったく関心が高まらなかった | 0 |

どんな状況でも諦めない現地の方や、たくさんのことに恐れずに挑戦し続ける桑山さんの姿を見て、私も頑張ろうと、励みになりました。また、どんな国や地域であっても、相手を思う謙虚な気持ちがあれば 思いは伝わることを学びました。これから、国際社会を視野に入れて物事を考えるときに、桑山さんのお話を 大切にしたいと思います。

| | |
|---|---|
| 学校名 | 魚沼市立広神中学校 |
| 担当教員名 | 松田 祐介 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域に学ぶ、「防災」と「食」 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な学習の時間　） |
| アプローチ | （○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（○）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（○）地域発信　（○）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　1 学年 60 人）　※自助行動訓練は全校生徒 174 人が参加 |
| 活動に携わった教員数 | 1 学年部職員 5 人　校長 1 人　※自助行動訓練は全職員 25 人程度 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 5 人　【保護者】　各活動合計　約 50 人【地域住民】 |
| 実践期間 | 西暦 2022 年 5 月初旬　～　西暦 2022 年 11 月 30 日 |
| 想定した災害 | （○）地震　（　）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂<br>その他（減災教育の土台となる「地域理解と地域への愛着」を土台にした活動を展開。<br>避難訓練は、地震を想定した自助行動訓練と講義を全校・全職員対象で実施） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

(1) 減災教育の一環として、自分の住む地域をよりよく理解する。
(2) 学校・地域連携事業として、地域の方々との交流を深める。
(3) 活動を通して郷土に誇りをもち、郷土を愛する態度を育てる。
(4) 自然の恵みや食べ物に対する感謝の思いを高める。
(5) 事前学習や野外活動をとおして、防災・減災に関する基礎知識を学ぶ。
(6) 生徒同士の相互理解、仲間づくり、人間関係調整能力の育成。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

(1) 令和 4 年　5 月 13 日（金）　野外炊飯（保護者 6 名　魚沼市観光協会職員 2 名）
(2) 令和 4 年　5 月 31 日（火）　さつまいも植え（地域ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ 1 名、ｺﾐｭﾆﾃｨ協議会ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ 10 名）
(3) 令和 4 年 10 月 3 日（火）　さつまいも掘り（地域ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ 1 名、ｺﾐｭﾆﾃｨ協議会ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ 11 名）
(4) 令和 4 年 10 月 14 日（金）　土木出張ＰＲ（地域振興局職員 5 名、建設関係業者 8 名）
(5) 令和 4 年 10 月 25 日（火）　自助行動訓練（全校生徒 172 名、職員 20 名）
(6) 令和 4 年 11 月 22 日（火）　干し芋づくり（地域ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ 1 名、ｺﾐｭﾆﾃｨ協議会ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ 6 名）
(7) 令和 4 年 11 月 30 日（水）　味噌づくり（魚沼市観光協会職員 1 名、地域ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ 5 名）活動報告

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

(1) 何よりもまず、9 月研修会で私が学んだものの全てが、私自身の指導に魂を与え、言葉を言霊に変えてくれた。指導する気持ちに変化が生まれ、あらゆる教育活動に対する気概が向上した実感がある。
(2) 典型的な避難訓練（避難・点呼型）から自助行動訓練＆講義型の避難訓練に挑戦した。
(3) 助成金を受け、念願の味噌づくり体験を行うことができた。

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

(1) 自助行動訓練と講義型避難訓練を新たに実施することができた。
(2) 各体験活動の事前・事後において、より具体的な指導や振り返りができるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身に付けたか。

(1) 自助行動訓練と講義型避難訓練を新たに実施したことにより、生徒・職員それぞれが日常生活での自主性や判断力・行動力に対する意識を高めることができた。
(2) 今年の活動を 12 月に振り返った際、自由記述の中で多くの生徒が「減災」「地域理解」「自助」「判断力」という言葉を書き記した。意識が醸成されたことが強く感じられた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

(1) さつまいも植えや干し芋づくり等は昨年度までも伝統的に行われてきた体験活動であるが、それらの全てが「減災教育」につながっていることを、学校運営協議会の委員（地域）に理解していただくことができた。

(2) 講義型避難訓練は、私自身が気仙沼で学んだことをまとめたスライドを使って行った。生徒だけでなく職員にとっても学びの多い研修になったという評価を得ることができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

(1) 全ての体験活動が「地域理解」→「減災」へつながっているという意識を学校全体で高めること。

(2) 気仙沼で起きた悲劇（3 つのバイアス）を伝え、生徒自身の日常生活を「自らの生き方・考え方」「自宅周辺の環境やつながり」の 2 つの視点で再考させたこと。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

(1) 味噌づくりなど新たに実施した活動を、持続可能な活動へと転換していく（地域資源の活用、予算の工夫）。

(2) 中学校 3 年間のあらゆる体験活動（職場体験や修学旅行等）に減災教育の視点を加えていく。

(3) 中学校区全体→魚沼市全体へ、9 月研修会の学びを波及させていく。

(4) 中学 3 年時 12 月に行っている「中越大震災ミュージアム そなえ館訪問」をゴールに設定した中学校 3 年間の防災・減災教育プログラムを完成させる。

7）その他　特記事項なし　※写真のみ添付させていただきます

＜野外活動＞

＜さつまいも植え＞

＜講義型避難訓練＞

＜干し芋づくり＞

＜味噌づくり＞

| 学校名 | 新潟市立内野中学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 坂井　琢雄 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | A「防災・減災ってなんだろう～ハザードマップを使って～」・B「避難所の受付体験を通じて、災害時の避難所での役割や工夫を考えよう」・C「避難所の困りごとを解決する身近なものの工夫を学ぶ」 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（〇）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（　）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　第 1 学年　256 人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 17 人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 11　人　【保護者・地域住民・その他（NPO 法人・防災士）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　2022 年　12 月　12 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（〇）津波　（〇）台風　（〇）　洪水　（〇）　河川氾濫　（〇）　土砂　（　）<br>その他（　　） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

本校生徒は海岸に近い河口部に住んでおり、学校自体も海岸から程近い場所に位置する。また大規模校だからこそパニックに陥らずに、生徒と地域住民が非常時に冷静且つ正しく判断して「自助」・「共助」ができる資質、能力を培うために、専門性の高い外部人材、団体に協力を要請し、本学習活動を実施した。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修前：防災・減災教育＝避難訓練＋県の指定リーフレット学習程度。避難訓練は火災＆不審者対応を含む。
⇒ 研修後：防災・減災教育の意味再確認。地震・津波・避難所開設の「自助」・「共助」の大切さ
実践で変わった点・助成金の活用で可能になった点
⇒ NPO、外部人材を登用した集中的な防災・減災学習の実現（次年度以降の学習モデルの構築）

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・ほぼゼロからの学習活動計画立案の「視点」（何を大切にして学習を進めるべきか）が明確化された。
・専門性の高い外部人材を登用したことにより、「どう防災・減災教育を進めるか」が、体感できた。
・「継続していく」という意識のもとで、立ち上げた学習活動であるため、次年度どのように実施できるか、実施するために年度当初から準備していくかなどの見通しをもつことができるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・ハザードマップを使用した防災士の講義を聞き、身の回りの「自分ごと」として感じられるようになった。
・避難所が自分の学校に開設される可能性、そして「自分ができること」のイメージをもつことができた。
・身の回りのもので、緊急時を乗り切るための手段を知ることで、「自分ができること」の引き出しができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・地域からの外部人材と協働して学習計画を立案することにより、地域からのニーズが明らかになった。
・希薄であった教職員の防災・減災教育への意識、知識が高まったように感じる。
・防災士からの指摘で、今後継続的に取り組んでいかなければいけない「注力」すべき点を指摘された。
・上記を少しでもクリアするために、大規模校ならではの物理的、金銭的な課題が見えてきた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
・ねらいを明確化して、専門性の高い社会資源にアウトソーシングした点は割り切って実施した。
→　「百聞は一見に如かず」中途半端な知識と意識で実施するより、本物に見て、触れる即時性を優先。
・単発でおわらないよう、継続を考えて第一学年で本学習活動を実施した。
→　経験することにより、スモールティーチャーの育成。縦割りで学年を横断した活動の実現を目指す。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
・「N 助」の必要性を殊更に強く感じた。
・教職員間でも、「自分たちで学びを支援できること」を増やしていくための経験、研修の必要性。
・より現実的な感覚を抱けるようになるための、気仙沼地域での体験学習活動の実施と現地生徒との交流。
・外部団体との連携に関わって必要な予算の確保。

7）その他

| | |
|---|---|
| 学校名 | 岩手県釜石市立双葉小学校 |
| 担当教員名 | 黒渕　貴典 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域の災害を理解し、自らの命は自分で守る子どもの育成 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間、特別活動、特別な教科道徳、各教科） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（○）体験学習<br>（○）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（　）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （１～６学年　　１３５人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １８　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | およそ３００　人　【保護者・地域住民・その他（　市役所職員　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　９月　１日　～　西暦　２０２３年　３月　２５日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（○）津波　（　）台風　（　）洪水　（○）河川氾濫　（○）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①人としての在り方や自らの生き方を考え、自他の生命を尊重し、思いやりや助け合いの心を養う。

②郷土を愛し、誇りに思う心を育てるとともに、復興を目指す郷土の中で自らの役割と責任を果たそうとする態度を養う。

③自然災害発生の原因をつかみ、災害を防ぐための努力や工夫について考え、防災意識を培う。

④災害から命を守るために必要な能力や生き抜くための衣食住に関する基本的な技能を身につけさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

| | |
|---|---|
| 低学年 | ①自然災害の特徴<br>②救護活動で働く人々の様子や思い<br>③校内の避難経路や避難方法の確認と地震から身を守る方法 |
| 中学年 | ①過去の郷土の災害の様子、災害を防ぐための工夫や努力<br>②ライフラインの大切さ、下水やごみ処理の仕組み<br>③地域の避難場所や危険個所の確認、地域の防災活動 |

| | |
|---|---|
| 高学年 | ①大地震・大津波発生の原理やその被害<br>②被害を受けた交通網や産業・住宅や街の復旧・復興の様子<br>③家庭でできる防災対策 |
| 全　校 | ①地域総合防災訓練（日本海溝・千島海溝、津波）<br>②地域の危険個所調べと安全マップの進化（付加・活用）<br>③日本海溝・千島海溝、津波について全校が学ぶ会の開催 |

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・専門家を招聘し、自然災害のメカニズム等の講話をしていただくことで、自他の生命を守る対処行動を理解することができた。

・実践集を作成したことで、児童や保護者、地域の方々の減災・防災に対する意識啓発を図ることができた

・昨年度まで活用していた安全マップを土台として、今年度は避難場所や避難経路等をより一層見やすく、理解しやすい進化版の安全マップを作成することができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・防災・減災教育のカリキュラムマネジメントを行い、各教科や特別の教科道徳、特別活動、学校行事等の関連を見直し、体系的・系統的に指導することができた。

・ゲストティーチャー（警察、消防、自衛隊、市役所等）や自然災害の専門家から直接話を聞くことで、より一層自然災害を自分事として捉え、減災・防災に対する意識を高めることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・各教科や特別の教科道徳等の学習を通して、地域のよさや釜石のよさを多面的に学び、今まで以上にふるさとに対する誇りや郷土愛を育み、命の大切さや心の健康を真剣に考えることができた。

・安全な避難の対処行動について、従来通りではなく、様々なケース（登下校中、学習中、休み時間、休日等）を検討して避難訓練を実施することで、児童は複数の避難場所や避難経路等を把握し、災害や減災・防災への理解や意識を高めることができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・避難訓練について、学校や地域、行政が協働して取り組むことで、災害時における被害の軽減と防災意識の向上、児童を含む地域住民の繋がり等をより一層高め、連携強化を図ることができた。

・児童が郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、教師は各教育活動を通して３つの教育的価値（いきる・かかわる・そなえる）を指導し、減災・防災教育の充実を図ることができた。

・保護者アンケートから、今年度の取り組みを通して、家庭の防災意識が高まったことが多く寄せられた。
（防災グッズの用意、どのくらいの規模の津波がどこまで到達するか、避難場所の確認等）

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・ふるさとのよさを児童に再認識させ、家庭や地域、関係機関と連携・協働しながら減災・防災に関する学習を深めることができたこと。

・児童一人一人に災害に対する危機意識を高め自分事として捉えさせるために、様々な分野の職業の方をお招きして話を聞くことで、命の尊さや人の絆の大切さ等を考えさせることができたこと。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①低学年…地震や津波等の自然災害の事に関することを、防災かるたに表し遊びながら災害について学んだり、対処行動を知ったりしながら覚える。

②中学年…先人の教えや釜石の津波石碑等を実際に見たり聞いたりして、より一層防災意識を高める。

③高学年…地域の避難場所や危険個所を示した安全マップを作成し、地域の方にも紹介して情報を共有する。

④全　校…児童が、減災・防災学習で学んだ内容を地域の方々に発信することで、互いの防災意識の向上を図る。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

| | |
|---|---|
| 学校名 | 静岡市立清水飯田中学校 |
| 担当教員名 | 赤星　信太朗 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 自助・共助の意識を高め、防災・減災を通して地域に貢献する生徒の育成 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な学習の時間、道徳、国語、社会、保健体育、技術　） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（○）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（○）教科連携　（○）地域発信　（○）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　３学年　４８４人　）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ３０　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 約　５００　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　５月　２７日　～　西暦　２０２２年　１２月　４日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（　）津波　（○）台風　（○）洪水　（○）河川氾濫　（○）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

自然災害が発生した時に「自分の身は自分で守る」という意識を高めるとともに、地球規模で考えながら足元から動き出し、防災・減災の考え方を通して地域に貢献する力を付けることができることを目的として、３学年を通して防災・減災を軸とした探究学習を実践した。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

【１年生】

テーマ「自助の力をつけよう」

（５・６・７月）防災講話、SDGs に関する講話、起震車体験、赤十字減災セミナー、DIG（災害想像力ゲーム）、災害時判断ゲーム（クロスロード）

（９・１０月）学校に置く備蓄品（オリジナル防災 BOX）作り

（１１・１２月）「私の防災宣言」を作成し、１年間かけて自助の力がどれだけ身に付いたかを校内で発表

【２年生】

テーマ「共助の力をつけて、地域に貢献しよう」

（６・７月）防災講話、HUG（避難所運営ゲーム）、SDGs に関する講話、道徳・保健体育科・社会科・技術科等の教科横断的な防災の学び

（７月）自治会長との懇談会、地域貢献策のテーマ設定（グループ探究）

（９月）地域貢献に向けた情報収集、集めた情報の整理・分析

（１０・１１月）地域貢献策のまとめ・表現、校内発表（地域発表に向けたリハーサル）

（１２月）地域防災訓練で地域の方に向けて防災における地域貢献策の発表

【３年生】

テーマ「自助・共助の考え方を基に、より広い視野で地域貢献しよう」

（６・７月）SDGs に関する講話、テーマ設定（個人探究）

（９月）地域貢献に向けた情報収集、集めた情報の整理・分析

（１０月）地域貢献策のまとめ・表現

（１１月）地区の自治会長等に向けた地域貢献策の発表

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

９月の研修会では、現地の小中学校の児童生徒が防災・減災における多様な活動を行っている場面を見ることができた。小学生は防災カルタやハザードマップの作成、中学生は小学生に向けた発表や語り部活動などであるが、そのすべてに共通していたことが「アウトプットの機会を保障すること」である。これらの活動を通して児童生徒は防災・減災の意識を高め、さらには持続可能な社会の創り手として汎用的な能力を身に付けていたことから、本校でも地域に向けて発信する場を設け、アウトプットの機会を保障することに繋げた。またネットワークを構築すること（N 助）についても、「ふじのくにジュニア防災士養成講座」を行っている静岡県中部地域局、静岡県地震防災センター、消防署、日本赤十字社、静岡県地球温暖化防止活動推進センター等と連携し、様々な視点から防災・減災を考える機会をつくった。そして地域に対しては、ほぼ毎月連合自治会に顔を出し、学校と地域との連携の可能性を見出した。

助成金の活用で可能になったことは、SDGs の専門家などの外部講師を招聘して、生徒が災害を地球規模の視点から捉える機会にすることができたことである。さらに、中学生の防災・減災に関する活動を記録するための ICT 機器の購入や、中学生の探究成果を地域に配付するためのカラー印刷にかかる用紙代等に使わせていただき、中学生の活動を広く地域や社会に発信することも可能となった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

プログラム内容として第一に構想したことは、長年言われ続けている南海トラフ大地震を想定した内容や本校学区の特性である土砂災害や洪水対策の防災・減災学習を通して、生徒が自分自身や周りの人の命を守る知識・技能を高められるような内容にしたことである。また本校学区は高齢者や乳幼児が多い学区であることも踏まえて、自助だけでなく共助の力も高め、災害時に地域の即戦力となれるような人材を育てるプログラム内容を考えた。

しかし、９月下旬にあった台風 15 号の被災経験から、台風対策や豪雨対策、さらには断水時の行動（個人としての自助、地域貢献としての共助）などもプログラム内容に含める必要性を感じた。この点においては、生徒が探究テーマを再設定できる機会を設け、より地域に貢献できる防災・減災対策を考えさせた。さらに、来年度以降の総合的な学習の時間で行う防災・減災学習のプログラムにおいても軸となる活動として盛り込んでいく予定である。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

活動終了後に「防災の意識度調査アンケート（回答数：ｎ＝433)」を行ったところ、「この学習を通して防災・減災の意識が高まった」と回答した生徒は 96.6%だったことから、ほとんどの生徒の自助の意識が高まったと言える。これは、地域で防災・減災における探究成果を発表した２年生だけでなく、１年生は自助の力を高めるプログラムを進めてきたこと、そして３年生は「防災・減災で地域貢献する」という軸を基に自治会別のハザードマップを作成する活動を行ってきた結果だと考える。

また、防災・減災の意識や能力の伸長だけでなく「仲間と協働する力」(78.9%)、「情報を収集する力」(62.4%)、「地域に貢献しようとする力」(61.0%) などはアンケートの回答数が多く、生徒たちは多様な汎用的能力を高めることができたと考える。本校で行った防災・減災学習は、総合的な学習の時間を中心に行ったプログラムのため、生徒たちは自助・共助の意識だけでなく様々な資質・能力を身に付けることができたと考えられる。

最後に、具体的な生徒の変容でとして以下のエピソードが挙げられる。本校学区は９月下旬に台風 15 号の被災を受けた地域であり、床下・床上浸水や断水等の被害を受けて１週間の休校期間があった。本校でも教員が被害家庭の把握や連絡等で忙しかった中で、本校の生徒が自ら災害ボランティアに登録し、地区の被災した家庭のごみ出しや片付けを手伝っていたことが地元の新聞（静岡新聞）に取り上げられた。その生徒は本校の３年生で、「自宅は無事だったので参加した。学校で『中学生は災害時に力になれる』と教わってきた」と話してくれた。このことから、学校で防災・減災学習を続けてきたことで生徒の地域貢献への思いが少しずつ育ってきて、それが行動変容に繋がったことが分かり、防災・減災教育を手探り状態で進めてきた本校教職員は大変勇気づけられた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

この防災・減災プログラムをもっとも前向きに捉えてくれたのが「地域」であった。本校学区は 17 の自治会から構成されており、どの自治会も中学校・中学生との連携を考えていたが、その方策に悩んでいたところであった。そこに、地域にとって喫緊の課題であった災害対策に対して、中学校として「防災・減災」をテーマにした総合学習を本格的に始めたことで、学校と地域に「防災・減災」という共通点が生まれ、両者の連携・協働をゆるやかに始めることができた。年間を通して自治会長には数回来校してもらい、自治会長と生徒との交流を深めるとともに、本校生徒は 12 月の地域防災訓練に積極的に参加した。さらに２年生は探究学習の成果を地域の方々に向けて発表した。これらの活動を受けて、地域からは「中学生が地域の活動に参加してくれて本当に有難い。」「中学生が防災の意識をもってくれると各家庭の防災意識も高まり、地域の自主防災の力が高まる。」「ぜひ来年もやってもらいたい。」という感想があった。このように、学校と地域の連携・協働ができたことが今年度一番の成果であった。

また教員にとっては生徒が自助・共助の力を高めるだけでなく「課題を設定する力」「情報を収集する力」「表現する力」などの汎用的能力が高まる姿を見ることで、防災・減災教育へのモチベーションを上げることができた。さらに９月下旬にあった台風 15 号の被災から、現実的に起こり得る災害に対してより実用的な自助・共助の力をつける防災・減災教育の必要性を感じ、主体的に働きかけて生徒の自助・共助の意識を高めようとする教員の姿が見られた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

工夫した点は以下の３点である。

①学年ごとにテーマを設け、段階を踏んで防災・減災における地域貢献の力を付けるプログラムであること。

→各学年のテーマは先述した通りであり、本プログラムは３年間を通じて生徒の自助・共助の力および汎用的能力の伸長をめざしたものである。学年が進むにつれて自分から地域へと意識が向くようにプログラムを構成し、最終的に地域に貢献する中学生の育成を目指した実践である。

②自分の住む地域の災害上の特性に応じて各自で探究課題を設定し、探究のサイクルを回したこと。

→地域に発表する２年生は７月に一度探究課題を設定したが、９月の台風 15 号の被災を受けて、より地域の実態や災害時に感じたことを発信できるように再度テーマを設定した。その後、探究のサイクルである「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を行い、最終的に「地域の特性を考えた災害対策」を地域に向けて発表した。

③県下一斉の地域防災訓練の場で、中学生が地域に向けて探究成果を発表したこと。

→静岡県では毎年 12 月の第一日曜日に、県下一斉で地域防災訓練が行われている。これを中学生の探究成果の発表の場と捉え、自治会との繋がりを形成してきた。当日は、台風 15 号の被災により会場が使えなくなった自治会を除き、15 の自治会で発表を行うことができた（１自治会は２年生がいなかったため発表なし）。発表をした２年生は、地域での発表を目標に探究学習を進めていき、入念に準備・リハーサルを行い、当日は堂々と発表することができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今年度、初めて防災・減災教育を本校に導入したことで浮かび上がった課題は以下の３つである。

①多忙な学校現場に、いかに負担感を減らして実施できるか。

→学習指導要領の改訂、コロナ対策、いじめ・不登校生徒の増加や特別な支援を要する生徒への対応等で多忙を極める学校現場において、新しい取り組みを導入・実施することは、大変難しいことである。そのような状況の中で、いかに負担感を減らし、その効果を最大限にあげることができるかを考えなければならない。

②防災・減災教育に対する教職員の意識や理解度をいかに上げられるか。

→上記で触れたように、ただでさえ忙しい学校現場に加え、自身の教科や学級経営で精一杯の教職員が多い状況である。その負担感から、本来意義深いものである防災・減災教育に対して抵抗感を示す教職員がいる可能性がある。「学校全体で防災・減災教育を推進する」「防災・減災教育を学校改善の方策とする」ことをいかに全教職員で共有できるかを考えていかなければならない。

③地域の期待と学校の現状のギャップをいかに埋めていくか。

→今年度の取り組みを通して、地域は中学生に大変期待していることが分かった。しかし、学校は防災学習だけをやっていればよいわけではなく、多くの学校行事や様々な教育活動が展開されている。そのような中で、どれだけ地域と連携して防災・減災学習を進めていけるのか、学校の実態を見ながら取り組まなければならない。

以上の課題に対し、改善に向けた方策や今後の展望として、以下の３点を考える。

①防災・減災教育だけでなく、学校の教育課程全体とのバランスを見ながら重点的な活動として位置付けていくことが重要である。その際、教頭や教務主任と連携しながら活動の精選を行い、他の学校行事との兼ね合いを考慮しながら軽重をつけて防災・減災教育を進めていく必要がある。また可能であればコミュニティ・スクールの活動として地域を取り込んでいくことで、これまで学校が抱えていた負担を地域に移していけるようにしていきたい。

②教職員の意識の向上は、「これまでの業務プラスアルファ」というイメージをもたせないことが重要である。そこで、防災・減災学習やアウトプットに関する事柄と自身の教科との関連を考え、“教科横断的な学び”として教科の授業の中で教えていくようにしていくことが考えられる。また、「防災・減災教育が地域貢献する生徒の育成に繋がる」ことを全教職員で共通理解できるように研修を行っていく必要があると考えられる。

③地域の期待と学校の現状とのギャップについては、対話を重ねて両者の折り合う地点を見つけていくことが考えられる。その際、先述したようにコミュニティ・スクールの枠組みを活用しながら、学校も地域も win-win な関係性を築けるように、学校の実態を見ながら管理職と連携し、最善の取り組みを模索していく必要があるだろう。

7）その他（※特にあれば記述）

活動の様子の資料として、12 月 4 日（日）に行われた地域防災訓練での写真を添付します。

| 学校名 | 奈良教育大学附属中学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 中村基一 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 私たちの町「奈良」を守り続けるために、今何が必要か？ |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　社会科・総合的な学習・部活動（ユネスコクラブ）　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（〇）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　１・２　学年　１５　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ３　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １０　人　【保護者・地域住民・その他（東大寺職員　消防署員　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２　年　１０　月　　日　～　西暦　２０２３　年　２　月　　日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（　）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

世界遺産にも登録される多くの文化財を有する奈良で、貴重な文化財を災害から守るために必要なこととは何だろうかを考え、後世に伝えるために何ができるのかを考える。また、ユネスコスクールとして、世界遺産である奈良の文化財を守り伝えて行くことの大切さを知り、それを実行するために必要な施策や自分たちにできることは何かについて、生徒自身が外部へ発信していく。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

１０月２８日　事前学習会
１１月　５日　東大寺の防災対策を実地見学
１１月２８日　奈良市消防局で訓練用模擬仏像に触れ、当時の様子や現在の対応方法を学ぶ
１２月１６日　事後学習とまとめ
　１月１１日　教員研修会
　１月１８日　校内発表会と防災・減災啓発クリアファイルデザイン募集

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
　昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

被災地のリアルを知ることが、私の意識を大きく変容させた。こうした被害をいかに減らすのか、これが防災・減災教育によって達成することができるのだという、意識を強く持つことができた。そのため、生徒に対しての、事前学習や、取り組みの際のフォローアップがうまくできたと感じる。

助成金をいただいたことで、対外的な活動ができた。その対外的な活動で生徒と教員だけでなく、地域の方々や、消防局の方々とも繋がることができた。こうしてできたつながりは、今後もなくならないので、大きな財産となった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災減災教育の第一歩を踏み出せたことが成果の一つだと感じる。例年も避難訓練等は行われているが、大きな災害を意識しながら生徒たちを動かしていくことはとても難しいと感じていた。また、日常業務の多忙感から「これくらいしておけばいい。」という、安易な妥協がすくなからずあったが、災害現場を目の当たりにしたことで、積極的にかかわろうと考えるようになった。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

生徒のアンケートから、「頑張って火災を消してくれたり、消火栓の使い方を広めたりすることで行っている」・「どんな防火設備があるのかもあまり知らなかった」といった、受動的なものであったり関心がないといった状態がうか

がい知れた。学習のなかで、減災に取り組む人々の思いを知ることで、目の前の仏像がこれまで多くの人々の思いが紡がれた結果、残されていることを知った。千年以上の時を経ても残されている文化財をこれからも引き継ぐこと、そしてそのためには、災害に対する備えを自分たちもしなければいけないのだと体感できた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

東大寺という、地元の大寺院とのつながりをもつことができた。関係者の方々は中学生が防災についての理解を深めていく姿に感心されていた。また、地元の中学生が防災や減災を学ぼうとする姿勢や、東大寺の防災設備の充実ぶりに驚く様子を見て、防災の取り組みも発信していく大切さや、寺院の防災減災のお取り組みを見つめ直す機会となったと推察する。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

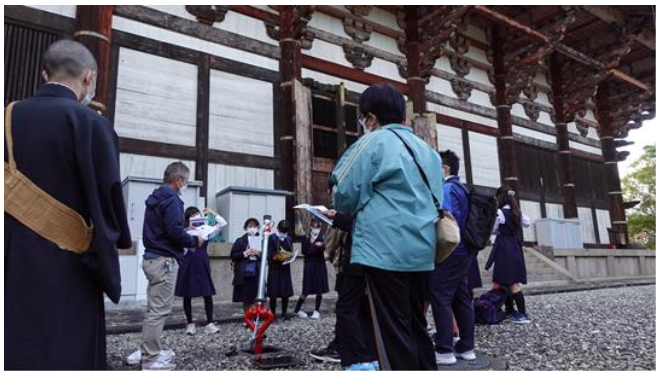
プログラムに参加した生徒達に防災や減災に関する施設等を見学させて、感想をきいたり意識の変容を促すだけでなく、全校生徒に対しての発表を行い、そのスライド等を自分たちで作らせることによって、自分たちのプログラムの有用性を実感させようとしました。思考や行動の変容が自分たちだけで終わるのではなく、その変容の輪を全体に広げていこうとさせることができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

今回は、希望者を募る形で実践を行い、その成果を校内発表を行って学校全体で共有する形をとった。こうした公募形式での取り組みでも、本校では比較的人数が集まるのであるが、今回のプログラムに応募した生徒が比較的少なかった。東日本大震災での津波をリアルタイムに見ていない、もしくは幼く覚えていないため、生々しい出来事として認知できていなかった。また、海なし県でもあり津波に対する感覚が鈍い部分も感じた。今回のプログラムに近い、阪神淡路大震災の建物の倒壊や、火災による被害も年月がたち、風化が進み生徒達に自分事として感じる事ができなかった。そのため、防災減災についてもっと知りたい、考えたいという意欲が高まらなかったと考えられる。実際、実践に参加した生徒達の学びは深く、こうした学びを今後シェアしたり、活動を継続したりことで意欲を高めていきたい。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。



| | |
|---|---|
| 学校名 | 岡山市立操南中学校 |
| 担当教員名 | 竹島 潤（教務主任・総合学習主任）・大島 悠（防災安全指導主任）・江國 友哉（総合学習副主任） |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域や専門機関と“つながり合う”防災学習プログラム |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間・特別活動） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（○）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（○）地域発信　（○）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | 全校約 800 人 |
| 活動に携わった教員数 | 約 60 人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 約 40 人　【保護者・地域住民・その他（行政・NPO・有識者）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　９月　１日　～　西暦　２０２３年　３月　２２日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（○）津波　（○）台風　（○）洪水　（○）河川氾濫　（○）土砂　（　）その他（○） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

昨年度からカリキュラム開発に取り組んでいる第１学年総合的な学習の時間（防災学習プログラム）と特別活動（避難訓練・校外学習等）を連動させるとともに、本校教育活動と地域防災活動に繋がりを持たせることで、マルチステークホルダー連携と世代間交流を伴う地域を視野に入れた防災・減災学習を推進することを目指した。また、第１学年防災学習実行委員会を立ち上げ、事前・事後の活動や当日の進行などに携わるリーダー生徒の育成とその教育的効果が学年全体に波及することを狙った。本プログラム実践に先立ち、全校から有志生徒約 40 名を公募し、「操南中・断熱改修ワークショップ」を実施し、気候変動と重大災害発生の繋がりについても想起させた。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール　※第１学年総合学習プログラムおよび全校での避難訓練から成る。

9 月　阪神淡路大震災について学ぶ　（資料活用）
　東日本大震災について学ぶ　（資料や現地ボランティア活動報告）
　西日本豪雨災害について学ぶ　（講演会）
　**ゲスト講師**：横溝　龍一　氏（元倉敷市立小学校長）
10 月　防災について学ぶ　（紙芝居・講演会・ワークショップ）
　**ゲスト講師**：近藤　真吾　氏（岡山市危機管理室）
　木戸　崇之　氏（人と防災未来センターリサーチフェロー）
11 月　神戸防災研修（現地・班別自主研修）
　振り返り Chromebook スライド作成・クラス＆学年発表会
12 月　避難訓練　地震・津波想定　（地域自主防災会参加）
　「防災サミット」2022　（同上・オブザーバー参加・意見交換）
　**ゲスト講師**：磯打　千雅子　氏（香川大学特命准教授）
　操南公民館での防災地域交流会　（防災実行委員会代表生徒）
※「防災教育チャレンジプラン」　※トルコ南部大地震緊急支援

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月研修会で、災害について多面的視点から知り・学ぶことの大切さを再認識でき、前年度に試行した取組を踏まえてゲスト講師と改善点を共有することができた。また、助成金を活用したゲスト講師の招聘や意見交換により、防災・減災に焦点化した地域・非営利セクターとの連携・協働を継続できた。昨年度はバーチャル研修のみだった「防災神戸研修」は「復興の前・後」を軸とした班別学習において、北淡震災記念公園、野島断層保存館、東遊園地などで貴重な展示、メモリアル、建造物などを直に訪問し、五感を通じてまちづくりや復興への人々の思いや努力、防災・減災への寄与・貢献への気づきと学びを得られた。その後の地域自主防災会及び公民館と連携・協働した避難訓練に繋げられたこともよかった。これらの知見を生かし、持続可能な学習プログラムを構築したい。

４）実践の成果

①減災（防災）教育活動・プログラムの改善の視点から

新型コロナ感染拡大状況のみならず、その教育効果や時間的・経済的な影響も見極めながら、オンライン・対面の併用で行うことができた。神戸防災研修（実地）の準備・計画・振り返りの時間を確保するため、昨年度実施した防災運動会は割愛したが、「岡山市総合防災訓練」が学区内小学校で開催されたことで、管理職や担当教員、実行委員会生徒等が参加し、本プログラムへの意識付けになった。また、地域交流会のテーマを防災・減災に焦点化させ、避難訓練の計画・実施を地域や有識者の方々と行ったことで、生徒が学びを自分事にしていく工夫ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本校教育目標「心豊かな自立した生徒の育成」においては、「よりそう」と「つながる」を合言葉に、生徒たちの「自己実現力」「社会性」「共生力」を伸長させることを目指している。本プログラムでは、防災・減災学習を通して育みたい「資質・能力」と「３助」を次のように関連付けてカリキュラム開発してきた。

【知識・技能】※自己実現力

「自助」（知識をもとに判断し適切に行動できる）

【思考力・判断力・表現力】※社会性

「共助」（現地現場・当事者・専門家・地域住民からの情報をもとに、地域の防災上の課題について探究的に学習することができる）

【学びに向かう力・人間性等】※共生力

「公助」（地域とのつながりを大切にし、自分たちにできる地域住民への発信や地域防災活動に取り組むことができる）

授業や発表会でのプレゼン内容や質問、ワークシートの記述コメント、地域活動での主体的な態度などから、学年全体として概ね、上記の力を身につけさせることができたと考えている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

昨年度に続いて、地域や関係機関とも連携を図ることができ、より親密な「つながり合い」ができた。本校の評価指標の一つである「岡山市総合教育調査アンケート」において、「学校と地域とのつながり」に関わる質問項目への肯定的回答が、生徒・保護者・教職員のいずれも、本市平均よりも高いことにも寄与していると考えている。

また、活動自体に終始するのではなく、事前・事後学習を大切にするよう心掛けることができた。代表・有志生徒のみが参加した取組も、個人的体験で終わらせるのではなく、全校放送やスライド発表による全校（学年）への還流学習として充実させることができた。さらに、地域自主防災会の方々や公民館、関係機関とも、取組の前後で気づきや成果を共有することができた。最後に、教職員においてもプログラムのみならず、分掌会やミニ研修などの機会を通じて、防災・減災教育の意義について考え、日頃の意識と日常的な行動力を高めていかなければならないということを改めて再確認できたので、来年度以降の継続的な活動につなげていきたい。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本校の実践は、教育目標と生徒会 SDGs 宣言を基盤に、生徒主体による体験学習と地域・専門家の方々等の多様なつながりを生かした学習プログラムである。総合的な学習の時間と特別活動（旅行・集団宿泊的行事、避難訓練）を連動させることで、生徒の学びがスパイラルなものになる工夫をしている。災害の現実を学ぶにあたり、国内未曾有の激甚災害である東日本大震災、西日本豪雨災害、阪神淡路大震災について、いずれも被災・支援・発信などそれぞれの立場で当事者であられる方々と時間を共有して学べるステージがあることは特筆すべきものと考えている。

今回、地震・津波を想定した避難訓練では、管理職・教務・防災／安全教育・総合学習などの各分掌が横断的に連携し、さらに地域自主防災会や専門家の方々にご来校していただき、中学生と共に参加、活発な意見交換ができた。まさに「操南学区」全体で防災について考えられるプログラムであることが、最大の強みだと考えている。

2023 年２月に起きたトルコ南部大地震に際しては、生徒会と有志生徒が「トルコ南部大地震緊急支援プロジェクト実行委員会」を立ち上げ、日本と友好関係のあるトルコの被災者の方々への募金、応援メッセージ、学校間交流等に取り組み、NPO 連携下、在名古屋トルコ総領事館や外務省、他校との情報・意見交換も行うことができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

防災・減災学習を通じて、育成すべき「資質・能力」は生徒だけではなく、教職員や地域住民にも通じるものであると感じた。今年度の知見を生かしながら、来年度も本校ならではの防災・減災学習プログラムに取り組んでいきたい。現在、学校内に止まらず、地域・社会に開かれた視点でカリキュラム開発に挑んでいるが、さらに家庭（保護者）や子ども世代（幼・小）を巻き込んだ取り組みができればと考えている。その発想の一つに、「地域防災キャンプ」や子どもたちや家族を対象にした公民館講座の活用がある。これらを実現することで、本市における防災・減災教育のモデルを提示できるであろう。

７）その他（※特にあれば記述）

今回、「アクサ・ユネスコ協会 減災教育プログラム」に採択いただいたことで、本校の特色ある教育活動として「防災・減災教育」を明確に位置付けることができた。全国各地の意欲あるゲスト講師や先生方、好事例との出会いをもたらしてくれる本事業に敬意と感謝を表したい。最後に、「つながり合い」の思いを以てご助力ご支援いただいた、地域や国内外の外部・専門機関の方々に感謝申し上げたい。

【記録写真】（写真と同配置）

・オンライン講演会（西日本豪雨災害）　・バーチャル神戸研修（阪神淡路大震災）　・岡山市総合防災訓練（地域自主防災会）
・全校＆地域での避難訓練（地震・津波）　・防災地域交流会（多世代交流）　・防災サミット SONAN 2022（オンライン会場）

| | |
|---|---|
| 学校名 | 福岡市立春吉中学校 |
| 担当教員名 | 荒木　孝之 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域の実態に応じた減災活動 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な学習の時間） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（〇）専門家の活用　（　）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（　）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　全学年　６９５人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ４６　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ４　人　【保護者・地域住民・その他（福岡市役所防災担当）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　７月　１９日　～　西暦　２０２３年　３月　２４日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（　）津波　（　）台風　（〇）洪水　（〇）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・総合学習においては、「春吉ユニバーサル・プロジェクト」という活動の中で、①春吉中校区があらゆる人々にとって自分らしく生き生きと安心して生活できる街であるか検証し、課題を明らかにすること。②春吉中校区住民であることに誇りをもたせること、③春吉中校区において共生を実現するために何をすべきか考え行動する態度を育成する。その中で防災教育について地域の防災マップの作成や地域の方とのパネルディスカッションを通して減災・防災に対する意識を高め、災害時に何をすべきか考え行動ができる知識と態度を身につけさせる。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

７月　・防災教育ガイダンス（防災マップの作成について）
８月　・防災マップの作成（個人）
　　・学級で班ごとに地域安全マップの作成（班）
９月　・春吉ユニバーサル・デー
　　① 自然災害に対する福岡市の取り組み（南区役所防災・安全安心係）
　　② 防災ワークショップ（DIG 防災マップを活用した災害図上訓練）
　　③ パネルディスカッション（災害が発生したときに中学生が地域住民としてできること）
１１月　・防災教育講演（９月の減災教育研修担当者からの講義）
　　・避難訓練（地震・火災）

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
　昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・福岡市南区役所防災・安全安心係や地域の方と連携した防災教育
・全校生徒・校内の教職員に向けた防災教育研修
・防災マップの作成や春吉ユニバーサル・デーに関連する機材の購入等

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・本校では近年防災教育に関して避難訓練のみを行っていた。今年度は全校生徒を対象に防災ユニバーサル教育として地域における災害の危険性のある場所を考えた防災マップの作成、地域や福岡市南区役所との連携した防災教育の実施、減災教育研修を受講した教員による、防災教育講義、避難訓練を実施することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・防災マップの作成のため、校区の特徴を防災の視点で見ることで、災害時の避難方法や、備えておいた方がよいものは何かを考えることができるようになった。また、防災学習におけるアンケートを実施したことで、生徒の６割が災害に関しては身近なことだと思うが普段は意識していなかったということが分かった。防災教育に取り組んだことで迅速で安全な避難訓練を行うことができたとともに、改めて自然災害に対して日頃からの備えの大切さを確認するなど、災害時や避難時の判断力を養うことができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・防災ユニバーサル教育を通して、福岡市南区役所防災・安全安心係の方から福岡市における災害時の対応や自助・共助・公助の重要性を確認することができた。また、地域の方との防災パネルディスカッションを通して災害時に地域住民として中学生ができることを討議することができた。防災教育に関する講義を通して東日本大震災の被災地の状況や被災地の減災に関する取り組みなどを教師にも共有することができた。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

・生徒が各個人で防災マップを作成しその後班ごとに地域防災マップを作成した。また、福岡市南区役所防災・安全安心係の方とともにDIG（災害図上訓練）を行った。防災ユニバーサル教育と位置づけ地域の方と災害発生時に中学生が地域住民としてできることは何かをパネルディスカッションするなど学校内の活動だけでなく、地域・区役所と連携して取り組んだ。減災教育研修後、全校生徒対象の防災教育講義や避難訓練の実施、給食時間に防災に関するクイズを行うなど、防災教育に関する内容を教育活動に反映させたこと。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・今年度は防災ユニバーサル教育として総合的な学習の時間に防災の内容に特化した活動を全校で取り組むことができたが、次年度以降も何年生の総合的な学習の時間に防災に関する内容を取り入れるかなどカリキュラム的なことも踏まえて継続して発展させていきたい。各学期に行っている避難訓練を形式的なものにするのではなく意識を高める活動や実践力が高まる活動になるように教職員への研修も必要である。今後も年に一度は地域と連携した教育活動を継続的に行っていきたい。

7）その他

○防災マップ作成の様子・防災マップ

○防災ユニバーサル・デーの様子

| | |
|---|---|
| 学校名 | 大牟田市立宮原中学校 |
| 担当教員名 | 高倉洋美 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 地域を知り、地域を守り「地域とともに生きる子ども」を育てる防災・減災教育 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　行事・総合的な学習の時間　　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（〇）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（〇）教科連携　（　）地域発信　（〇）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　全学年　２７３人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ３３　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ４０　人　【保護者・地域住民・その他（防災危機管理室・消防救急隊）・福祉課】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦２０２２年　５月　１１　日　～　西暦２０２３年　２月　１７日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（　）津波　（〇）台風（〇）洪水（〇）河川氾濫　（〇）土砂（〇）その他（Ｊアラート） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

大牟田市は、災害の少ない地域であることで、ほとんどの教職員も生徒も自分事としての危機感をあまり感じていなかった。しかし令和２年７月の豪雨災害では、学校で避難を強いられ校内で一夜を過ごした生徒・教職員もおりまた、自宅も被災した生徒もいた。被災して初めて、「大牟田も災害が起きる」という意識が教職員にも芽生え、以前にアクサユネスコ減災教育プログラムに参加した市内の学校の防災・減災学習の主な取り組みを学びつつ、少しずつではあるが、本校も防災学習に取り組むようになっている。しかし、まだまだ避難訓練は形式的なものでしかなく、学習もイベント的な学習にとどまっており、さらに防災・減災教育に対する意識を高め計画的に取り組む必要があると考えた。また、生徒たちにも「自分の命を守る」力を身につけさせることはもちろんのこと、本校校区は市内でも高齢化率が高くまた、本校は避難所にもなっていることから、本校の重点目標でもある「地域とともに生きる」力を発揮できるよう、防災・減災学習をきっかけに地域の現状を知り、地域の課題に気づき、地域のために何ができるかを考え、自ら行動できる力を身につけることをねらいとした。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

**①市役所防災危機管理室とのカリキュラムの作成**

避難訓練から、防災・減災学習のカリキュラム作成に専門的な指導助言をいただいた。

**②２年総合的な学習の時間（６月９日～６月２９日）防災・減災学習**

防災危機管理室の指導助言を受けた学年の担当職員が手探りの状態から学習を組み立て取り組んだ。

| 学習テーマ | 学習のポイント | 具体的な学習内容 |
|---|---|---|
| オリエンテーション | 地域の現状を知る。 | 令和２年７月豪雨災害の動画・地域の災害状況マップを使用<br>当時の豪雨の様子・被災状況の確認 |
| 大雨防災ワークショップ | 被災時に自分たちにできることを考える | 大雨防災ワークショップレクチャービデオ版を使用<br>・被災時の状況を分析し、どのように対応したらよいかを考えた・グループでまとめ発表した。<br>・避難所としての本校の役割を知る。<br>・避難所の備蓄倉庫の物資の確認<br>・段ボールベッド等の組立体験 |
| 防災グッズについて知ろう | 自宅での防災 | 日頃どのような準備をしておく必要があるのかを考えた。<br>・防災グッズの役割<br>・自分の自宅での防災グッズを準備しよう |
| ハザードマップの作成 | 地域のハザードマップ作成 | 自分たちのすむ地域の危険個所を確認し、ハザードマップを作成した。<br>・通学路の危険個所の再確認<br>・地域への呼びかけ |
| 防災・減災学習のまとめ | 家族で防災・減災について話し合おう | これまでの学習のまとめとして、我が家の防災計画シートを作成。自宅に持ち帰り、家族と防災・減災について話し合った。 |

**③体験型「緊急地震速報を利用した避難訓練」**の実施（１１月２７日・２８日）

どのように緊急地震速報が発表され、アラーム音が鳴るのかを学習することで、その後の行動をどのように取ったらよいのかを考えた。

・事前学習：大牟田市防災危機管理室の方に、「緊急地震速報」について解説をしていただ。

・動画を活用し、実際に緊急地震速報発表・アラームを使って避難訓練を行った。（別紙資料１）

**④３年「いのちについて考える」**

**「いのちのはなし」（１１月２日）**

助産師の方の講話を聞き、生まれてきた命の大切さを学んだ。また、２人の乳幼児とその母親であるゲストティーチャーを迎え、実際に「小さな命」と触れ合い、そのお母さんたちにも話を聞いて、命の大切さについて考えた。

**救急救命講習会（１２月１９日）**

消防署の方に命の大切さやその命を救うことの大切さの話を聞いた。

実際にAED・心肺蘇生法・応急手当の実技講習を受け、命を救う手立てを学んだ。

**⑤１年総合的な学習の時間「福祉×防災学習」（１月１１日～２月３日）**

大牟田市で作成された福祉手ぬぐい「おたすけ手ぬぐい」を活用し、障がいのある方やある高齢者にどのように接したらよいか、地域の一員として被災した時にどのような点に気をつけて手助けしたらよいか考えた。

ロールプレイングでは、実際に様々な障がいの当事者となり、「お助け手ぬぐい」を使って、どのように対応したらよいのかを考え工夫し合った。

また、助けようにも話すことができない被災者がいることや手話で助けを求めることもあることを知り、「助けて！」等の手話も学んだ。

３）<u>９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。</u>
<u>昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。</u>

・研修に参加し、形式だけの訓練・机上の防災学習ではいけない、自分事として自ら考え行動できる子どもたちを育まなければならないと痛感した。研修会での専門的な学びや視察等、防災・減災教育を指導する側の教職員の学びも重要と考え、教職員の研修への積極的な参加をすすめた。

・「防災・減災」への意識向上を図るために、大牟田市防災危機管理室と連携し、市内では初めての実施である地震速報を活用した新たな避難訓練を実施した。また、３学期の１年生の防災学習を元々の学習の柱である福祉学習とつないだ「福祉×防災学習」カリキュラムに変更した。

・助成金を活用させていただき、①専門家等の外部人材の積極的な活用が可能となった。②防災グッズの購入ができ、実際に手に取って学習することでイメージがつかめ、真剣に今まで以上に学習に取り組むこともでき危機感を募らせていた生徒もいた。

４）<u>実践の成果</u>

<u>①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から</u>

４月に赴任した本校では、これまで１年に２回の避難訓練と各学年でそれぞれが行う防災学習が実施されていたが、形式的な訓練で終わっていた。本研修に参加したことで、自分自身改めて防災・減災教育の重要性を痛感したため、２学期の２回目の避難訓練を教職員及び生徒が体験を通して自ら考え行動する「体験型の避難訓練」として提案。全職員の理解と協力を得て、関係機関の協力・指導のもと実施することができた。

子どもたちは、緊急地震速報のアラームを聞き、本当にこのアラームがなった時どのような行動をとったらよいのか、緊張感をもって真剣に取り組むことができ、あらためて自分たちの防災・減災に対する課題にも気づき、今後どのように取り組んでいかなければならないか考えを深めることができた。

<u>②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。</u>

（生徒振り返りシートより）

・たとえ大人の指示があったとしても、それが正しいかそうでないかしっかりと周囲を確認し自分で判断して行動しなければならないと感じた。（③体験型「緊急地震速報を利用した避難訓練」）

・アラームを聞いて、本当に地震がきそうでドキドキした。より一層緊張感が増した訓練だった。（③体験型「緊急地震速報を利用した避難訓練」）

・今回備蓄倉庫の確認や段ボールベッドの組立を体験して、避難所が身近に感じることができた。

・訓練だが、これまで以上に真剣に取り組む姿勢がみられ、さらに訓練後生徒たちの会話の中に、振り返りの声があちらこちらで聞こえた。自分事として捉えることができ始めていると感じた。
・避難訓練や防災学習後、実際に家で非常用持ち出し袋の確認をしたり、避難について家族と話すなどの防災への意識の向上が見られた。
・自分自身や大切な人の命を守ること、命を大切にすることへの意識が高まった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
・訓練事前学習での指導後に体験型の避難訓練を行うことで、教職員の防災・減災に対する意識が高まった。
・関係機関の方々から、生徒たちの活動の様子から今後どのような防災・減災学習を進めていったらいいかの指導・助言をいただいたことで、次年度のカリキュラムを作成していく見通しができた。
・地域の防災訓練に参加し、地域からの中学生など若い世代への期待が大きいことを実感した。今後これらの学習を通して地域とどのようにつなぎ、地域の担い手として育んでいくかが課題であると感じた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
・大牟田市防災危機管理室の協力・指導を受けたことで、より必要なこと、専門的なことを限られた時間の中で学習することができ、カリキュラムを考える上で専門家の指導・協力はとても重要であることがわかった。
・外部人材の活用において事前の打ち合わせを何度も綿密に行ったこと、作成した資料や訓練の目的・概要を全教職員が周知し、それぞれにさらに工夫した指導を生徒に行ったことで今回の避難訓練が充実したものとなった。
・実際被災した動画や写真等の資料を活用したことで、より一層自分事と捉えることができる生徒亜増えた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
・次年度からの学習テーマをしっかりと定め、教科・領域等での融合的な減災教育の３カ年を通した学習カリキュラムの作成。
・高齢化率が非常に高い地域であり、災害時に避難所となる本校では、地域の担い手となる中学生の役割は重要であり地域からの期待も大きい。今後保護者や地域とともに学び・考える防災学習を工夫し、地域とともに防災意識の向上を目指し、何時も互いに協力し合い助け合うことのできる未来を生きる子どもたちを育みたい。
・本校は令和５年度より、小中一貫教育に取り組むため、小学校３校との連携も重視し、学校運営協議会と連携協働を図りながら、本校区の防災減災教育の推進に努めていきたい。

７）その他（※特にあれば記述）
※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

【実践②２年生防災・減災学習】

〈備蓄倉庫の確認〉

〈ハザードマップ作成〉

〈大牟田市の防災マップ〉

【実践 3 年生「命を考える」】

〈乳幼児とのふれあい〉

〈救急救命講習会〉

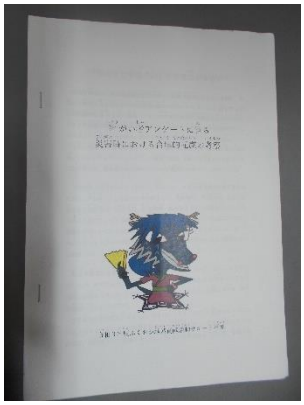
【実践⑥1 年生「福祉×防災学習」】

〈手話で「助けて」〉

〈要支援者を手ぬぐいで発見〉

〈おたすけ手ぬぐいで支援を求める〉

【防災バリアフリープロジェクトのみなさんの作成によるおたすけ手ぬぐい】



【地域・行政の方と危険個所確認】

| | |
|---|---|
| 学校名 | 北海道静内高等学校 |
| 担当教員名 | 内田大資（地理歴史・公民科教諭） |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 生活圏の持続可能な減災――新ひだか町協働減災プロジェクト 2022― |
| 主な教科領域等 | 教科領域（高等学校地理歴史科　地理総合） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（○）体験学習<br>（○）学校間・地域間交流　（○）教科連携　（○）地域発信　（○）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （1・3 学年 276 人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 5 人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 3 人　【保護者・地域住民・その他（　役場　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦 2022 年 11 月 7 日　～　西暦 2023 年 3 月 23 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（○）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

①持続可能な地域づくりの展望（より良い社会を創ることができるようになる）

・地域社会の課題解決のための主体的行動力を身につける。自分たちがアクションを起こす。

②自然環境理解×減災意識向上

・どこの地域に行っても減災できるようになる。「助けられる側」ではなく「助ける側」になる。

③背景：地震・津波日本海溝・千島海溝沿い巨大地震による被害（人口 2 万人中、6700 人の死者数想定）

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①内容（地域との協働減災）

・役場との協働によるプロジェクト学習（PBL）。役場からいただいた、本校生徒に探究してほしいミッションは

(1)「地震・津波に対する警戒心を再認識させるための対策とは？）

(2)「災害時の外国人に対する適切な非難対応とは？」の 2 つ。

②実施の流れ・スケジュール

(1) 10 月上旬：役場との打ち合わせ・合意形成・ミッション決定等

(2) 11 月上旬：ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ（見通し・個人目標）・自然災害ﾒｶﾆｽﾞﾑ・世界の災害事例（ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ）・日本の災害事例（阪神淡路大震災・東日本大震災・北海道胆振東部地震）・地域の災害（日本海溝・千島海溝地震）協働先の新ひだか町役場による授業（ﾐｯｼｮﾝ・ﾋﾞｼﾞｮﾝとｺﾞｰﾙ・現状と課題・理想と現実）

(3) 11 月中旬：仮説と計画設定・情報収集・整理分析・まとめ

(4) 12 月中旬：3 年次生（地学基礎履修者）及び沖縄県立普天間高等学校への発表及びディスカッション

(5) 2 月中旬：トルコ大地震に関するミニ探究

(6) 3 月下旬：東京都板橋区板橋第三者中学校への発表及びディスカッション
新ひだか町役場（協働相手）への最終発表会

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①研修会から活かしたこと（＝授業デザインの際に参考にできた）

(1) 小中高の防災教育の取り組み・気仙沼市の地域連携事例

(2) 被災地の様子（遺構・記録・語り手）

・初めて減災学習する私にとってカリキュラムアイデアが膨らんだ。

・役場との打ち合わせの際に事例を紹介し、効果を理解していただけた。イメージもしていただけた。

②助成金の活用で可能になったこと

・全国の防災減災教育を実施している機関に訪問し、情報収集や情報交換をして実践に活かすことができた。

（訪問先：兵庫県立舞子高校・JICA 関西・神戸市教育委員会・人と防災未来センター・神戸港震災メモリアルパーク）

4）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

(1) 被災地をはじめとする全国の減災教育の取り組みや視点を、地域の実情に合わせて取り入れたことができた。

(2) 目的と手段を履き違えない、目的を明確化した活動となった（地域を巻き込むプロジェクト学習）

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

(1) 学習前より自分ごととして主体的に取り組めるようになった。なぜなら学習前は「北海道や地域はあまり関係ない」というようなどこか「他人事」で「受け身」だった生徒が、実際の資料（写真やデータ）を情報収集していく中で日常生活との繋がり＝「自分ごと」を見出すことができているため。

(2)「減災」を持続可能かつ多面的多角的に捉えることができるようになった。なぜなら探究を進めていく中で自分たちだけではなく「高齢者」「外国人」「幼児」「妊婦」といった「それぞれの立場」の視点で解決策の実現性について考えられるようになったため。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

(1) 地域と学校が協働して減災学習を行なっていなかったため、「地域を巻き込む第一歩」としては大きいと考える。

(2) 校内でも理科教員や英語教員との教科横断授業を行ったり、発表会には校内の教員も見学に来ていただき減災学習のイメージを膨らませるだけではなく、アイデアを出し合うことができた。

(3) 北海道内だけではなく、沖縄県普天間高校や今回の研修で縁があった東京都板橋区板橋第三中学校と減災について考えることができた。この様子を北海道内のテレビや新聞で取り扱っていただき、高校生の減災の取り組みとして発信できた。

(4) 保護者を巻き込むために、生徒が活動終了後に保護者に報告や家庭で減災について話し合ってもらう。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

①「地域の大人が困っていること＝地域の課題＝自分ごと」となるような授業デザイン。

②「自助・共助」の視点で捉えるようにした。実践初年度ということもあり、自分ごととして捉えるために「公助」よりも「自助・共助」の視点で課題探究を図った。

③減災に関する他地域の事例を学び、地域の実情に活かせるかという視点を身につけることを心がけた。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

・時間配分と確保の大切さ。もっと細かい情報収集をすることで、減災探究も深化できると感じた。

・他教科との更なる教科横断学習。次年度は理科に加え、歴史・英語科・保健体育科と連携予定。

・研修での情報は活かせたが、専門家との繋がりが持てなかったので次年度は実現する。

（写真１ 協働相手の新ひだか町役場の方々による想いや現状と課題に関する情報収集）

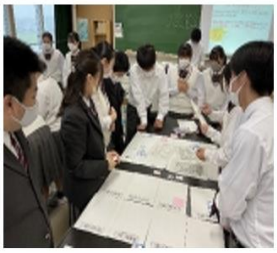
（写真 2 外国人との多文化共生が進んでいる中標津町の事例を学ぶ）

（写真 3 担当教員による研修（気仙沼市）で学んできた情報の提供）

（写真 4 理科（地学基礎）との教科横断　避難所運営ゲーム「Do はぐ」への参加）

②「防災」に関する先行学習（理科・地学基礎（３年次）への見学・参加）（６月）

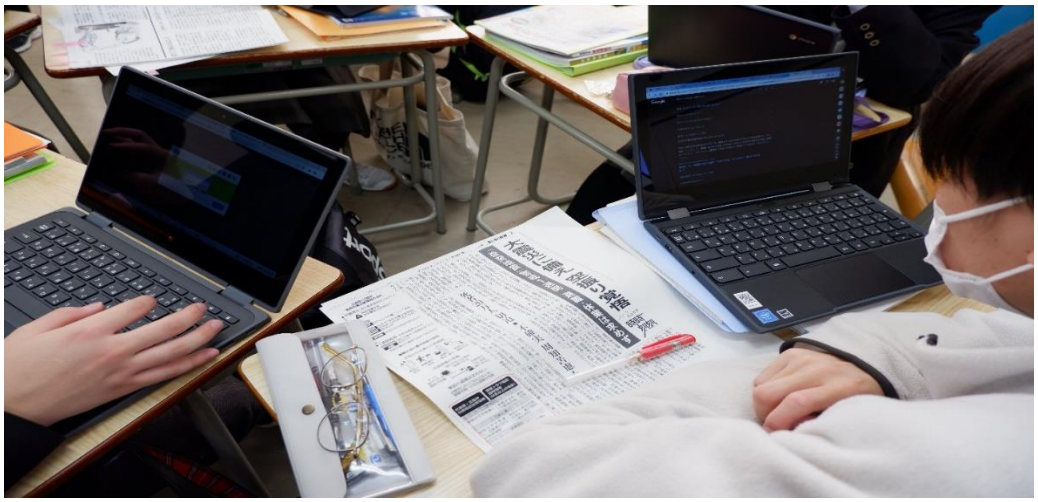
『地理総合』（１年次）では「防災・減災」について学習します。本校では理科『地学基礎』（３年次）で毎年「地域防災学習」を進めており、６月末に３年次生の授業で『避難所運営ゲーム「Doはぐ」』が実施されていたため、「防災・減災」の先行学習として、見学・参加させていただきました。



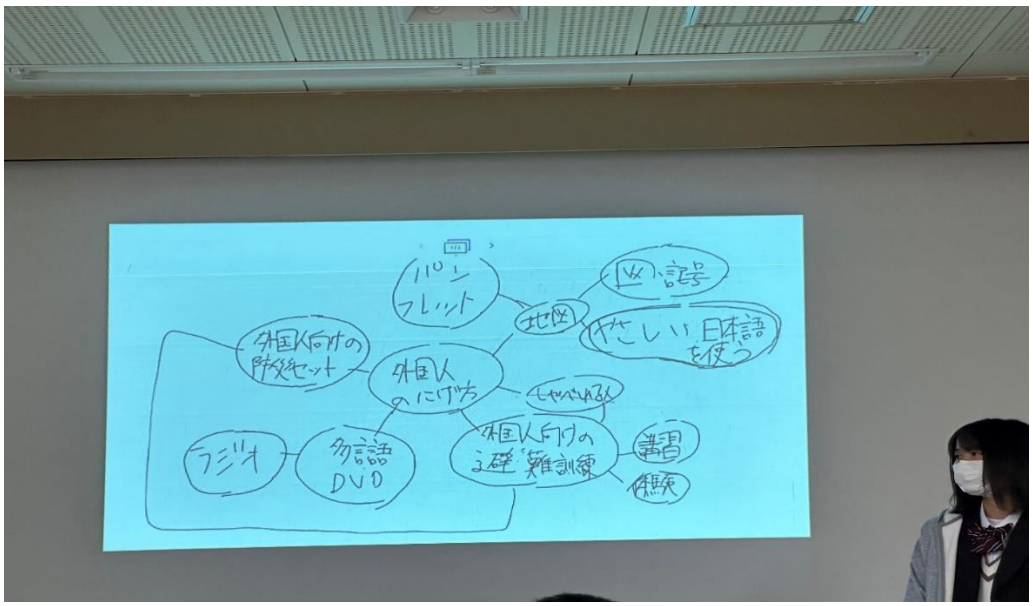
理科の教員からの説明（生徒からの質問も）、３年次生との交流を踏まえ、防災に対する意識・関心を深めました。

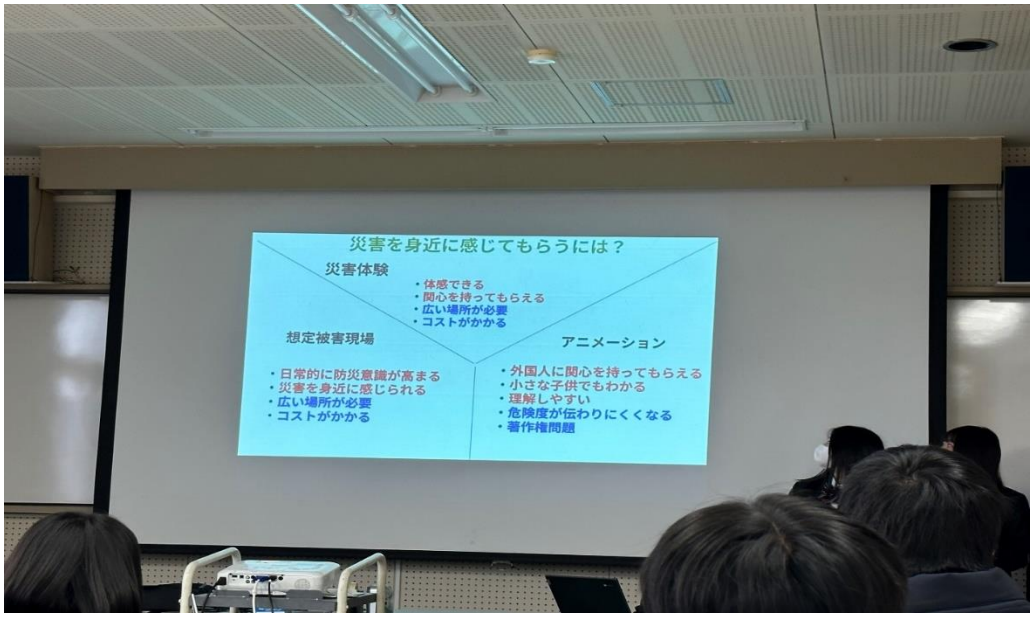
（写真５・６ 北海道内の研究授業での発表）

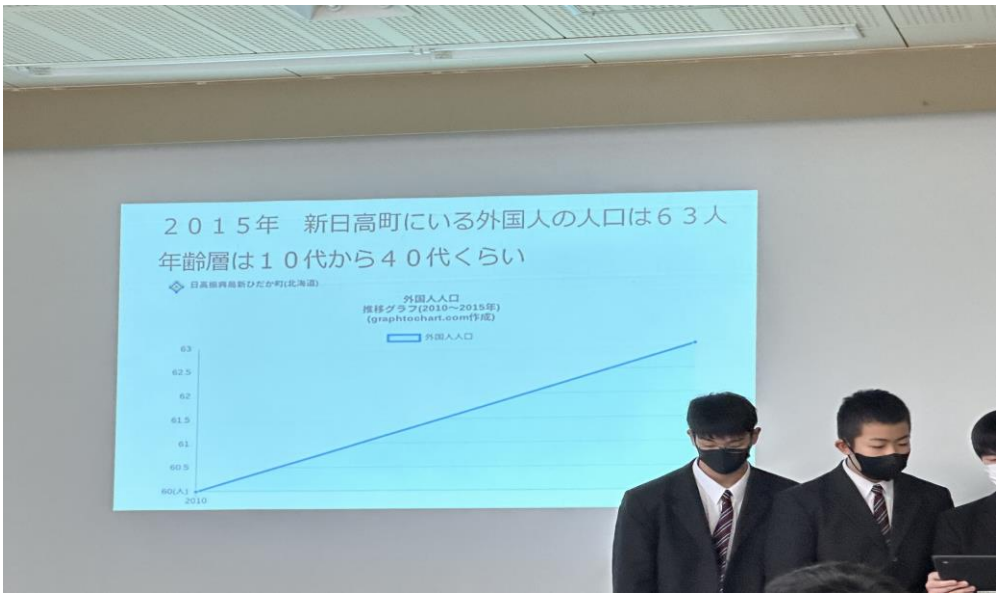
（ハザードマップや防災ガイドブック、減災や震災に関する新聞記事から、収集情報を目的に合わせて整理手法（思考ツール）を選び、手法を活用して視覚化し、知識（情報）を俯瞰的多面的多角的に捉え、足りない情報と更に調査したいことを明確化）



（写真７ ・８・９　３年生に向けた中間発表の様子）





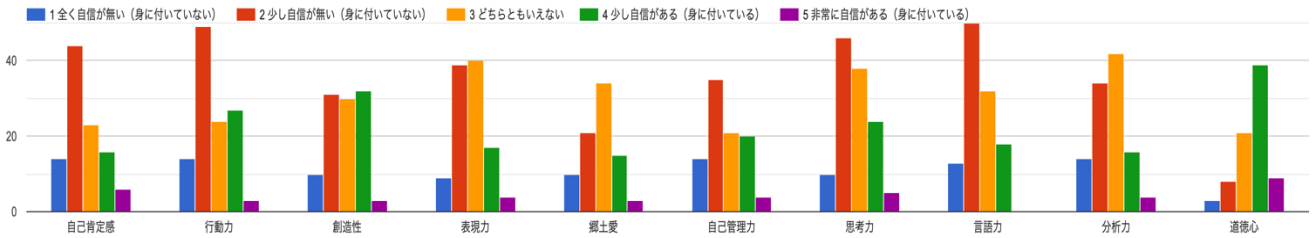




（写真 10・11　沖縄県普天間高校への発表及びディスカッション）

（写真 12　道内のテレビ局で減災活動が放映）

（写真 13　今回の減災学習の生徒の成長確認データ。緑色や紫色のデータが伸びていれば、成長した証）
（上は 11 月時点、下は 3 月時点）

上記で選んだ「身につけ、磨きたい力」は、現時点のあなた自身、1~5のうち、どれに当てはまりますか？※上記で選んだ力以外は選ばなくて（空欄で）良いです。



| | |
|---|---|
| 学校名 | 宮城県気仙沼向洋高等学校 |
| 担当教員名 | 昆　洋一 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 防災教育ブラッシュアップ |
| 主な教科領域等 | 教科領域（学校行事（避難訓練），語り部活動） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（　）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（　）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　　学年　２９８人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | １０　人（避難訓練は全職員） |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １０　人　【保護者・地域住民・その他（　伝承館職員　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年　９月　１日　～　西暦２０２３年　３月１２日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（○）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（火災） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

防災学習を恒常的に更新し，内外情報を収集し，「防災・減災について学び続ける。」

本校の防災学習の取組

①自分が知っていること，震災を経験(学習)して思ったことを伝える。『教訓を継承し，未来につなぐための重要さ』を学ぶ。⇒語り部の継承

②防災の日常化，「震災後」ではなく「震災前」と意識し，次の震災に備える。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

①伝承館での語り部活動中の災害を想定

６月　新入生の語り部勉強会
　　伝承館からの避難経路確認
　　語り部中の避難経路・誘導を検討
８月　トランシーバー購入を検討
１２月　館内での使用検証，災害時の対応を訓練

②避難訓練の内容検討

４月　昨年度の避難訓練及び防災教育の検証
５月　避難訓練の内容，シナリオ作成
６月　地震津波避難訓練**（避難場所変更）**
９月　地震津波避難訓練**（予告なし訓練）**
１１月　火災避難訓練**（避難経路の変更）**

３）9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

各校の防災教育の取り組みや避難訓練の様子と本校を比較しても他校より進んだ防災教育を実践していること思われるが，「生徒の命を守る」という使命を遂行するには常に想定を越える災害，予期しない生徒の行動を検証し，防災・減災教育を更新していかなければならない。

助成金は，①伝承館での語り部活動中の災害を想定し，避難及び誘導で使用できる**「トランシーバー」**を購入し，館内（旧校舎内）での通信状況を確認した。②避難訓練の内容検討について，避難場所の変更を即座に行い，生徒を誘導できるように**「ハンドマイク」**を購入した。どちらも，災害により電源が確保できないことを想定し，津波であれば襲来までの時間，安全に避難誘導できることを第一優先とした。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

「前年度のとおり」学校でよく聞かれる言葉ではあるが，防災教育に関しては，非常に危険な言葉である。

今回の研修を通して改めて，見直し・更新の必要性を痛感した。個人的には幼少の頃から，津波の恐ろしさを祖父から聞いていたが，祖父の経験した津波より被害は大きい。また，今後予想される津波も，震源地や規模により波のベクトルや到達までの時間が異など，東日本大震災とは別な災害と考えるべきである。

また，台風・豪雨災害等も想定した学校（地域）独自の災害研究や伝承も必要である。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。
避難に決まりはなく，「安全な場所」を探して行動することが大切である。今年度の予告なし訓練については，朝の登校中に実施した。登校中の生徒の誘導を実施したが，「生徒の判断・行動」「教員の誘導」等反省点も多々あり，通常の避難訓練より，先生方から多くの意見や感想が聞くことができた。また，事後指導やアンケートからも教室からクラス毎の避難訓練より，次回の訓練（災害）に備える個の意識は高まったことが分かった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
変更することにより「更新していくもの」という意識が生まれる。「前年度と同様」を繰り返すと「変わらないもの」という意識になり，変化を嫌う。保護者・地域の方々も含めて，「避難訓練は状況に合わせて変更する」と理解していただける。また，何より安全な避難を模索することに対して，多くの意見は出されるが反対する人はいないと考える。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
常に「震災前」の意識付けを念頭に，事前指導・訓練・事後指導を繰り返している。非難場所の変更は，今後も実践の必要があると考えられる。また，伝承館にて語り部ガイドを実施している生徒については，ガイド中に発生した災害に対して，安全に誘導（ガイド）するためにも，適切な指示を仰ぎ，判断・行動するように意識付けを行うことができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
次年度については，予告なしの避難訓練を実施が望ましいが，教員側（避難誘導する側）は準備しているため，全ての関係者に対しても，予告なしの訓練の実践を試みたい。また，語り部クラブについても，学校と伝承館の連携を強化も重要であるが，語り部への参加維持をする上でも「語り部の環境づくり」も重要である。今後は，地域クラブへと発展できるよう関係機関と調整し進めていきたい。

７）その他（※特にあれば記述）
※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

通信確認

避難誘導①

避難誘導②

避難誘導③

| | |
|---|---|
| 学校名 | 宮城県多賀城高等学校 |
| 担当教員名 | 髙橋　雄 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 東日本大震災メモリアル day 2022 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　　総合的な探究の時間　　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（〇）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（〇）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（〇）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　1・2　学年　554　人）＋（県内外他校学生　47　人）＝601 人 |
| 活動に携わった教員数 | （本校）55　＋（他校）19　＝　74　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 10　人　【保護者・地域住民・その他（　大学教員・マスコミ関係者　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　2023　年　1　月　20　日　～　西暦　2023　年　1　月　21　日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（〇）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

1）活動の目的・ねらい

全国の高校生が，東日本大震災の経験と教訓を後世に継承し，意見交換するとともに，自らの住む地域の防災・減災に関する課題や取組の成果を発表する。一同に会し相互発信することをとおして，国内外の防災・減災に貢献する人材の育成をはかる。

2）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

**【2023 年 1 月 20 日（金）】**　第 1 日目

| | |
|---|---|
| 13:20～13:40 | 開会行事（開会宣言・挨拶・学校紹介及び決意表明　等） |
| 13:40～14:10 | 全国参加校による学校紹介 |
| 14:20～15:10 | 基調講演「防災のための“技術を開発する”ことと“技術を利用する”こと」<br>東北大学災害科学国際研究所　教授　佐藤　健　先生 |
| 15:20～16:10 | グループワーク「技術がもたらす防災」 |
| 16:10～17:00 | 参加校への校舎および周辺案内（案内役：本校災害科学科２年生徒）<br>案内場所：津波避難道路標識・仮設住宅・津波波高標識 |

**【2023 年 1 月 20 日（金）】**　第 2 日目

| | |
|---|---|
| 9:30～9:45 | 全体会・諸連絡 |
| 9:45～11:00 | ポスターセッション（全 78 題） |
| 11:15～11:45 | 講評<br>東北学院大学教養学部地域構想学科　教授　和田　正春 |
| 11:45～12:00 | 閉会行事 |
| 13:00～14:30 | 津波伝承まち歩きツアー（希望者） |

【参加校】

北海道釧路湖陵高等学校，北海道室蘭栄高等学校，岩手県立釜石高等学校，福島県立相馬総合高等学校
福島県立磐城高等学校，福島県立白河高等学校，桜美林高校，大阪府立高石高等学校，関西学院千里国際中高等部
神戸大学附属中等教育学校，兵庫県立舞子高等学校，高知県立大方高等学校，鳥取県立鳥取西高等学校
宮城県気仙沼向洋高等学校，宮城県仙台第三高等学校，宮城県古川黎明高等学校，多賀城市立東豊中学校

3）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

9 月研修会での学びから本実践に活かしたことは，外部団体との連携とネットワーク構築である。特にネットワークの構築については，防災・減災教育における専門性の向上や多角的な視座の獲得，多様な主体と協働することを通じたカリキュラムの持続的発展に極めて有用なものであり，これら 3 つの観点を重視したプログラムを計画することでより効果的に防災・減災にかかわる人材育成をはかることができた。

また，補助金を活用して生徒が着用する巡検用ベストを更新したことで，本校の活動を内外に広く PR することが可能となり，さらに多くの地域関係者等との交流を生み出すきっかけをつくることができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

東日本大震災の伝承と防災・減災活動の科学的探究を中心として防災・減災のリーダーを育てることを目的とした本実践において，地域や外部専門家を巻き込んだネットワーク構築の視点を取り入れたことにより，将来の防災・減災活動のリーダーとして多角的な視座に立った知見の獲得，多様な主体と協働しながら防災・減災活動を発展させるマインドの醸成という２つの点において大きな成果を得ることができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

本実践において，生徒は防災や減災に対する多様な見方や考え方を学ぶことを通して，自らの地域における防災・減災の課題についてより深く探究する力を獲得しただけでなく，同年代の生徒と協働することで，防災や減災活動に主体的に取り組む態度や，継続的に防災・減災活動に関わろうとする姿勢を身につけることができたと捉えている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

教師や地域関係者にとって，本実践は防災・減災についての多様な取組を知ることを通して，これまで獲得していた防災や減災についての理解を更新し，防災・減災活動の重要性を改めて認識することで，防災や減災にかかわる意識を向上させることができるものとなった。さらに，学校関係者以外の多様な主体の参加とネットワーク構築を通じて，これまでの取組の成果を地域社会に還元する役割を果たすことができたと考えている。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本実践では，生徒が主体となって取り組むプログラムを重視した。例えば，専門家による基調講演においてパネルディスカッション方式を採用して相互にコミュニケーションを取りながら知見を深めるように工夫したり，まち歩きツアーについても，生徒が主体となって案内や質疑を行うようにしたりするように計画した。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

実践を通して得た課題として，本実践をより持続的な取組として発展させていくことが挙げられる。防災や減災が国際的な課題として認知されつつあることから，よりグローバルな視点を取り入れることが必要であると考えている。これらの課題について，次年度以降も外部団体の専門性やネットワークの力を活かして改善を図りたい。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

【１日目】基調講演

【１日目】グループディスカッション

【２日目】ポスターセッション

【２日目】津波伝承まち歩きツアー

| | |
|---|---|
| 学校名 | 酒田南高等学校 |
| 担当教員名 | 佐藤　葵 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 「自分ごと」の防災学習　～コースの特色を生かした防災意識を高める学習～ |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　総合的な探究の時間、LHR（進路学習）、家庭科、課外活動、英語　） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（　）地域連携　（○）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（○）体験学習<br>（○）学校間・地域間交流　（○）教科連携　（　）地域発信　（○）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　1,2,3 学年　　174 人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 6　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 0　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　2022　年　6 月　30 日　～　西暦　2023 年　3 月　31 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（　）津波　（○）台風　（○）洪水　（○）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

①防災についての知識を得て、命を守る行動をとることができる能力を育成する。

②コースごとの活動で、自分たちにできることを考え、共有・発信することで、学校全体の防災意識を高める。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

＜食育調理コース＞

**◆尾西食品×酒南　防災教室**

食に関する勉強を日々頑張っている食育調理コースならではの視点・経験から、防災について考える機会を得るため、尾西食品株式会社様のご協力で、非常食について学び、実食を伴う防災教室を実施。

日時：2022 年 8 月 29 日（月）　10：55～12:40（3-4 時間目　調理実践）

参加者：食育調理コース２年生２７名、食育調理担当教員３名

内容：・非常食を体験しながら、防災や備えの大切さを学ぶ。（ローリングストック、アルファ米について）

・食に関する勉強をしている生徒ならではの視点・経験を活かし、グループワーク、意見交換を行う。

・発災時には使える道具、施設も限られるが、備えを学び、食の面で人々を支えることを意識、体験する。

・フードダイバーシティ（アレルギー、宗教、年齢など）について知る。

今回試食させていただいた商品

1 アルファ米とカレールーの入った 1 食分のセット　or たけのこごはん

2 米粉で作ったクッキー

＊尾西食品様より上記商品を提供していただいたため、特別進学コースでも後日試食会を実施。

日時：2022 年９月５日（月）　10：55～12:40（3-4 時間目　家庭科）

参加者：特別進学 Z、グローバルコース２年生（１７名）

・日本語がわからない場合どのように伝えるか、などの視点からも非常食について考える。

＜特別進学コース＞

**◆防災スタンプラリー**

東北大学災害科学国際研究所、東北大学学際科学フロンティア研究所、シヤチハタ株式会社が共同で開発した防災を考えるツール「防災減災スタンプラリー」の実施

日時：７月１４日（木）１３：２５　～　１４：１５（５時間目）

参加者：特進 1,2,3 年 Z コース（22 名）教員３名

会場：図書館棟

内容：・東北大学災害科学国際研究所、東北大学学際科学フロンティア研究所、シヤチハタ株式会社が共同で開発した防災を考えるツール「防災減災スタンプラリー」を実施。

・スタンプは東北大学の保田真理先生より貸していただきました。
・図書館棟の避難経路や AED 設置場所などの防災にかかわる場所をチェックポイントとして、スタンプを設置。緊急時の行動をイメージして、生徒はスタンプを押していく。

＜キャリアデザインコース＞
**◆防災週間　防災英語・クイズ**
日時：９月１日（木）～１２日（月）英語および LHR の時間
参加者：教養探求コース１年４組キャリア（３４名）、１年５組キャリア（３４名）、３年３組総合進学（３０名）
内容：フラッシュカード（防災グッズを英訳したもの）を作成し、実施（ハエたたきゲーム形式）。
　　防災クイズ（ミリオネア方式）の実施。

＜観光コース＞
**◆飛島研修**
酒田市の離島飛島は、婦人防火クラブ発祥の地（明治 43 年；1910 年）である。研修で島民の方にそのお話をうかがいたかったのですが、天候不良のため、定期船が欠航となったため、残念ながら研修が中止に。
後日防災英語クイズの実施と、酒田市が作成した動画を視聴した。（飛島津波防災「津波から命を守るために」―Tobishima Island TSUNAMI SAFETY TIPS―）

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

◆9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと
→　小中学生は住んでいる地域に学校があるので、「学校＝地域」であり、地域とのつながりを重視した活動が必要だが、高校生にとって学校の周りは自分自身が認識する「地域」ではないことも多い。特に本校の場合は他県から通学・下宿している生徒も多数在籍している。そのため生徒にとって重要なのは、「その時自分がいる場所で、命を守る行動がとれること」「防災の意識と知識を持ち、守られるだけではなく、もう守る側の人間であるという行動が少しでもできること」であると感じ、高校生の視点に立ってそれぞれのコースでの学びの機会を設けた。

◆研修会を受けての自校の活動の変更・改善点
学校全体での活動よりも、それぞれのコースごとに生徒が「自分にとって役に立つ」と感じられる学びの内容をデザインし、より主体的に行動できるようにした。

４）実践の成果
①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から
　年度当初は各クラスや学年での避難所運営ゲームの実施を考えていたが、コースごとに特色を生かし、生徒が「自分にとってより有益である」と感じる活動のほうが興味を持って自主的に参加できると考え、各コースでの活動に切り替えた。コースでの活動を他コースとも共有することができた。
スタンプ、ゲームなどを使用することで、より楽しみながら防災について考えることができた。毎年義務的にこなすだけになっていた避難訓練にも、スタンプラリーによる工夫が加わり、避難経路を改めて意識し、緊急時にとるべき行動について確認することができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

＜食育調理コース＞
発災時には使える道具、施設も限られるが、備えを学び、食の面で人々を支えることを意識、体験できた。
事前アンケートで、食について日々勉強しているにも関わらず「ローリングストック」について知っている生徒が一人もいなかった。今回オンラインで尾西食品株式会社様からアルファ米について教えていただき、災害時はもちろん、普段の食事や日本の食文化についても考えを深めることができた。

＜特別進学コース＞
防災食品の試食を通してローリングストックやフードダイバーシティについて理解を深めることができた。防災減災スタンプラリーの実施により、自分たちの校舎の防災設備や避難経路を再確認することができた。同時に、少しであるが英語の学習にもつなげることができた。

＜観光コース＞
酒田市の離島飛島での研修は中止になってしまったが、婦人防火クラブ発祥の地であるということや、酒田大火について知る機会を作ることができた。教養探求コースで実施した防災英語クイズを観光コースでも実施できたので、今後は市内での観光ガイド活動に生かせる方法を考える。

＜キャリアデザインコース＞
クイズを用いて防災についての知識を身に着けることができた。ボランティアに部活動単位で参加している生徒もおり、その経験を広めることで、自分たちにできることを改めて意識することができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から
・食育調理コースでの活動を山形新聞に取り上げていただいたため、地域に発信することができた。参加対象ではなかった学年からも、実施を希望する声が上がり、来年度も実施を検討している。
・担当教員が防災士の資格を取得し、酒田市女性防災リーダー研修会に参加し、その内容を生徒に還元できた。
・特進コース教員もスタンプラリーに参加してもらい、避難誘導などについて改めて意識することができた。

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点
・防災をより「自分ごと」として考える活動となるように、各コースの特色や、生徒のニーズ・興味関心に合わせた活動をデザインした。内容を充実させるために、尾西食品株式会社様、東北大学災害科学国際研究所の保田真理先生にご協力いただいた。教員がすべて指導しようとするのではなく、必要に応じて専門家の力をお借りした。教員も生徒と一緒に学ぶ機会を得ることができた。
・クラス、コース単位で小さな活動から防災教育を広げることができた。活動に協力、理解してくれる教員を徐々に増やしていった。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望
・本校のようにコースが多岐にわたり、異なるカリキュラムを実施している場合、一斉に同じ活動を行っても効果が得られない。防災をより「自分ごと」にするためには、生徒の興味関心をよく理解し、活動に取り入れていく必要がある。クラス・コース単位の活動は、目標の設定・達成がしやすく、生徒の理解度も高かった。しかし他コースの活動の情報共有がたりず、魅力が伝わりづらかった。

７）その他（※特にあれば記述）
※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。
①尾西食品株式会社　防災教室 News Letter
②山形新聞

＜防災減災スタンプラリー＞

＜尾西食品×酒南　防災教室＞

←　活動が尾西食品株式会社様のホームページに紹介されて、その後、文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課 指導係の方から連絡があり、こちらの写真を特別支援用社会の教科書に掲載したいとのことでした。

【教科書の内容】
学校は、大きな地震に対して様々な備えがしてあるということを学ぶ場面で、その備えの１つ「非常食」として取り扱う予定。子供たち自身の目で確かめることを促すため、生徒が非常食を手に取り観察している…　ということを紹介するそうです。

＜防災ゲーム＞

| 学校名 | 福島県立白河高等学校 |
|---|---|
| 担当教員名 | 大槻　涼太 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 白河市における東日本大震災からの復興　～高校生による地域連携の実践を踏まえて～ |
| 主な教科領域等 | 地理歴史科「地理総合」、通年「総合的な探究の時間」、希望者による課外活動（ゼミ） |
| アプローチ | ※該当するものに○をつけてください（複数可）<br>（○）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（○）専門家の活用　（　）体験学習<br>（○）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（○）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　１・２　学年　　３０　人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ５　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ２０　人　【保護者・地域住民・その他（市役所・NPO・ツアーガイドなど　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２　年　４　月　１　日　～　　西暦　２０２３　年　３　月　３１　日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（○）地震　（　）津波　（○）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（○）土砂（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・地域の歴史や土地の成り立ちについて深く理解して、その歴史について語り継いでいくことが、白河市のよりより復興へとつながるという考えのもとで、以下の目的を掲げる。

①東日本大震災の経験から学び、それらを自分事として捉え、その教訓を次の世代へ伝えていく（震災の伝承）

②地域の方々と交流しながら自分の住む地域について深く学び、そしてその成果を他地域に発信していく過程を通じて、地域の魅力を再発見する（地域への愛着）

③学校内外や地域など多様な主体による持続可能な防災・減災ネットワークを構築する（コンソーシアムの形成）

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・2022 年度の希望者による課外活動（震災復興白河ゼミ）について記述

９月末　　減災教育プログラム教員研修会の参加（教員）

１０月初旬　生徒引率の巡検（東日本大震災による白河市の被害箇所：白河小峰城、葉ノ木平地区）

１１月初旬　文化財専門研究員との交流会（白河小峰城や熊本城の石垣復旧に携わる専門家）

１２月下旬　熊本県立熊本北高等学校との現地交流（チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業支援）

１月下旬　「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」報告会（本校代表者３名）、東日本大震災メモリアル day2022 報告会（本校代表者５名）、福島県内高校生による語り部交流会（本校代表者１名）

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

①新潟大学上田和孝先生によるＮ助の必要性を参考にし、白河市を拠点として活動する一般社団法人「未来の準備室（コミュニティカフェ EMANON)」（以下、ＥＭＡＮＯＮと表記）と協働した実践を行った。多様な主体をつなぐＥＭＡＮＯＮのご協力のもと、「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」の中で、熊本県立熊本北高等学校との交流や熊本地震で被災した益城町の復興に携わる方々の取材が実現した。（NPO との協力）

②自分の住む地域の方々との交流、同じく被災した地域の語り部との交流といった現地での交流を心がけた。実際に被災した地域に出向き、その被災状況や復興状況をみたり、被災した方々の生の声を聴いたりしたことで、より当事者意識をもち、復興の在り方について考えるきっかけをつくることができた。（現地での巡検・交流）

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・白河市の文化財専門研究員のお話をお伺いする中で、専門性の高いお話をお伺いすることができた。

・多様な地域とのネットワークを気づくＮＰＯとの交流のなかで、様々な交流の機会をつなぐことができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・１０月～１１月　白河市内の巡検・文化財専門研究員との交流会

東日本大震災による白河市の被害箇所である白河小峰城、葉ノ木平地区の巡検を実施。ガイドの方の説明ので、小峰城の石垣の積み方の豊富さや、その壮大さを知ることができた。その後に、白河市の文化財課専門研究員と

の交流会を実施した。東日本大震災で崩落した白河小峰城の石垣の修復作業に大変な労を要したこと、伝統工法と現代的技術の折り合いなどの修復方法、そしてそれらの知恵が熊本地震で被災した熊本城の石垣の復旧へと活かされていることについて知り、自分たちの住む地域への誇りを感じる機会となった。

・１２月下旬　熊本県立熊本北高等学校との現地交流
巡検ならびに専門家と交流した成果についてスライドを用いてまとめ、熊本北高校の生徒との共有を図った。同年代の高校生に発表する中で、自分の地域について客観視することができ、自分の住む地域に誇りを感じる機会となった。また、熊本県益城町への巡検では、現地の語り部による熊本地震からの被害や復興状況について話を聴く中で、震災によって生じた課題を目の当たりにしたり、震災を契機に町をよりよく創造しようとする町の取り組みに感化されたりし、復興について「自分事」と捉えることができた。

・１月下旬　　他地域の高校生との交流会
更なる地域の発信に向けて、報告会に参加。現地の「語り部」との交流や、同年代で同じ課題意識をもつ高校生との交流を通じて、震災伝承への関心、地域の魅力の再発見、学校内外のネットワークづくりを図っていく。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・震災復興白河ゼミ（浜通りについて発信する２学年との交流）、ＮＰＯとの関わり、白河市役所との関わり
・熊本北高等学校との関わり、多賀城高等学校に参加した全国の高校、県事業における県内高校生同士での対話

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

①地域の NPO との連携、文化財の専門家との交流会を開くなど地域主体との積極的な交流を図った。
②熊本北高等学校、多賀城高等学校震災メモリアル day、語り部交流事業への参加など、東日本大震災や熊本地震の被災地に出向き、現地の「語り部」と交流する機会や、同年代の高校生同士で語り合える機会を多く提供した。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

①本年度の実践は、期間の都合上メンバーを選定しての実践となった。来年度からは学年単位で声掛けを行い、組織的かつ継続的な指導を行っていきたい。また、本交流の内容は来年度の新入生に引き継ぎ、学年を超えた交流を図っていきたい。
②同じ課題意識を共有する白河市の小中ならびに高校との連携を図っていきたい。
③昨年度・今年度と続いてきた熊本県との交流を今後とも継続的に図っていきたい。

７）その他（※特にあれば記述）

①小峰城の巡検

②文化財専門研究員との交流会

③熊本北高校との交流写真

④東日本大震災メモリアル day の発表ポスター

| | |
|---|---|
| 学校名 | 長野県松本深志高等学校 |
| 担当教員名 | 教諭　林　直哉 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 高校生が企画する自校避難所開設マニュアルづくりワークショップと防災教育への応用 |
| 主な教科領域等 | 教科領域　特別活動（自主活動）・（全校防災教育）・総合的探究の時間 |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（〇）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（〇）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　地域交流委員会・放送愛好会　18 名　全校　９２０人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ６０人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | ３７人　【保護者・〇地域住民２５人・〇その他（松本市　危機管理課　１２人）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　2022 年　1 月 10 日　～　西暦　2023 年　1 月 24 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（　）津波　（　）台風　（　）洪水　（　）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

地域・行政と連携し、「避難所開設マニュアル作成のためのワークショップ」を実施、ここから得た知見をもとに開設マニュアルを作成し、本年度の全校防災教育（避難訓練）を具体的かつ有効な時間とするために取り組む。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

(ア)本校生徒が進行し、地域代表・松本市・本校職員が参加した避難所開設準備会を開催
(イ)準備会を経て「避難所開設マニュアルづくりワークショップ」を企画し開催
(ウ)ワークショップの知見を整理し、ＨＣＤの視点で「避難所開催マニュアル」を作成
(エ)ワークショップの知見から、本校避難訓練を見直し「家族との安否確認のための伝言ダイヤル実践」
(オ)ワークショップの知見をもとに学校長に対し自助に関わる災害備蓄を「関係生徒請願・要請」
(カ)「県内高校の自助に関わる災害備蓄調査と備蓄品確保」をと県議会に請願
(キ)長野県知事の要請で１時間の意見交換
(ク)教育長の要請で、教育長・教育次長と意見交換　ならびに、再度お礼と意見交換

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

〇　「避難所開設マニュアルの制作」パート２（貯水タンクからの水確保）実施できた。
〇　全校避難訓練のプログラムが検討され、「ＮＴＴ伝言ダイヤル」を利用した安否確認の体験実施が行えた。
〇　関係生徒により県内高等学校の「自助に関わる災害備蓄の請願・要請」が実施できた。
〇　実践を映像として記録し、ドキュメンタリー作品として制作できた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

〇　「避難所開設マニュアルの制作」パート２（貯水タンクからの水確保）が実施できた。
貯水タンクからの非常用飲料水配給方法（手順）について、地域も含めて確認することができ、配給に必用なバック、個別に受水するためのペットボトルの必要性が確認された。

〇　全校避難訓練のプログラムが検討され、「ＮＴＴ伝言ダイヤル」を利用した設定・安否確認体験が行えた。
災害時、電話連絡が行えない場合を想定し SNS を含めた複数の安否連絡手段の確保を確認した。中でも、「伝言ダイヤル」を全員が活用できるよう体験利用を行った。この実践は家庭の防災意識向上にも寄与した。

〇　「関係生徒の請願・要請により」自助に関わる災害備蓄の実現
関係生徒は、他県の備蓄事例（岐阜・静岡・山梨他）を調査したうえで、県内の高等学校が災害発生初日における自助の備えを全く考えていない事実を明らかにし、一人１㍑の飲料水・一食分の食料・防寒アルミシート・トイレキットを備えるよう学校長に要請、備蓄を実現した。
県内全高校にもこの備えが必要であると県議会にも請願し本会議で取りあげていただいた。その後、県知事、教育長との意見交換が実現し、県内高校の備蓄が動き始めた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

○　避難所開設マニュアル製作　水・タンク編

どうしたら初めて扱う人が貯水槽から水を給水し配給できるか、HCD の視点からトライ＆エラーを繰り返しながらマニュアルを作成した。「わかること」の難しさ、感覚的理解の重要性を認識した。

○　関係生徒による県内高等学校の「自助に関わる災害備蓄の請願・要請」

防災・減災は、個別の問題ではなく「地域」を巻き込んだ広い見知で備えなければならない点を痛感し、「実態を知ってしまった責任」という表現で強い使命感をもって関係機関に要請・請願し、被災直後の自助の準備をすすめ、またに指定避難所の備品整備をおこなうきっかけにもなった。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

○　災害（特に地震）は、性・年齢・社会的地位・経済的地位に関係なく、全ての人に平等に降りかかる。防災を考えることは「あらゆる人と協力していかに生き抜くか」考えることであるとを再確認できたことが最も大きな成果であった。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

○　高校生を中心に「市危機管理課・地域作りセンター・町会・教職員」が協働して地域防災について考えるテーブルが用意できたこと、危機管理課がレクチャーではなく「高校生と同じ目線」で課題について助言し、参加者の発見を支援できた点が、今回の実践の特筆すべき点である。

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

○　上記したが、高校生を中心協働して地域防災を考えるテーブルが用意できたことが全てを進める力となった。

○　危機管理課が行っている「レクチャー中心の防災教育」では得られない知見が生まれたが、これを広くワークショップデザインに昇華していく必要がある。

（活動関連写真）

長野県議会に請願し、質問を傍聴する関係生徒

教育長・県知事との意見交換

「避難所開設マニュアルをつくるワークショップ」関係写真

ワークショップパンフレットと整備された７年保存水

| 学校名 | 関西学院千里国際高等部 |
|---|---|
| 担当教員名 | 米田　謙三 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 未来の社会をつくる資質・能力を育む―防災・減災の知識を基盤に― |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　地歴公民、情報　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（〇）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（　）学校間・地域間交流　（〇）教科連携　（　）地域発信　（〇）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　高１・高３学年　　５０人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | ２　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | １０　人　【保護者・地域住民・その他（日本赤十字社、NPO 団体、企業）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　２０２２年６月１日　　～　　西暦　２０２３年３月３１日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに〇をつけてください。複数可。<br>（〇）地震・（〇）津波・（〇）台風・（〇）洪水・（〇）河川氾濫・（〇）土砂その他（人的災害・社会災害） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

１,自分たちが暮らす地域の災害・社会の特性や防災科学技術等についての知識を備え、減災のために事前に必要な準備をする能力、2. 自然災害から身を守り、被災した場合でもその後の生活を乗り切る能力、3. 進んで他の人々や地域の安全を支えることができる能力、4. 災害からの復興を成し遂げ、安全・安心な社会を構築する能力、といった「生きる力」を涵養し、能動的に防災に対応することのできる人材育成をねらいとする。自然災害に対して正しい知識をもち、自ら考え、判断し、危険から身を守る行動をとることのできる「未来の社会をつくる資質・能力」と「探究するチカラ」を育成する。特に南海トラフが起こす「災害文化」に最新の知見を反映し、現代の科学技術（ICT 活用）と融合させ、持続的に発展させ、浸透を図る。また、自分たちの地域の自然や文化と共生する能力を有する人材の育成を目指す。

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

（１）2022 年度の防災・減災教育の全体計画

**学校全体**　防災・避難訓練（これは学校のこのプログラムに関係なく学校として実施している。）

**教科**　高校地理総合高１必修：「自然環境と防災」では，課題探究活動を行い，自然災害への備えや対応について知識を身につけ，ハザードマップや新旧地形図を読み取りまとめる技能を身につける。情報：ICT リテラシー、GIS 活用　および南海トラフ地震をテーマに課題解決型学習を実施する。ビジネスモデル：SDG s の取り組みとして「地域性を踏まえた防災について」持続可能な地域づくりなどに着目して，主題を設定し，自然災害への備えや対応などを多面的・多角的に考察し，表現する。

**プロジェクト　外部連携**　１．日本赤十字社との連携（防災・減災・国際交流プログラム）２．大阪千早赤阪村との連携（村おこしプログラム）３　地域企業と連携（SDG s カードゲーム作成プログラム）４　SNS 関連の会社と連係

（２）本助成で実施した具体的な計画・内容

高校地理総合高１必修：「自然環境と防災」では，災害とは何かを自分たちで考え、マインドマップ形式でまとめてそのあと実際にその中から一つテーマをしぼりそのテーマについての授業案をグループで深めた。災害への備えや対応について知識を身につけ，ハザードマップや新旧地形図を読み取りまとめる技能を身につけた。また地域創生をテーマに個人では自分で地域を一つ選びその地域の課題や問題点を見つけた。このとき東日本大震災により壊滅的な被害を受けたが様々な人の立場や想いに配慮し、住宅や魚市場などの建設を行い、復興の足がかりをつくった宮城県牡鹿郡女川町の復興・まちづくりプロジェクトを参考にした。また日本赤十字社大阪府支部の方に講演いただき、赤十字社が取り組む防災について理解を深めた。情報：特に、GIS と GPS 活用をテーマに課題に取り組んだ。ビジネスモデル：SDG s の取り組みとして「地域性を踏まえた防災について」持続可能な地域づくりなどに着目して，主題を設定し，自然災害への備えや対応などを多面的・多角的に考察し，表現する。

３）９月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

９月の研修会で一番学んだことは「最終的に学習者自身が課題を見つけて、皆で問題を深められるという状態ができなければ、高度な学びは実現しない。たとえ 1 人で課題が見つけられたとしても、1 人だけでは学びを深めることがで

きないため、皆が知識を持ち、皆で深められる状態を作ることが重要である。」ことでした。そのために、前段の調べ学習からかなり時間をとって個人でまたグループで深めることを取り入れた。助成金の活用として具体的に東日本の現地の様子がわかる具体的な実践事例や資料などを得ることができ、それを授業で活用することが可能になった。プロジェクトの進め方の参考になった。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

下記の４つの成果が具体的にあげられる。

１,自分たちが暮らす地域の災害・社会の特性や防災科学技術等についての知識を備え、減災のために事前に必要な準備をする活動をすることができた。

2. 自然災害から身を守り、被災した場合でもその後の生活を乗り切る活動をすることができた。

3. 進んで他の人々や地域の安全を支えることができる能力を身につける活動をすることができた。

4. 災害からの復興を成し遂げ、安全・安心な社会を構築する活動をすることができた。

また能動的に防災に対応することのできる人材育成をねらいともしていたので、自然災害に対して正しい知識をもち、自ら考え、判断し、危険から身を守る行動をとることのできる「未来の社会をつくる資質・能力」と「探究するチカラ」を育成することもできた。(プロジェクト実施も含めて）特に南海トラフが起こす「災害文化」に最新の知見を反映し、現代の科学技術（ICT 活用）と融合させ、持続的に発展させ、浸透を図った。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

生徒自身の「なぜ？」を大切に、考えることを重視する探究型の学びから特に下記の変容があり、あわせて下記のような力を身につけた。

・現代社会の成り立ちを理解するための幅広い知識と深い洞察力 （人文科学の幅広い知識やそれを用いて現代社会を深く理解する力)を身に付けた。

・実社会で必要な高度な技能 （情報を集め、活用する力、批判的に考える力、問題を解決する力、議論する力、創造力、他者と協力する力)を身に付けた。

・「現代社会を生きる市民」としての意識と責任感（社会の課題・多様性・相互依存関係を認識し、市民として社会に積極的に参加する意欲や責任感)を身に付けた。

・大学などの高等教育に対応できる基本的技能・姿勢 （授業への積極的参加、自己管理能力、自己分析力、学習に対する自律心など)を身に付けた。

・実社会に必要なスキル(ディベート、討論、プレゼンテーション、レポート・小論文作成、エッセー(小論文)作成など)をしっかり習得した。

・グループワークやプロジェクト学習を通して、生徒同士が「協力し、互いに学び合う、高め合う」姿勢を育むことができた。

・地球市民としての責任感や幅広い視野を身につけた。

・BYOD や貸し出しされるデバイスやデジタル教材などを効果的に活用ができた。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

下記の３つの視点を注意して取り組めた

【本質を理解する力】

・目標/目的が学校全体で共有されている

・校内の課題（現状）を理解することができる

・持続可能な開発のための教育（ESD）の意味を考える場がある

・カリキュラムと学校運営の両方に ESD の意味を位置づけている

【つながる力】

・学校外の人と信頼関係を構築することができる

・学校内の取組を社会に広げて考える

・学校を地域の学びの中心に据える

【学び続け改善する力】

・教員の学ぶ時間が確保されている

・子どもと共に学ぶことができる

・ライフワークバランスを整えることができる

・教育課程を ESD の視点で捉えなおすことができる

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

今回は宮城県牡鹿郡女川町の復興・まちづくりプロジェクトを参考にした。授業の中で「100 年先も魅力的なまち」について、イメージマップを使って考えを広げさせることができた。そのときまちづくりに大切な様々な視点（「住民」「つながり」「インフラ」「産業（観光・教育など)」・・）を取り上げることができた。まちには様々な人が住み、その様々な人の立場で、魅力的なまちを考えていくワークを入れることができた。防災の視点では、まちづくりに大切な４つの視点（上記１番の４つの成果）を知り、自身の課題の設定にいかすだけでなく地域へも発信することで地域への波及も実施できた。プロジェクトを具体的に立ち上げ実施することができた。特に大阪にある唯一の村である千早赤阪村と一緒にまちおこしを考えるプロジェクトと大阪の企業を巻き込んだ SDGs カードゲーム作成プロジェクトをたちあげ、行動につなげることができた。

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

**得られた教訓**

まちづくりの防災の視点

・子どもも大人も避難しやすいようにする ➡ そこに住む人の様々な立場の想いを受け止める。
・安心して住める高台の住宅・避難場所 ➡ 必要なヒト・モノ・コトを考える。
・何よりも優先し、少しでも早く完成させる ➡ 時間・期間を考える。
・人がまちに戻り、愛着をもてるように ➡ 未来を見すえて考える。

まちづくり（特に防災・減災）に関しては、様々な立場・そこに住む人の想いを大切にすることが必要であることをみんなで理解することが大切である。

**課題及び次年度以降の具体的な実践案**

いったんこの助成をいただいての企画はこれで終わりとなるが、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養い災害に関する探究的な学習を通じて主体的に防災に関わる人材を育てることも引き続き目指していきたいと考える。

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

| | |
|---|---|
| 学校名 | 大阪府　建国高等学校 |
| 担当教員名 | 高木拓自 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 住吉区における外国人のための「防災パンフレット作成」及び学生主導の合同避難訓練 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（　生徒会活動・課外活動　） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（〇）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（　）体験学習<br>（〇）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（〇）地域発信　（　）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （　　学年　　約２０人）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 3　人 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 約 80　人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦　2021　年　4 月　1 日　～　西暦 2023 年　3 月　26 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（〇）津波　（〇）台風　（〇）洪水　（〇）河川氾濫　（　）土砂　（　）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

・災害発生時に後回しにされやすい外国人避難者への対応力強化

・言語が通じない避難者にも、適切に食料や必要な医療などの支援が届くようにする

・主として、受付などを担当する職員や地元住民のリーダーに外国人対応のスキルを身に付けてもらう

２）実践内容・実践の流れ・スケジュール（※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい）

・2023 年３月２６日（日）山之内小学校を使用して、住吉区役所地域課、地元住民、国際交流センターより外国人５名、建国高等学校より教員３名と生徒７名が参加し、外国人避難者への受付をいかにして行うか、に目的を置いた避難訓練を実施した。事前準備として、日本語・英語・韓国語・中国語の案内プレートを作成し、避難所に来た外国人が日本語が分からなくてもスムーズに受付できるように訓練を通して問題点などを共有した。

受付表もそれぞれの言語で準備し、指差しでコミュニケーションを図りながら訓練を行ったり、言語アプリ「ボイストラ」と「グーグル翻訳」を使いながら、どの程度コミュニケーションが図れるのか、時間がかかるのか、問題点や改善点について全体で共有することができた。

３）9 月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。
昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

・他校さんが取り組まれていた、段ボールベッドなどの災害対策グッズを住吉区でも取り入れることができた。

４）実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

・防災意識の高まりが浸透できていない中で、全国の各校の皆様が取り組まれていることや実践事例を参考にしながら地域社会及び学校に持ち帰ることができたおかげで、様々な意識改革ができた。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・生徒たちが自ら考えて提案したり、実践したことを教員だけでなく地元住民の皆様にも還元することができる機会でもあり、防災教育を通じて地元住民との交流や生徒が持っている言語力を生かして社会貢献ができる１つの事例として、生徒たちには大きな経験となり、積極的に社会貢献に取り組むきっかけになったのではないかと考えている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

５）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

６）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

７）その他（※特にあれば記述）

※写真や画像、補足資料などがある場合は添付してください。写真は別途元データ（JPEG）もご提供ください。

| | |
|---|---|
| 学校名 | 愛媛県立松山工業高等学校 |
| 担当教員名 | 藤原　清人 |

| | |
|---|---|
| **活動のテーマ** | 災害に強く、住み続けることができる地域づくりに貢献できる人材の育成 |
| 主な教科領域等 | 教科領域（総合的な探究の時間・専門教科（工業）） |
| アプローチ | ※該当するものに〇をつけてください（複数可）<br>（〇）地域連携　（　）避難訓練・避難所運営　（　）専門家の活用　（〇）体験学習<br>（〇）学校間・地域間交流　（　）教科連携　（〇）地域発信　（〇）カリキュラム開発 |
| 活動に参加した児童生徒数 | （本校：１～３学年約 378 名・中学生約 239 名・小学生約 87 名・大学生約 32 名）（複数可） |
| 活動に携わった教員数 | 高校：12 名　中学校：43 名　小学校：34 名 |
| 活動に参加した地域住民・保護者等の人数 | 約 129 人　【保護者・地域住民・その他（　　）】<br>※児童生徒・教員以外で活動に参加する人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。（複数可） |
| 実践期間 | 西暦 2022 年４月１日　～　西暦 2022 年３月 20 日 |
| 想定した災害 | ※該当するものに丸をつけてください（複数可）。<br>（〇）地震　（〇）津波　（〇）台風　（〇）洪水　（〇）河川氾濫　（〇）土砂　（〇）その他（　） |

活動報告

１）活動の目的・ねらい

SDGs の考え方を地域防災に生かし、地域と連携することにより持続可能な街づくり及び地方創生について自分ごととして考える態度を身に付けさせるとともに、持続可能な社会に向けての防災リーダーを育成する。

２）実践内容

⑴ 地域との連携

ア　松山市との連携と NPO 団体登録

令和元年度に、防災士の養成（高校生・教職員含）や防災訓練など、松山市の防災対策に協力している事業所に与えられる防災協力事業所の認証を松山市内の学校で初めて取得した他、松山市が令和２年度に「SDGs 未来都市（33 都市）」及び「自治体 SDGs モデル事業（10 事業）」に選定されたことから、松山市 SDGs 推進協議会にも所属して連携している。また、NPO 団体として登録し市民の方々と交流を行っている。

イ　愛媛大学との連携

愛媛大学の松山防災リーダー育成センターと連携し、様々な地域活動に参加するとともに、本校防災リーダーはジュニア防災リーダークラブにも所属することで、小中高大学生と協働して各種イベントや出前授業を実施している。

図１　ジュニア防災リーダークラブ発足式の様子

⑵ 出前授業

生徒主体の出前授業を小中学校で５回実施した。また、課題研究等で製作した防災グッズを活用した出前授業においては、防災リーダーの他にグッズ（アルコール噴霧器等）を製作したメンバーも参加し、ものづくりの PDCA サイクルを考えるよい機会となっている。

ア　小学校での出前授業

高浜小学校において、総合的な学習の時間を活用した「防災まち歩き」や「防災マップづくり」を児童と一緒に行った。防災まち歩きでは、地域の防災士や PTA、愛媛大学の防災リーダークラブも参加して地域に根差した活動となっている。

図２　防災まち歩きの様子

イ　中学校での出前授業

雄新・湯山中学校では、１年生の総合的な学習の時間に、一人一台 PC やオンライン防災マップを活用してマイ・タイムラインづくりの出前授業を実施した。

図３　出前授業の様子（防災クイズとマイ・タイムラインづくり）

⑶ 高校生防災士の育成

令和元年度から、松山市の協力で防災士の資格取得に挑戦している。令和元年度に２名、令和２年度に４名、３年度は中止、今年度は４名の防災士が誕生し地域や自主防災会等のイベントに高校生防災士として参加している。また、今年度は、隣の伊予市にも協力していただき、伊予市初の高校生防災士が誕生した。

図４　防災士を取得した生徒

⑷ 各種イベントでの啓発活動

ア　あいテレビ×SDGs

大型商業施設で行われた SDGs のイベントに、地域防災への取組をブース展示やステージで発表した。

図５　あいテレビ×SDGs での啓発活動の様子

イ　まつやま環境フェア

松山市で開催されている環境イベントの「まつやま環境フェア」にも参加した。市内の高校生と活動についての意見交換や活動発表、ブースでは「防災グッズづくり」や「マイ・タイムラインを作ろう」と題して、ものづくりを通じた環境啓発活動を行った。

図６　環境フェアの様子

⑸ 交流活動

ア　オンライン高校生県外交流活動

先進的な活動を行っている県外の高校生や大学生とも交流を行っている。今年度は高知県立室戸高等学校と山口県立徳山商工高等学校と交流も行った。お互いの活動内容や課題等を話し合うことで今後の活動の励みになるとともに、対面での交流に向けて楽しく交流している。

図７　オンライン防災交流

イ　大学生交流活動

県内外の大学生とも交流している。今年度は、愛媛大学や愛媛県立医療技術大学、高知大学の大学生とオンライン交流や対面での HUG などのワークショップを行うことができた。年齢の近い大学生との交流は、お互いのよい刺激にもなっている。今後は、各県のイベントにも出前参加することや、協働してイベントを企画できればと考えている。

図８　大学生との交流の様子

⑹ SOF 新聞の発行

昨年度から、本校の活動やイベントの告知、イベント等の参加報告を地域の方々に知ってもらうために SOF 新聞を年４回発行している。この新聞は NPO サポートセンターが行っている配送定期便を活用して、市内の中学校や公共施設等にも配布している。また、企業や大学、自治体などにも掲載する記事をお願いするなど、多くの方に読んでいただけるよう工夫している。

図９　SOF 新聞

⑺ カードゲームの開発

小中学生にマイ・タイムラインづくりを楽しく簡単に行ってもらうために、Card game de マイ・タイムラインの作成を行っている。この作成には、大学生や防災士会、小中学校の児童・生徒や教員の方にも協力いただいている。作成したカードゲームは、出前授業で試行を行った他、校内での研修会にも活用して、ブラッシュアップしている。その他に、オンラインで楽しく学べるカードゲームも開発中である。これは、Web ブラウザで動作するボードゲームオンラインセッション支援ツールを活用したもので、Zoom を併用しながら楽しめるオンラインカード合わせゲームとなっている。これらを用いて、コロナ禍や遠距離であってもつながりながら防災について考えることができると考えている。

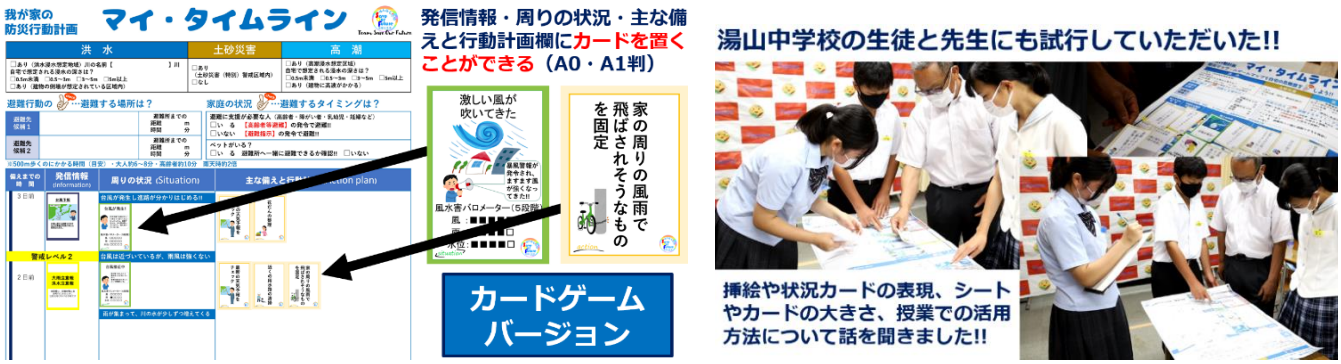



図 10　カードゲームの開発

図 11　オンラインカードゲームの開発

3）研修後の改善点

9月の研修を受け、若者が伝えることの重要性について話し合う中で、防災出前授業のコンセプトを「①誰でも楽しく参加できる」「②誰でもわかりやすく防災について考えることができる」「③オンラインでも実施ができる」の３つとし、楽しく学びながら防災について考えることができる出前授業を中心に活動することとした。また、防災や減災にあまり関心のない児童生徒や地域の方々にも、楽しくわかりやすい防災教材（Card de BOUSAI）を開発することとし、今回の助成金を活用して、来年度カードゲームを製品化して小中学校に配布することとした。

4）　実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

今回の研修に参加して、伝えることの大切さと難しさ、備えることの重要性について考えることができた。生徒にも今回の研修内容を共有することで、自分たちの役割やこれからの活動についてのヒントがあったと思う。「伝えることは学ぶこと」、伝えるためには多くの人とつながり、学ぶことが必要であることを今後の活動に生かしていきたい。

②児童生徒にとって具体的にどのような学びがあり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

この活動を通じて、異世代の方の見方や考え方、様々な取組の目的や課題などを理解するとともに、自分たちが主体的にイベントを計画し運営するために何が必要か、また、参加者に楽しく理解してもらうためには、どのような手法や考え方が必要かなど多くを学ぶことができた。

今後は、この取組に生徒だけでなく、多くの教職員も参加できる仕組みを考えたい。また、イベントや出授業をプロデュースしたり、企業や他の高校生とコラボしたイベント開催や出前授業などを企画・運営できるリーダーシップのある高校生防災リーダーを育成したいと考えている。

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

この活動を通じて、本校教員や保護者からもワークショップや活動に参加していただける方が増えている。また、市内外の企業や自治体から、高校生と防災の学習会やワークショップをしたいとの依頼もある。今後大学生や他県の高校生、海外の高校生等の対面交流ができるよう頑張りたい。

5）工夫した点、実践の特徴・特筆すべき点

本校は、年３回、全校から防災リーダーを募集しており、現在約 30 名が所属している。その活動も多岐にわたり、SDGs の 11 番を中心に学校内外で活動している。また、工業高校の強みを生かし、ものづくり×地域防災の取組やオンラインを活用した全国の児童生徒、大学生との交流では校種の壁を越えてワークショップ等を行うなど楽しく主体的な交流活動を行っている。ぜひ、全国の防災活動を行っている皆さん、一緒にコラボしませんか？

6）実践から得られた教訓や課題と次年度以降の実践の改善に向けた方策や展望

この活動を持続可能な活動とするため、学校として組織的に防災への取組を行うことができるよう、総合的な探究の時間等の在り方や教科横断型の授業のほか、学科横断型や県内実業高校横断型の取組として地域防災を中心とした地方創生プロジェクトに発展させていきたいと考えている。

７）その他

実施スケジュール

| 実施時期 | 実施内容 | 実施学年、参加生徒数、教育活動における位置付け、関係団体・協力者等 |
|---|---|---|
| 4 月 30 日 | 風水害 24 ワークショップ | 防災リーダー・本校生徒・教職員 20 名 |
| 5 月 10 日 | 第一高等学院高等学校防災ワークショップ | 防災リーダー・第一高等学院生徒教職員 18 名 |
| 5 月 14 日 | あいテレビ×SDGs イベントブース参加 | 防災リーダー８名、訪問者 87 名 |
| 5 月 21 日 | 松山市ジュニア防災リーダー発足式 | 防災リーダー12 名・小中学大学生 53 名他 |
| 5 月 28 日 | NPO 活動報告会 | 防災リーダー２名・NPO 団体参加者 28 名 |
| 5 月 30 日 | 徳山商工オンライン交流会① | 防災リーダー8 名・徳山商工 5 名 |
| 6 月 12 日 | SDGs de 地方創生カードゲーム体験会 | 防災リーダー・生徒会役員・生徒有志・教職員 20 名 |
| 6 月 21 日 | 徳山商工オンライン交流会② | 防災リーダー8 名・徳山商工 5 名 |
| 6 月 19 日 | 高知大学オンライン防災交流 | 防災リーダー10 名・高知大学 3 名 |
| 7 月 3 日 | 徳山商工オンライン交流会③ | 防災リーダー6 名・徳山商工 5 名 |
| 7 月 4 日 | 湯山中学校防災出前授業①防災クイズ | 防災リーダー6 名・中学生 78 名・教職員 8 名 |
| 7 月 5 日 | 湯山中学校防災出前授業②マイ・タイムライン | 防災リーダー6 名・中学生 78 名・教職員 8 名 |
| 7 月 16 日 | KDDI 防災ワークショップ（スマホで避難） | 防災リーダー15 名・本校有志 25 名 |
| 7 月 24 日 | 大学交流会（HUG 感染症バージョン） | 防災リーダー4 名・大学生 10 名 |
| 7 月 26 日 | 湯山中学校出前授業インタビュー | 防災リーダー2 名・中学生 4 名・教職員 2 名 |
| 8 月 4 日 | 伊予市職員打ち合わせ | 防災リーダー4 名・伊予市職員 3 名 |
| 8 月 9 日 | サマー･エコキッズスクール（ものづくり×環境） | 防災リーダー8 名・小学生 30 名・保護者 28 名 |
| 8 月 19 日 | 室戸高校オンライン交流会 | 防災リーダー4 名・室戸高校 6 名・教職員 4 名 |
| 8 月 22 日 | 防災士受検 | 防災リーダー4 名 |
| 9 月 20 日<br>～24 日 | ユネスコ減災研修会 | 教員 1 名 |
| 9 月 25 日 | 伊予市交流会 | 本校生徒 15 名・伊予市市民 35 名 |
| 10 月 19 日 | 高浜小学校まち歩き | 防災リーダー8 名・小学生 58 名・松山市職員 3 名・教職員 9 名・地域防災士 12 名 |
| 10 月 27 日 | 高浜小学校防災マップづくり | 防災リーダー9 名・小学生 58 名・松山市職員 3 名・教職員 9 名 |
| 10 月 29 日 | 防災デイキャンプ | 防災リーダー5 名・小中学生 43 名・大学生 17 名・職員 5 名 |
| 11 月 2 日 | 文化祭防災発表会 | 防災リーダー4 名・全校生徒 930 名 |
| 11 月 4 日 | 雄新中学校ワークショップ（3 年生） | 防災リーダー10 名・中学生 220 名・教職員 13 名 |
| 11 月 5 日 | SDGs de 地方創生カードゲーム体験会 | 本校生徒 8 名・伊予市市民 20 名 |
| 11 月 10 日 | 雄新中学校マイ・タイムライン出前授業（1 年生） | 防災リーダー8 名・中学生 180 名・教職員 11 名 |
| 11 月 14 日<br>～18 日 | SDGs 週間<br>（1 年生全クラス防災授業 2 時間×8 クラス） | 防災リーダー8 名・本校 1 年生 316 名 |
| 12 月 4 日 | 高知防災フェスタ | 防災リーダー6 名・地域住民 43 名 |
| 12 月 11 日 | 砥部町ワークショップ | 防災リーダー10 名・地域住民 13 名 |
| 1 月 7 日 | 気候変動ワークショップ | 本校有志 12 名 |
| 1 月 21 日 | 防災ワークショップ（サステナブル） | 防災リーダー10 名・大学生 4 名・防災士 4 名 |
| 1 月 29 日 | 愛媛県防災ワークショップ | 防災リーダー5 名・地域住民 15 名・県職員 4 名 |
| 2 月 5 日 | 高校生環境フェア出展 | 防災リーダー5 名・他高校生 24 名・企業 12 名 |
| 2 月 18 日 | 松山市ジュニア防災クラブ報告会発表 | 防災リーダー10 名・小中高大 85 名・企業 19 名 |
| 2 月 25 日 | 環境 SDGs ワークショップ | 防災リーダー8 名・企業４名 |
| 3 月 5 日 | 砥部町家庭教育研修会 | 防災リーダー10 名・小学生 12 名・中学生 7 名・保護者 7 名 |
| 3 月 9 日 | NHK ラジオ活動報告 | 防災リーダー２名 |